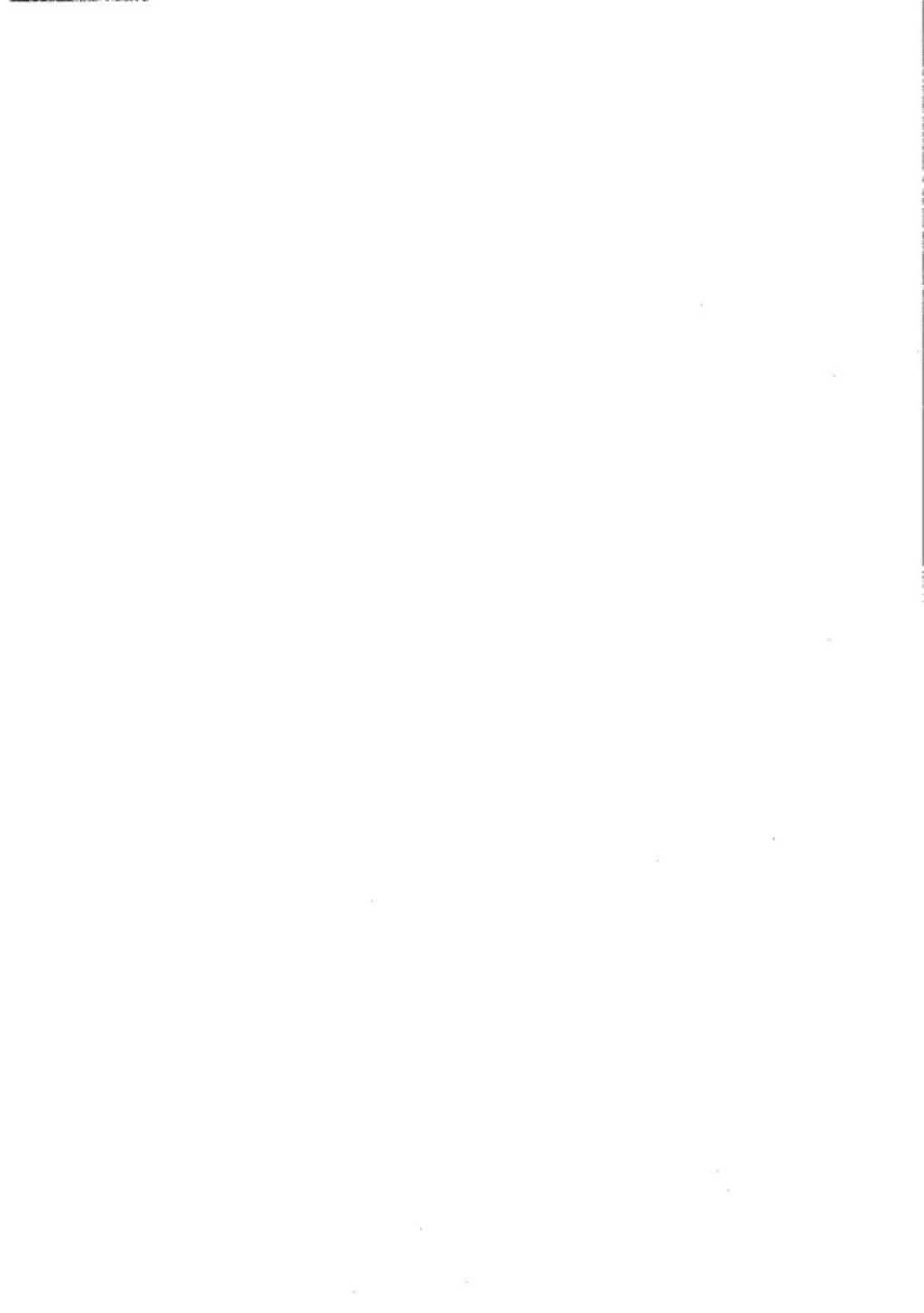


# 陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要

—府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う—

2005年3月

大阪府教育委員会

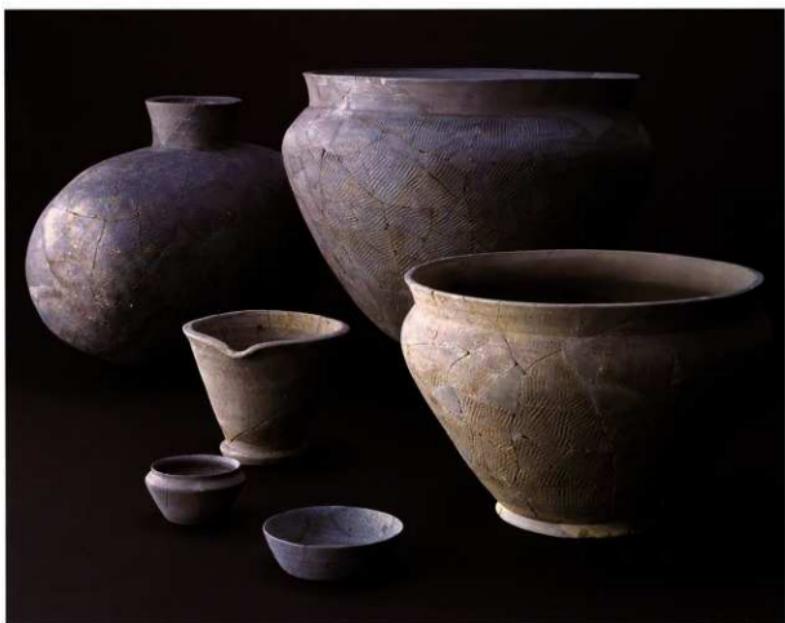




調査区全景航空写真



「泉」線刻須惠器橫瓶



古墳周溝上層出土須惠器

## はじめに

平成3年度に始まった陶器北地区の埋蔵文化財調査は今年で13年になります。発掘調査は陶器千塚古墳群、陶器遺跡、陶器南遺跡の3遺跡にまたがります。毎年度ごとの調査範囲は必ずしも広いものではありません。しかし、13年間の積み重ねは小さなものとはいえない。陶器南遺跡の範囲は大きく西に広がり、それまで遺跡の存在が知られていなかった地域にも、その地に生きた人々の暮らしの痕跡が色濃く埋もれていることが明らかになりました。陶器千塚古墳群では、古く破壊されその存在が忘れられていた古墳が再び姿を現し、分布範囲が東に拡大することも判明しました。

この地は、かつて列島最大の窯業地帯であった陶邑中心部の一角にあたり、これらの古墳や集落遺跡の多くは、古墳時代には最先端技術であった須恵器作りに携わった人々が残したと推定されています。昭和40年代から50年代の前半にかけて、泉北ニュータウンの建設に伴い400基をこえる須恵器の窯跡が発掘調査されました。その結果、古墳時代から平安時代までの須恵器の編年体系が確立され、日本古代史の研究に大きく貢献することとなりました。

しかし、この地で須恵器作りにいそしみ日々の生活を送った人々がどのような暮らしぶりで、作られた製品はどのように日本各地に送られていったのかといった、歴史の具体的な姿はまだまだ分かっておりません。隣接する小角田遺跡、辻之遺跡、田園遺跡等、本来一体のものとして考えるべきであろう諸遺跡も含め、この地に残された遺跡の地道な発掘調査と調査結果の分析をとおして、生活に密着した歴史の真実が明らかにできるものと考えます。そのような作業の一プロセスに過ぎませんが、今回の調査結果が多くの方に利用していただけることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の間、地元のかたがた並びに関係諸機関には多大なご協力を賜りました。あらためて御礼申し上げるとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご協力とご理解をお願い申し上げます。

平成17年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 向井 正博

## 例　　言

1. 本書は、府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う、堺市陶器北所在陶器千塚古墳群、陶器遺跡における発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて、大阪府教育委員会が行った。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ技師山田隆一を担当者として、平成15年7月10日から平成15年12月26日まで行った。  
本概要報告作成にかかる整理作業は、文化財保護課調査第二グループ課長補佐高島徹、主査西口陽一、調査管理グループ技師竹原伸次、同林日佐子、同藤田道子を担当者として行った。
4. 調査に要した費用は、農林水産省と文部科学省の補助金を得、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。
5. 本書で使用した座標は、平面直角座標（世界測地系）第VI系、方位は座標北、標高はT. P.（東京湾平均海面）である。
6. 航空写真測量は、内外エンジニアリング㈱ 大阪支店に委託し、撮影フィルムは同社において保管している。巻頭カラー図版調査区全景航空写真も同社において合成、製作した。
7. 遺物の写真撮影は、㈲阿南写真工房に委託した。
8. 本書の編集は、高島が行った。原稿執筆は、第1章、第2章、第4章を高島が、第3章の構成を高島・山田が、遺物及び遺物観察表を西口が担当した。
9. 調査にあたっては、以下の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して謝意を表します。  
(順不同 敬称略)  
榮原永遼男（大阪市立大学）、中村 浩・犬木 務（大谷女子大学）、樋口吉文（堺市博物館）、北野俊明・森村健一・野田芳正・白神典之・柿沼菜穂・小谷正樹・近藤康司・土井和幸・永井正浩・嶋谷和彦・内本勝彦・続 伸一郎・岩宮未地子（堺市埋蔵文化財センター）、鍋島隆宏（太子町教育委員会）、松村恵司・市 大樹（独立行政法人奈良文化財研究所）、石橋茂登（文化庁）
10. この概要是300部作成し、一部あたりの単価は1,680円である。

## 目 次

第1章 調査にいたる経過 .....	1
第2章 陶器千塚古墳群、陶器遺跡の位置と環境 .....	2
第3章 調査結果 .....	5
第1節 3区 .....	5
第2節 4区・5区 .....	14
第4章 まとめ .....	56
出土遺物観察表 .....	58

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図 (1/20000) .....	3	第21図 4区古墳墳丘断面図 (1/50) .....	20
第2図 調査区位置図 (1/2500) .....	4	第22図 4区古墳主体部平・断面図 .....	22
第3図 3区遺構全体図 (1/100) .....	5	(1/20) .....	23
第4図 3区西壁土層断面図 (1/50) .....	6	第23図 4区古墳主体部壁溝完掘状況 .....	25
第5図 3区遺構断面図 (1/40) .....	6	平・断面図 (1/20) .....	26
第6図 3区出土遺物実測図1 (1/3) .....	8	第24図 4区SB01平・断面図 (1/40) .....	27
第7図 3区出土遺物実測図2 (1/3) .....	9	第25図 4区SB02平・断面図 (1/40) .....	27
第8図 3区出土遺物実測図3 (1/3) .....	10	第26図 4区SB03平・断面図 (1/40) .....	29
第9図 3区出土遺物実測図4 (1/3) .....	11	第27図 4区SB04平・断面図 (1/40) .....	29
第10図 3区出土遺物実測図5 (1/3) .....	12	第28図 4区SB08平・断面図 (1/40) .....	30
第11図 3区出土遺物実測図6 (1/3) .....	13	第29図 5区SB05平・断面図 (1/40) .....	30
第12図 4区西壁土層断面図 (1/50) .....	14	第30図 5区SB06平・断面図 (1/40) .....	31
第13図 5区西壁土層断面図 (1/50) .....	15	第31図 4区古墳周溝内地区割り及び出土土 .....	31
第14図 4区SB05平・断面図 (1/40) .....	16	器群分布図 (1/150) .....	31
第15図 5区SB01平・断面図 (1/40) .....	17	第32図 4区出土遺物実測図1 (1/3) .....	32
第16図 5区SB02平・断面図 (1/40) .....	18	第33図 4区出土遺物実測図2 (1/3) .....	33
第17図 5区SB02柱穴内根石出土状況図 .....	18	第34図 4区出土遺物実測図3 (1/3) .....	34
(1/20) .....	18	第35図 4区出土遺物実測図4 (1/3) .....	35
第18図 5区SB03, 04平・断面図 .....	19	第36図 4区出土遺物実測図5 (1/3) .....	36
(1/40) .....	19	第37図 4区出土遺物実測図6 (1/3) .....	37
第19図 4区古墳平面図 (1/80) .....	20	第38図 4区出土遺物実測図7 (1/3) .....	38
第20図 4区古墳周溝土層断面図 (1/40) .....	20	第39図 4区出土遺物実測図8 (1/4) .....	39

第40図	4区出土遺物実測図9 (1/3) .....40	第46図	4区S B 0 9 平・断面図 (1/40) ...47
第41図	4区出土遺物実測図10 (1/3) .....41	第47図	4区S B 0 6 平・断面図 (1/40) ...48
第42図	4区中世敷地中央建物及び柵列 平・断面図 (1/80, 1/40) .....43	第48図	4区S D 1 7, 5区S D 0 1 土層断面 図 (1/40) .....49
第43図	4区S B 0 7 周溝 S D 6 4 4 土層断面図 (1/20) .....46	第49図	4区出土遺物実測図11 (1/3) .....51
第44図	4区S K 5 2 8, 5 2 9, 5 9 8 遺 物出土状況図・断面図 (1/20) .....46	第50図	4区出土遺物実測図12 (1/3) .....52
第45図	4区S K 6 8 0, 6 1 3 平・断面図 (1/40) .....46	第51図	5区出土遺物実測図1 (1/3) .....53
		第52図	5区出土遺物実測図2 (1/3) .....54
		第53図	5区出土遺物実測図3 (1/3) .....55

## 付 図

4区・5区遺構全体図 (1/200)

## 図 版 目 次

原色図版一	調査区全景航空写真	S K 5 2 9 S D 6 7 1
原色図版二	「泉」線刻須恵器横瓶	図版一三 4区S D 1 7 全景 土層断面
	古墳周溝上層出土須恵器	図版一四 5区S D 0 1 全景 土層断面
図版一	3区 遺物出土状況 全景	図版一五 3区出土遺物
図版二	4区 西半部全景 S B 0 2, 0 5 S B 0 5 柱穴断面	図版一六 3区出土遺物
図版三	5区 西半部全景 東半部全景 S B 0 1	図版一七 3区出土遺物
図版四	5区S B 0 2 及び柱穴断面・根石出 土状況 S B 0 3, 0 4	図版一八 3区出土遺物
図版五	4区古墳 全景 周溝土層断面	図版一九 3区出土遺物
図版六	4区古墳主体部 全景 壁溝完掘状況	図版二〇 4区出土遺物
図版七	4区・5区 4区S B 0 1, 0 3 5区S B 0 5 5区S B 0 5 柱穴断面	図版二一 4区出土遺物
図版八	4区 S B 0 1, 0 8 柱穴断面	図版二二 4区出土遺物
図版九	4区 古墳周溝内土器群出土状況	図版二三 4区出土遺物
図版一〇	4区 東半部全景 S B 0 7	図版二四 4区出土遺物
図版一一	4区 S B 0 6 S B 0 9 S D 6 4 4 土層断面	図版二五 4区出土遺物
図版一二	4区遺物出土状況 S K 5 9 8	図版二六 4区出土遺物
		図版二七 4区出土遺物
		図版二八 4区出土遺物
		図版二九 5区出土遺物
		図版三〇 5区出土遺物
		図版三一 5区出土遺物

## 第1章 調査にいたる経過

大阪府環境農林水産部が進めている府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う埋蔵文化財調査は、府営圃場整備事業「陶器北地区」に伴うものとして、平成4年1月から2月に行った陶器千塚古墳群の試掘・確認調査に始まる。このときの調査は、当面の事業対象地であった陶器千塚古墳群とその隣接地に限定したものであったが、ほぼ全域で遺構・遺物が検出され、平成4年度、5年度の2ヶ年にわたる陶器千塚古墳群の調査へとつながっていく。

平成6年度には当該事業の工事実施地域が、陶器千塚古墳群・陶器遺跡とは陶器川を挟んだ反対側、陶器川右岸一帯に移ることとなったが、平成5年度の試掘調査の結果、この地域でも古墳時代から鎌倉時代にいたる遺跡の存在が判明し、陶器南遺跡の範囲が拡大されることとなった。この結果、当該事業対象地のほぼ全城が、和泉市、堺市、大阪狭山市に及ぶ広大な地域に広がる陶邑窯跡群の範囲内にあるだけでなく、陶器千塚古墳群・陶器遺跡・陶器南遺跡等の遺跡にかかることが明らかとなった。

以後、当該事業に伴う埋蔵文化財調査は、事業の進展に伴って、経年で実施されてきている。足掛け13年に及ぶ年度毎の調査概要は下記の通りである。遺跡名・事業名を異にするため分かり難くなっているが、本概要是、当該事業に伴う埋蔵文化財調査の概要として13冊目になる。

今回の調査では、当初、第1調査区から第4調査区までの四つの調査区が設定されていた。しかし、調査着手後、環境農林水産部より、第1、第2調査区については耕作の関係で年度内の調査実施が不可能となったこと、それに伴い調査依頼箇所を一部変更したいとの申し入れがなされた。これを受け、再度調査計画についての協議を行い、来年度調査予定であった箇所の一部を今年度実施することとし、これを第5調査区として設定した。この決定がなされた時点ですでに第4調査区の調査が進行中であり、結果として、第1、第2調査区は欠番となった。今回の概要報告でも、混乱を避けるために調査時に付与された調査区番号をそのまま使用することとし、第1、第2調査区は欠番扱いとしている。また、第3、第4、第5調査区の名称は、煩雑さを避けた意味で、以後、単に3区、4区、5区と呼称する。

### 府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う埋蔵文化財調査発掘調査概要一覧

有井宏子『陶器千塚発掘調査概要』大阪府教育委員会1992.3

阪田育功『陶器千塚発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会1993.3

辻本 武『陶器千塚発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会1994.3

井西貴子『陶器南遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会1995.3

西川寿勝『陶器南遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府教育委員会1996.3

山田隆一『陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会1997.3

竹原伸次『陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会1998.3

竹原伸次・山田隆一『陶器南遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会1999.3

竹原伸次『陶器南遺跡発掘調査概要・VI』大阪府教育委員会1999.3

地村邦夫『陶器南遺跡発掘調査概要・VII』大阪府教育委員会2000.3

西川寿勝『陶器南遺跡発掘調査概要・VIII』大阪府教育委員会2001.3

西川寿勝・杉本清美『陶器南遺跡発掘調査概要・IX』大阪府教育委員会2004.3

## 第2章 陶器千塚古墳群、陶器遺跡の位置と環境

陶器千塚古墳群、陶器遺跡は、堺市南部に広がる丘陵地帯の一角、その北部に位置する。現在は住宅地と農地が無秩序に入り組み、現地に立っても遺跡の立地条件を即座に把握することが困難なほどであるが、もともとこの地域は和泉山地の末端に当たる丘陵地帯で、幾筋もの小河川に解釈された狭い谷が入り組んだ地形である。その狭い谷地形を利用して、古墳時代中期から奈良、平安時代までこの地域には多数の須恵器窯が作られた。当時列島最大の窯業地帯であった陶邑窯である。

陶器千塚古墳群、陶器遺跡も陶邑窯の一角にあり、陶器川の左岸丘陵上に立地する。遺跡の立地するあたりで標高55～65m。南東から北西に緩く傾斜する地形である。陶器遺跡についてはこれまでさほど大規模な調査の例が無く、平成3年度と14年度に実施した試掘・確認調査によって、掘立柱建物の一部と推定できるピット等が検出され、須恵器等の遺物が出土しているに過ぎないが（有井1992 西川・杉本2004）、陶器千塚古墳群は、当該地域における最大規模の後期群集墳としてよく知られており、樋口吉文によれば、もと63基を数えたという（樋口2004）。同古墳群における発掘調査の歴史は阪田育功によってまとめられており（阪田1993）、出土遺物は樋口によって報告されている（樋口2004）。なお、平成14年度の確認調査で古墳の周溝とも考えられる溝が3ヶ所で確認されており、古墳群の範囲はさらに東に広がる可能性がある。

陶器遺跡の西約200mには、古墳時代後期及び中世の掘立柱建物群等が検出された小角田遺跡（樋口1988）があり、陶器川の対岸には、前述の陶器南遺跡や辻之遺跡、田園遺跡（石田・十河2001）が広がっている。田園遺跡でも古墳時代後期から平安時代の掘立柱建物群が検出されており、周辺には中世の館跡が存在すると推定されている。辻之遺跡は古墳時代後期の須恵器集積場とされる。さらに陶器南遺跡でも古墳時代後期から中世までの多数の掘立柱建物等が検出されており、陶器川左岸のこれらの遺跡は、本来、一体のものとして把握すべき状況にある。

この陶器南遺跡等の乗る丘陵から南側にかけてが、陶邑窯跡群の主要な分布域の一つとして著名な陶器山地区であり、上述の陶器川両岸の諸遺跡は、陶邑窯跡群の中心部の一角ともいえる位置にある。これらの遺跡、とりわけ古墳時代後期から奈良時代までの遺跡が、陶邑窯の具体的姿を描くために欠くことのできないものであることは疑いなく、それは陶器千塚古墳群にあっても同様である。

参考文献

- 有井1992 前掲  
石田・十河2001 石田修・十河稔郎「田園Ⅰ」堺市教育委員会2001.10  
阪田1993 前掲  
西川・杉本2004 前掲  
鶴口1998 鶴口吉文「陶器・小角田遺跡」堺市教育委員会1988.11  
鶴口2004 鶴口吉文「陶器千塚古墳群の出土品—船保管資料の紹介」堺市博物館館報23 堀市博物館2004.3



第1図 遺跡分布図 (1/20000)



第2図 調査区位置図 (1/2500)

## 第3章 調査結果

### 第1節 3区

#### 1. 調査区の形状

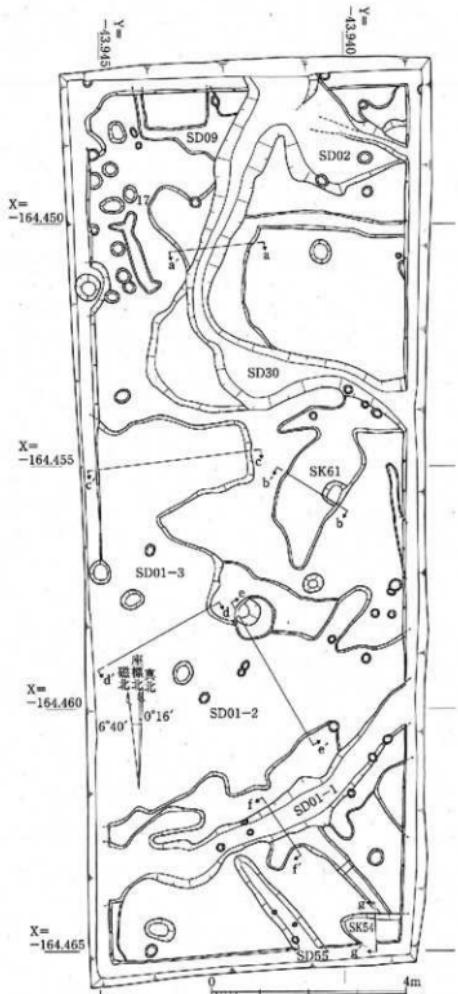
3区は、南北長が東辺18.6m、西辺18.8m、東西幅は北辺7.6m、南辺6.7m、ほぼ長方形の調査区である。面積約134m<sup>2</sup>。標高が地表面で64.8m前後、地山面で64.3m前後。平坦な地形である。

#### 2. 層位

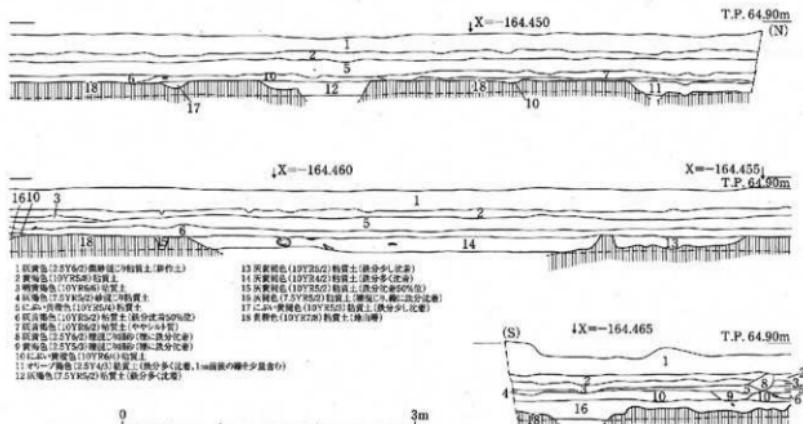
基本層序は、灰黄色(2.5Y6/2)微砂混じり粘質土—耕作土(第4図1層)、黄褐色(10YR5/8)粘質土—床土(同2層)、にぶい黄橙色(10YR5/4)粘質土(同5層)、灰黄褐色(10YR5/2ないし10YR6/2)粘質土(同6層・7層)、にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土(同10層)、黄橙色(10YR7/8)粘質土—地山層と把握できる。南端から2~2.5m付近にブロック状の細砂層(同8・9層)が認められ、南端から4m付近までは2層と5層の間に明黄褐色(10YR6/6)粘質土(同3層)、灰褐色(7.5YR5/2)砂混じり粘質土(同4層)が狭在する。3層から10層までの堆積土は、基本的に黄橙色粘質土と灰黄褐色粘質土の互層で、耕作面の重なりと考えられる。細砂層付近を境にして、南側と北側では耕作面の枚数に違いがあったことになる。

#### 3. 遺構

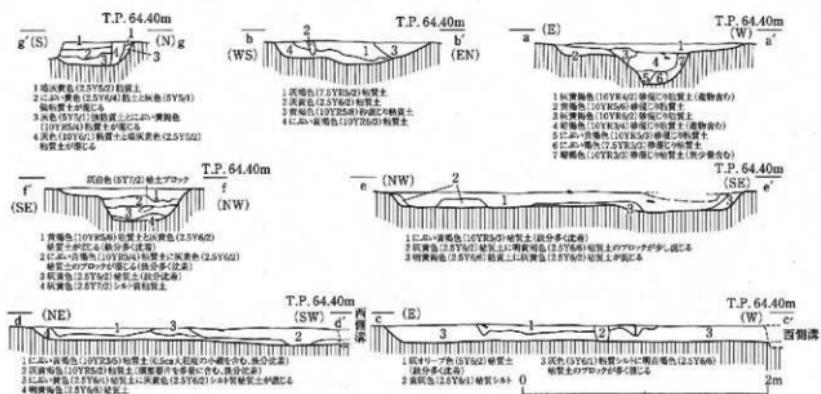
3区では、地山層上面において、多数のピット、土坑、落込み、溝が検出



第3図 3区遺構全体図(1/100)



第4図 3区西壁土層断面図(1/50)



第5図 3区構造断面図(1/40)

されたが、その性格を推定できるようなものはない。北西部では、掘り方のしっかりしたピットが散在し、掘立柱建物のあった可能性が強いが確認できなかった。土坑、溝も多くは不定形で、遺構相互の間に有機的な関連を見出すこともできなかった。これらの遺構は、出土遺物から、大半は古墳時代後期、6世紀代に属すると考えられるが、一部、中世に下るものもある。

## 土坑

### S K O 1 - 2, 3

調査区中央付近から南側に広がる、浅く不定形な落込。東側では幅1.8m程であるが、西端では8.4mにまで広がる。断面は逆台形で、深さ0.10~0.15m。埋土は、東側ではぶい黄褐色粘土質

を主とするが、西辺では灰黄褐色粘質土、その北側では灰色粘質シルトと明黄褐色粘質土の混合土へと変化する。灰黄褐色粘質土中から多量の須恵器が出土している。

#### S K 5 4

調査区南東隅に位置する。長径1.25m以上、短径0.65m以上を測る。検出範囲での平面は長楕円形。断面は逆台形に近く、深さ0.19m。埋土は、暗灰色粘質土、にぶい黄色粘土と灰色強粘質土の混合土、灰色強粘質土とにぶい黄褐色粘質土の混合土。

#### S K 6 1

調査区中央東寄りに位置する。長径約2.8m、短径1.38m。平面は不整形。底面は中央部に向かって緩く湾曲する。深さ約0.2m。中央東側に一辺0.45m、深さ0.2m程で平面隅丸方形の土坑がある。埋土は、灰褐色粘質土、砂混じりの黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土。北端部は、別の遺構と切り合っていた可能性が強いが、確認できなかった。

#### 溝

##### S D 0 1 - 1

土坑S K 0 1 - 2 の南側に沿って東北から南西に走る。東側から中央部付近までの幅は0.6~0.7m。西側で幅を広げ、最大1.2mに達する。断面は逆台形に近い。深さは、東端部で0.1m弱、中央部で0.3m、西端部で0.15mと、中央部がもっとも深い。埋土は、黄褐色粘質土と灰黄色粘質土の混合土、灰黄色粘質土のブロックを含むにぶい黄褐色粘質土、灰黄色粘質土、灰黄色シルト質粘土。

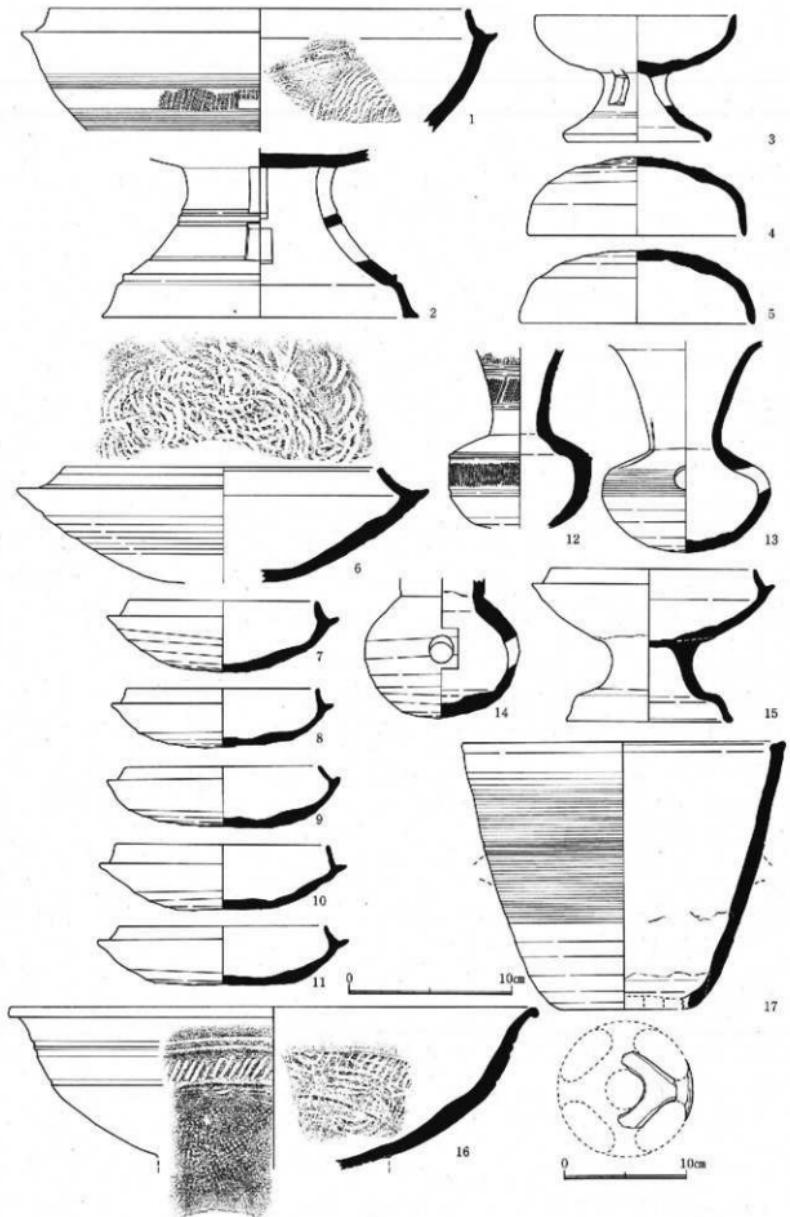
##### S D 3 0

調査区東辺中央部や北寄りから北辺中央部まで、途中で直角に近く屈曲して、東西から南北に走る。幅は0.55~1.45mと変異が大きく、屈曲部では2段掘り状になる。深さも屈曲部の前後では0.3m程を測るのにたいし、東端部、北端部では0.15~0.2mとやや浅くなる。断面U字形。埋土は、灰黄褐色・黄褐色・暗褐色・にぶい黄褐色・にぶい褐色の粘質土であるが、いずれの層にも砂が混じり、流水のあったことがわかる。蓋杯、有蓋高杯、無蓋高杯、短頸壺、甕など多量の須恵器が出土している。

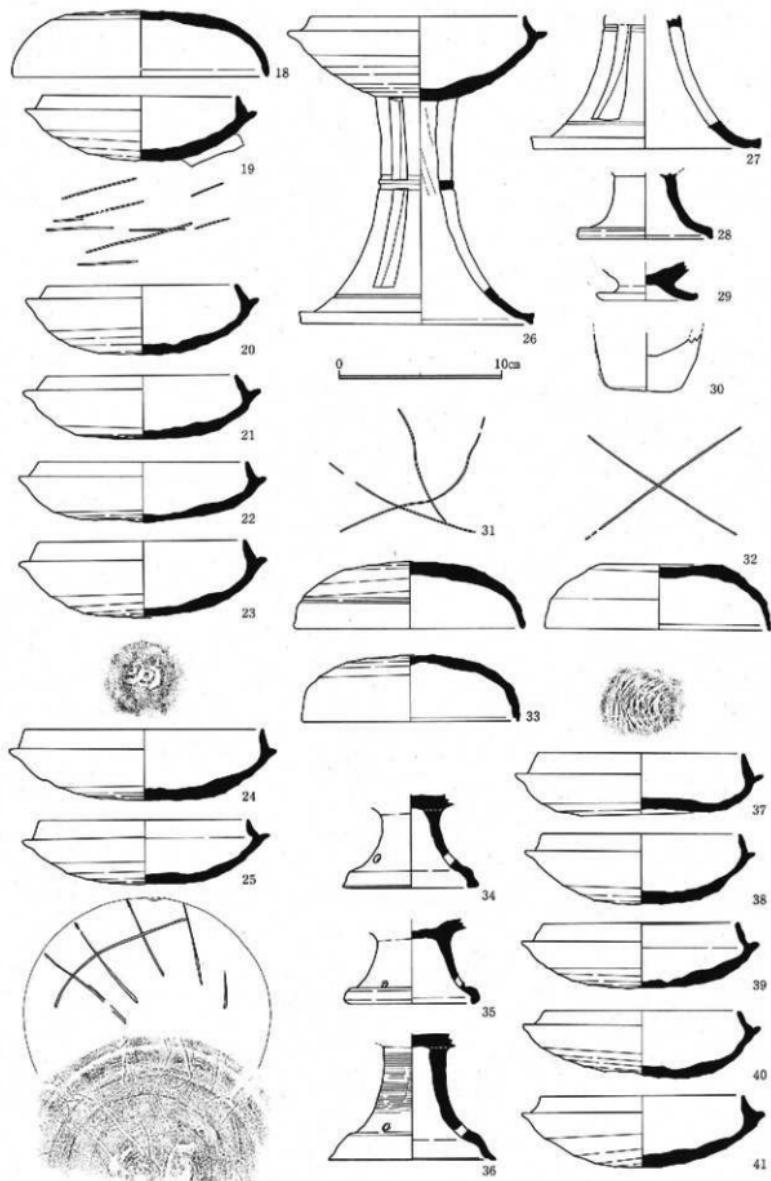
#### 4. 遺物

3区からは、遺物収納用コンテナ(38×59×15cm)に54箱の遺物が出土している。その大半は、生焼けや焼け歪んだ古墳時代後期の須恵器である。

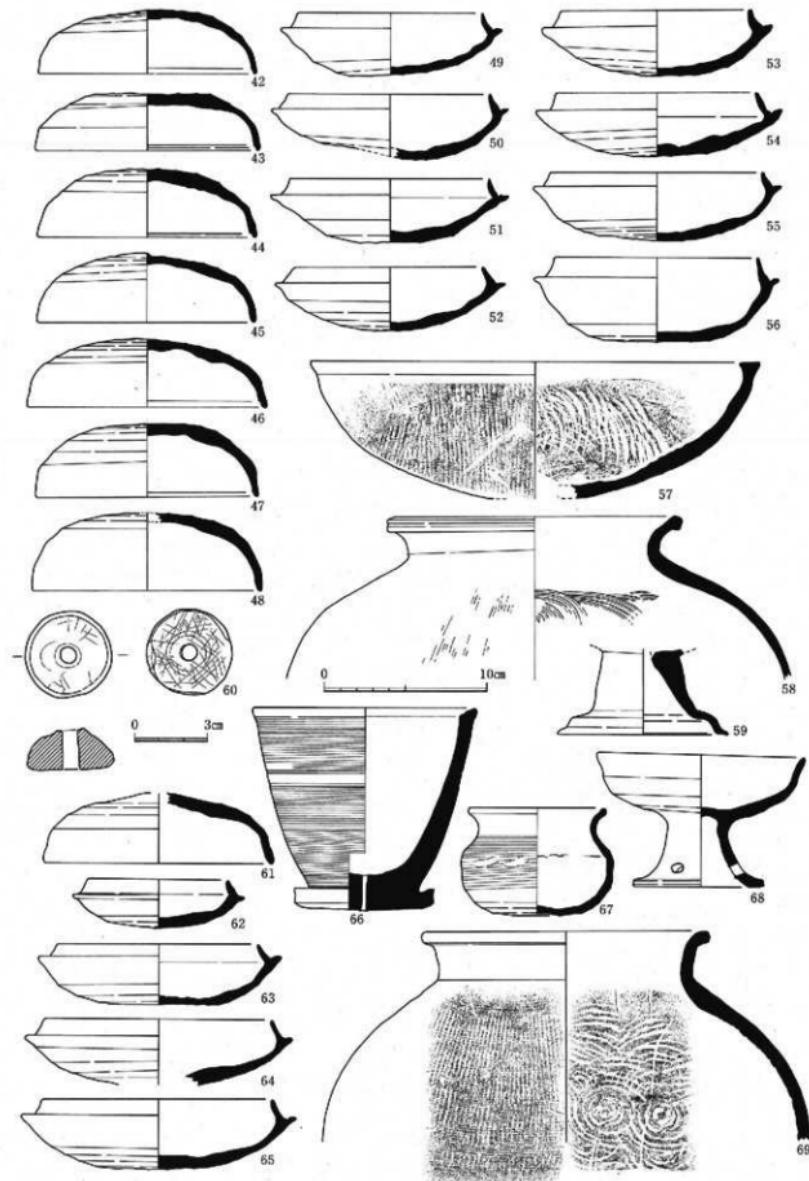
溝S D 0 1 は、その南側から S D 0 1 - 1 、 S D 0 1 - 2 、 S D 0 1 - 3 と場所を違えて、枝番号を付して遺物を取り上げている。S D 0 1 - 2 と S D 0 1 - 3 は、一つの遺構で、南半分と北半分で分けている。S D 0 1 からは、古墳時代後期の杯蓋・杯身・はそう・有蓋高杯・無蓋高杯・鉢形器台・甕などの須恵器が出土している。脚部に短い二段透かしをもった、受部径が29cmもある大型の有蓋高杯(1・2)や内面に青海波叩き痕を残す、受部径が25cmもある大型の杯身



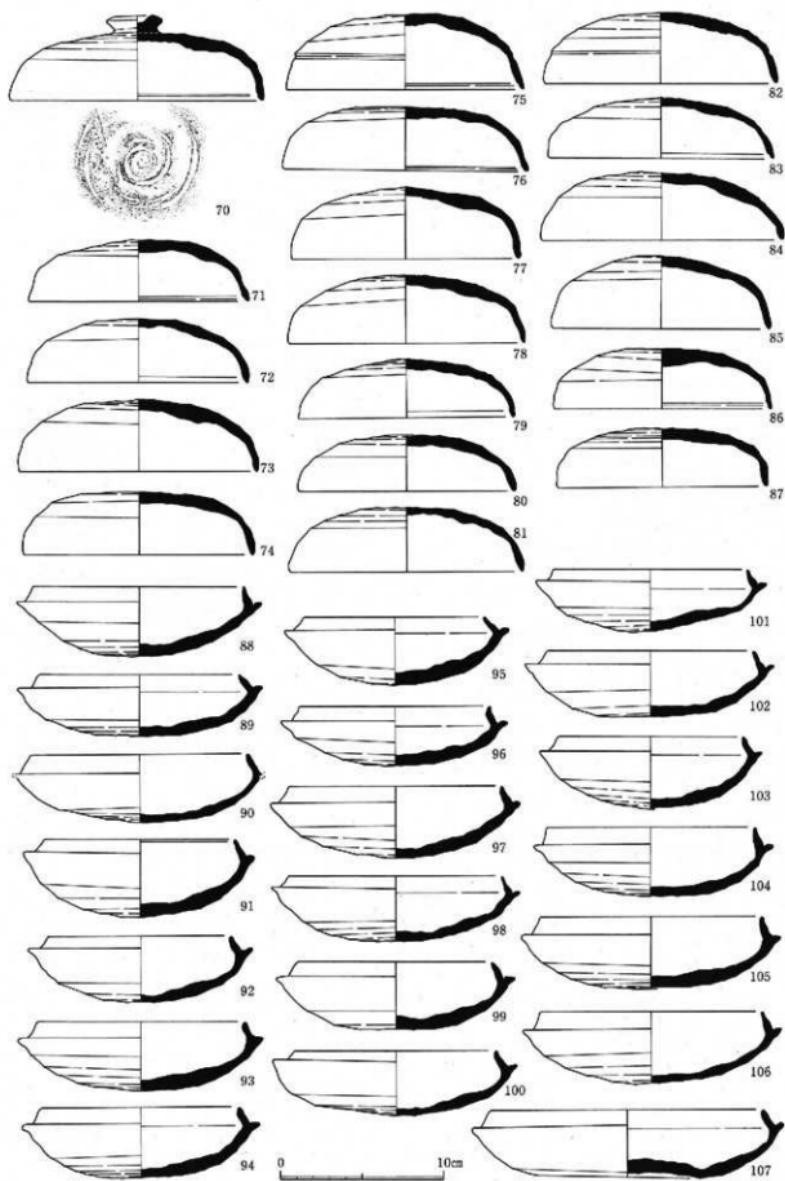
第6図 3区出土遺物実測図 1 (1/3) SD01(1~4)・01-1(5~14)・01-2(15~17)



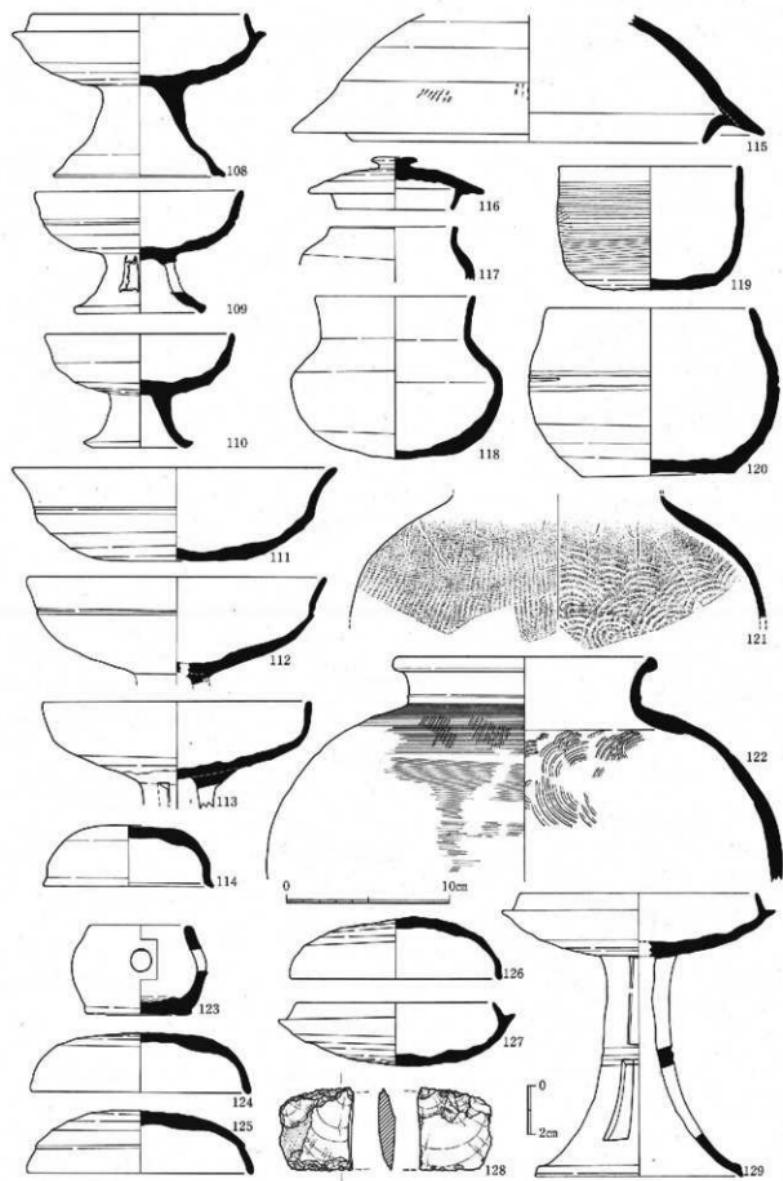
第7図 3区出土遺物実測図2 (1/3) S D01-2(18~30)・01-3(31~41)



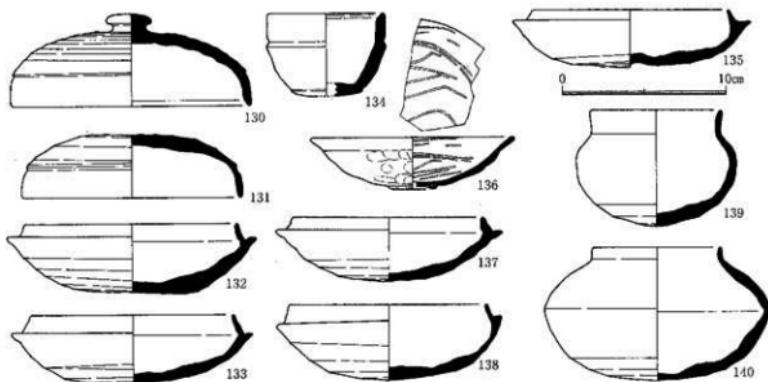
第8図 3区出土遺物実測図3 (1/3) S D02(42~60)・09(61~69)



第9図 3区出土遺物実測図4 (1/3) SD30(70~107)



第10図 3区出土遺物実測図5 (1/3)  
S D 30(108~122)、S D 30・S K 61交点(123~125)、S K 54(126~128)、S D 55(129)



第11図 3区出土遺物実測図6 (1/3)  
SD55(130~134)、SK61(135)、柱穴17(136)、包含層(137~140)

(6) が極めて珍しく、弥生時代後期の壺(30)も混在していた。他に、各種ヘラ記号を描いた杯身・杯蓋も多数出土している。杯部内面中央に青海波叩き痕を残す例も認められた。

SD02からは、古墳時代後期の須恵器と共に、滑石製紡錘車(60)が出土している。

SD09からは、古墳時代後期の杯蓋・杯身・すり鉢・壺・無蓋高杯・壺などの須恵器が出土している。外面全体にカキ目が施された、底部中央に一孔をもつ小型すり鉢(66)や受部径が10.7cmと著しく小さい杯身(62)などが珍しかった。

SD30からは、古墳時代後期の高杯蓋・杯蓋・杯身・有蓋高杯・無蓋高杯・壺蓋・壺・鉢・無頸壺・壺などの須恵器が生焼けのものを含めて、大量に出土している。完形品の中には、焼き上がったままの製品が多く含まれていた。受部径が19cmもある大型の杯身(107)やかえり径が21cmもある杯蓋(115)や、普通の壺と全く同じ作りであるが、壺口縁部が作られていない無頸壺(121)が珍しかった。体部に一孔のあるはその体部のような平底の小型壺(123)も特異なものである。また、無蓋高杯(109・110)は、他と比べて稚拙な作りが特徴的であった。

土坑SK54からは、古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋と共に、風化したサヌカイト製の刃器(128)が出土している。縄文時代の混入品と考えられる。

SD55からは、古墳時代後期の長脚二段透かしの有蓋高杯・高杯蓋・杯蓋・杯身・小型カップなどが出土している。小型カップ(134)は、初期須恵器で、混入品と考えられる。

SK61からは、古墳時代後期の須恵器杯身(135)が出土している。

柱穴17からは、内面に粗い暗文が施された鎌倉時代後期の瓦器碗(136)が出土している。

包含層からは、古墳時代後期の須恵器杯身・壺などと共に、焼土や焼き台も出土している。

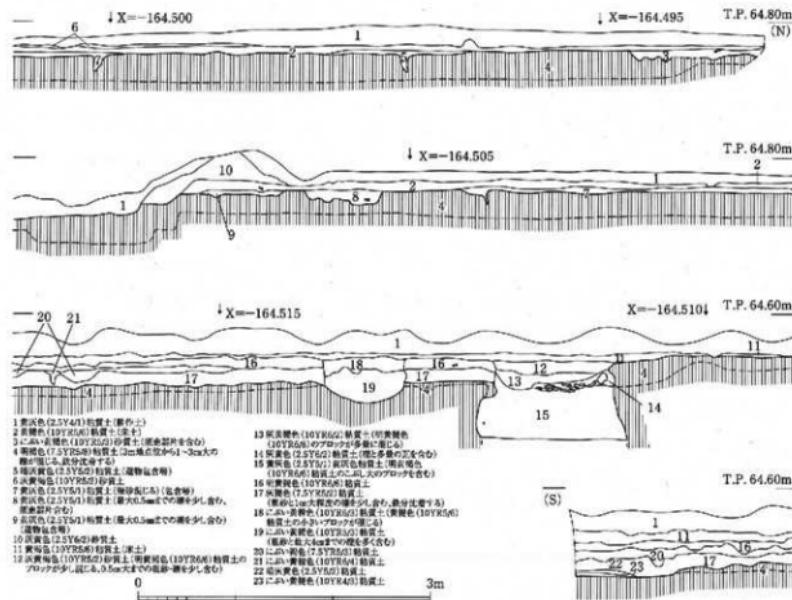
## 第2節 4区・5区

### 1. 調査区の形状

4・5区では、一連の遺構群が検出されている。4区は西側が大きく湾曲して南に張り出すやや不定形な調査区である。東西長51.8m、南北幅は東辺が9.3m、西辺が26.0m、面積約837m<sup>2</sup>。5区は、4区北辺から東側で約11m、西側で約5.5m、北側に位置する。北辺長46.3m、南辺長38.0m、南北幅20.3m、面積856m<sup>2</sup>。矩形の調査区である。

現地表面の標高は、4区東側で64.80~64.85m、西側北寄りで64.65~64.70m。西側の南半部、弧状に張り出している部分は一段低く、64.00m前後である。5区は、4区よりも一段高く、65.20m前後を測る。

地山面の形状は、4区では東側から西側北寄りにかけては64.50m前後で推移するほぼ平坦な地形である。これに対して、西側南半部は南に向かって下がっている。傾斜の度合いを西辺で見てみると、距離22mで比高1.25mを測る。4区の南側には西から深い谷が入り込んでおり、この西側南半部は、谷に向かう南向きの緩斜面にあたる。5区南半部は、64.90m前後の平坦な地形である。3区の状況からすると、5区の北側では地形が下がるものと推定されるが、調査区内では大きな地形の変化は見て取れない。ただし、5区の北辺寄り3分の1程度は一段低くなっている、緩い



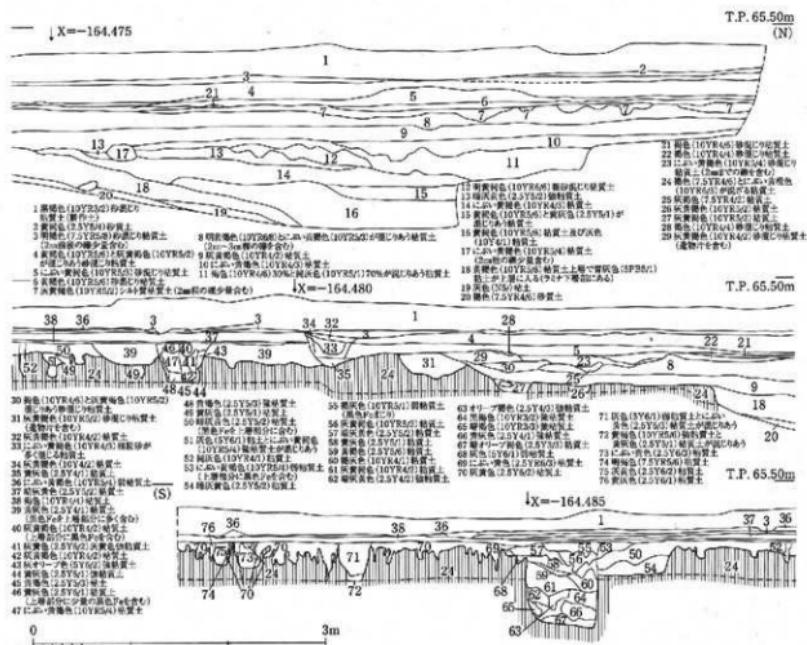
第12図 4区西壁土層断面図 (1/50)

傾斜面が既に削平、改変されてしまっている可能性もある。

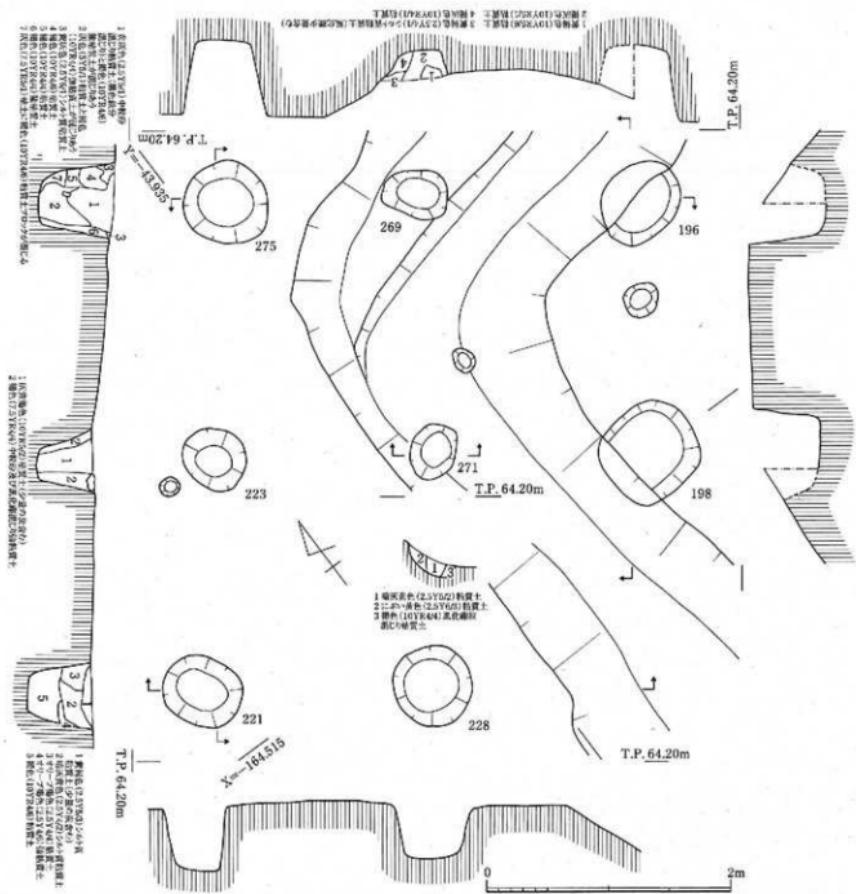
## 2. 層位

4区東側から西側北寄りにかけてと5区南半部の東側では、耕作土層—黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(第12図1層)・黒褐色(10YR3/2)砂混じり粘質土(第13図1層)、床土層—黄褐色(10Y5/6)粘質土(第12図2層・11層)・明褐色(7.5YR5/8)砂混じり粘質土(第13図3層)の直下で地山層が露出する。4区西側では、床土層の下に、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(第12図5層)、黄灰色(2.5Y5/1)微砂混じり粘質土(同7層)、細礫を少量含む黄灰色(2.5Y5/1)粘質土(同9層)が狭在し、須恵器等の遺物が包含されている。しかいすれの地層も部分的に認められるだけで、普遍的な存在ではない。

4区西側南部では、床土層の下部に、明褐色(10YR6/6)粘質土(第12図16層)、にぶい褐色(7.5YR5/3)粘質土(同20層)、粗砂と小礫を少量含む灰褐色(7.5YR5/2)粘質土(同17層)が堆積している。5区南半部の西辺近くでは、床土層の下部に暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(第13図37層)、褐色(10YR4/4)粘質土(同38層)が認められる。いずれも耕作面の重なりによる堆積と考えられる。



第13図 5区西壁土層断面図 (1/50)



第14図 4区SB05平・断面図(1/40)

5区北半部では、床土層と北辺にある大型溝の堆積土の間に、砂や砾の混じる黄褐色や灰黄褐色粘質土が互層となって堆積している(第13図4~9層)。土層断面図に見られるように、4~6層と7~9層の上下二つのブロックに分けることが可能で、いずれも水田等耕作地造成による堆積と考えられる。北半部と南半部の境にある段は、下層の水田造成の名残と考えてよく、32~35層は上層の水田に伴う溝のような施設の痕跡であろう。

### 3. 造構と遺物

4区・5区では、掘立柱建物、土坑、溝、落込み、古墳などが検出された。これらの造構は、

古墳時代後期後半、奈良時代及び鎌倉時代後期のものに大別される。

### 3-1. 古墳時代後期後半の遺構

古墳時代後期後半に属する主要な遺構に、掘立柱建物と古墳がある。当該時期の所産と考えられる掘立柱建物に4区SB05、5区SB01~04がある。地形の傾斜に沿って建てられていくことに特徴があり、当該地域における、このような建物群が古墳時代後期に属することについては、かつて考察したことがある（山田1999）。なお、5区西辺部でも多くのピットが検出されおり、当該時期を含む数棟の建物があったと考えられる。しかし、出土遺物を含む詳細な検討が完了していないため、今回は復元案を示していない。

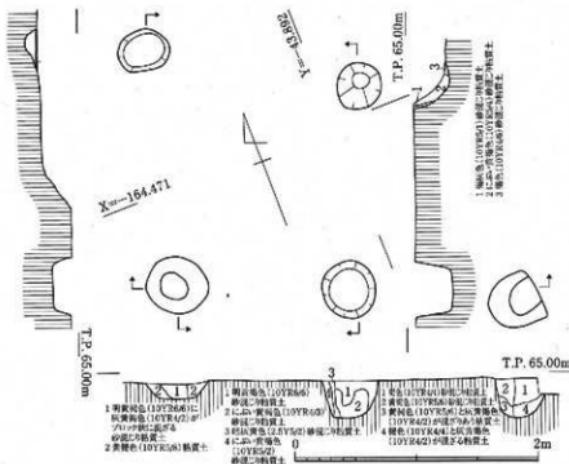
#### 掘立柱建物

##### 4区SB05

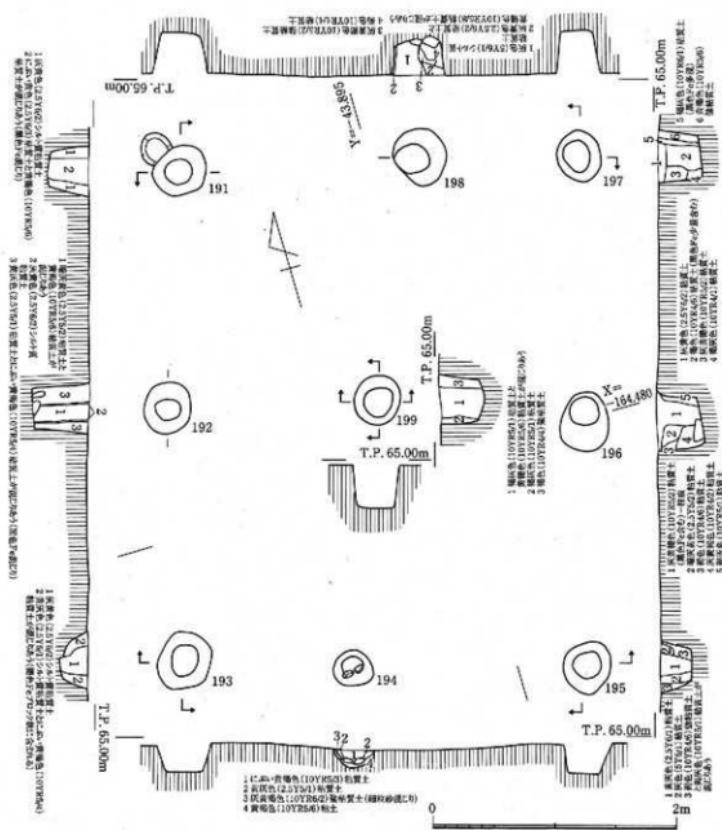
調査区西側の南寄りに位置する。東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物。中央部が古墳の周溝によって破壊され、東南隅の柱穴は消失している。柱は抜き取られていた。このため、正確な規模、方位は確認できない。柱穴の中心部分で測ると、東西約3.5m、南北約4.0mで、わずかに南北方向に長い建物となる。柱穴は、円形ないし梢円形で、その径は平均0.6~0.65m程度である。ただし、古墳の周溝で上部を削られていた二つを除いても、径0.5mを少し超える程度のものや径0.8m程度になるものもあり、ばらつきがある。柱穴中心線で測る主軸方位N39°E。柱穴198から、須恵器杯身片（第41図285）が出土している。

##### 5区SB01

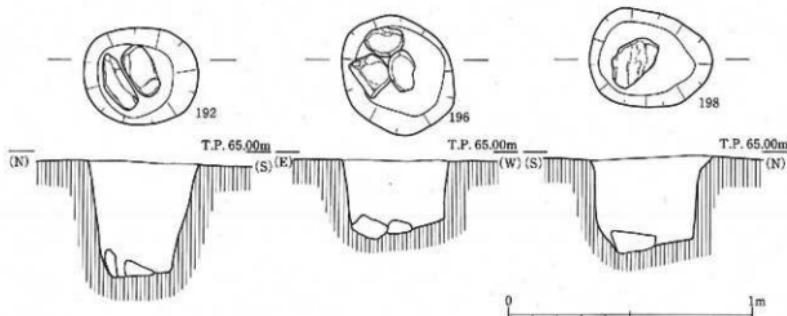
調査区東辺やや北寄りに位置する。東西・南北とも2間以上の総柱の掘立柱建物で、北東側は



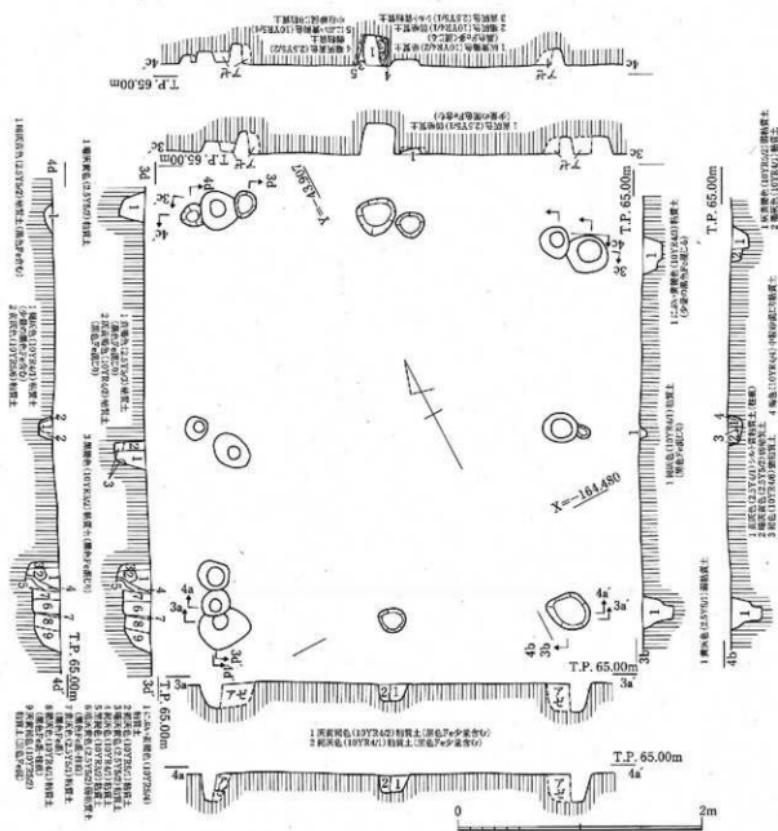
第15図 5区SB01平・断面図 (1/40)



第16図 5区SB02平・断面図 (1/40)



第17図 5区SB02柱穴内根石出土状況図 (1/20)

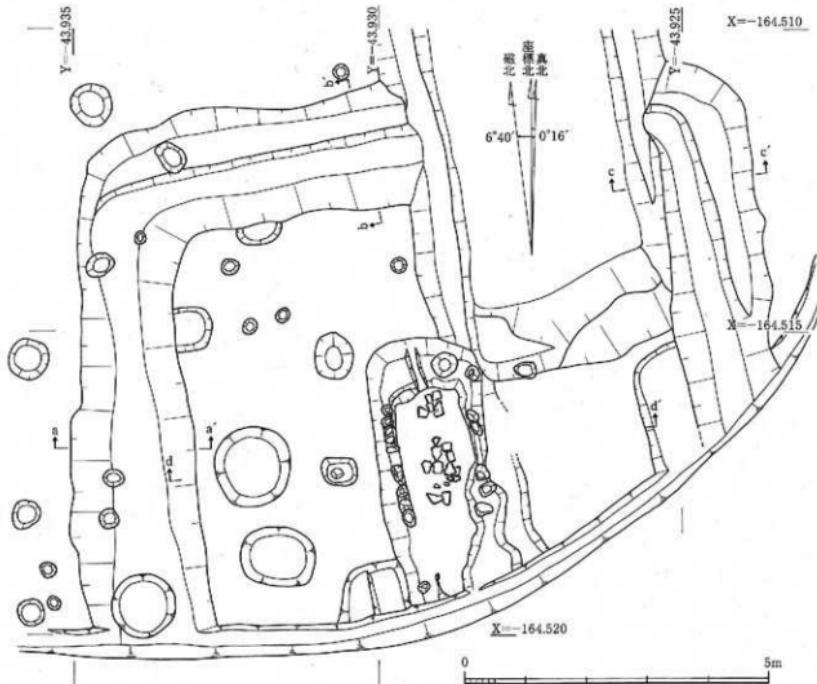


第18図 5区SB03, 04平・断面図 (1/40)

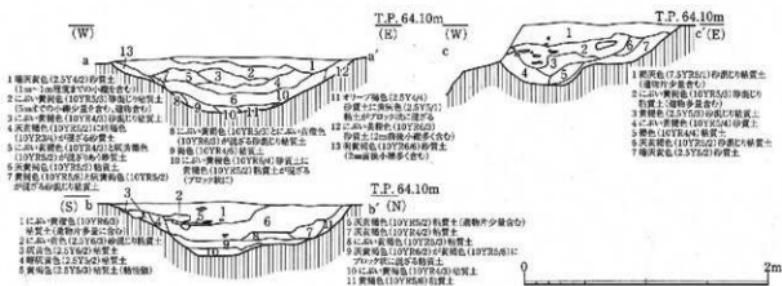
調査区外に広がる。南側東西の柱穴で柱痕が確認できた。東西3m以上、南北2m以上の規模で、東西の柱間は1.5m程度である。柱穴は一つを除いてほぼ円形で、径0.4~0.5mを測る。柱穴中心線で測る主軸方位N21°E。

#### 5区SB02

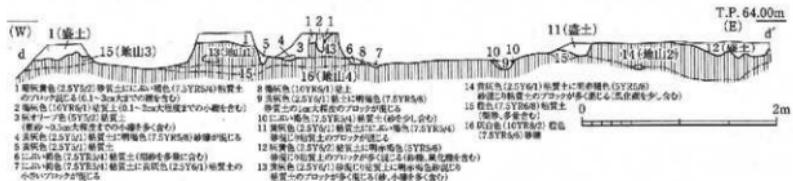
調査区南東部に位置する。東西・南北とも2間の総柱の掘立柱建物である。すべての柱穴で柱痕が確認でき、柱痕中心部で測ると、東西は3.3mであるが、南北は東側4.2m、西側4.0mと東側がわずかに長くなる。柱間は、南北方向では東側2.1m、西側2.0mとそれぞれの辺について均等であるが、東西方向では1.9mと1.4mと不均等でかつ北側と南側で間隔が逆転している。柱穴はやや不整な円形で、その径は平均すると0.4m程度。柱痕の径は平均すると0.22mほどになる。ただ



第19図 4区古墳平面図 (1/80)



第20図 4区古墳周溝土層断面図 (1/40)



第21図 4区古墳墳丘断面図 (1/50)

し、確認された柱痕でもっとも細い径0.17~0.18mが、使用された柱の太さに最も近い数値であろう。3箇所の柱穴底部で根石と考えられる長径15~25cmの礫が出土している。柱痕中心線で測る主軸方位N11°E。

#### 5区SB03・04

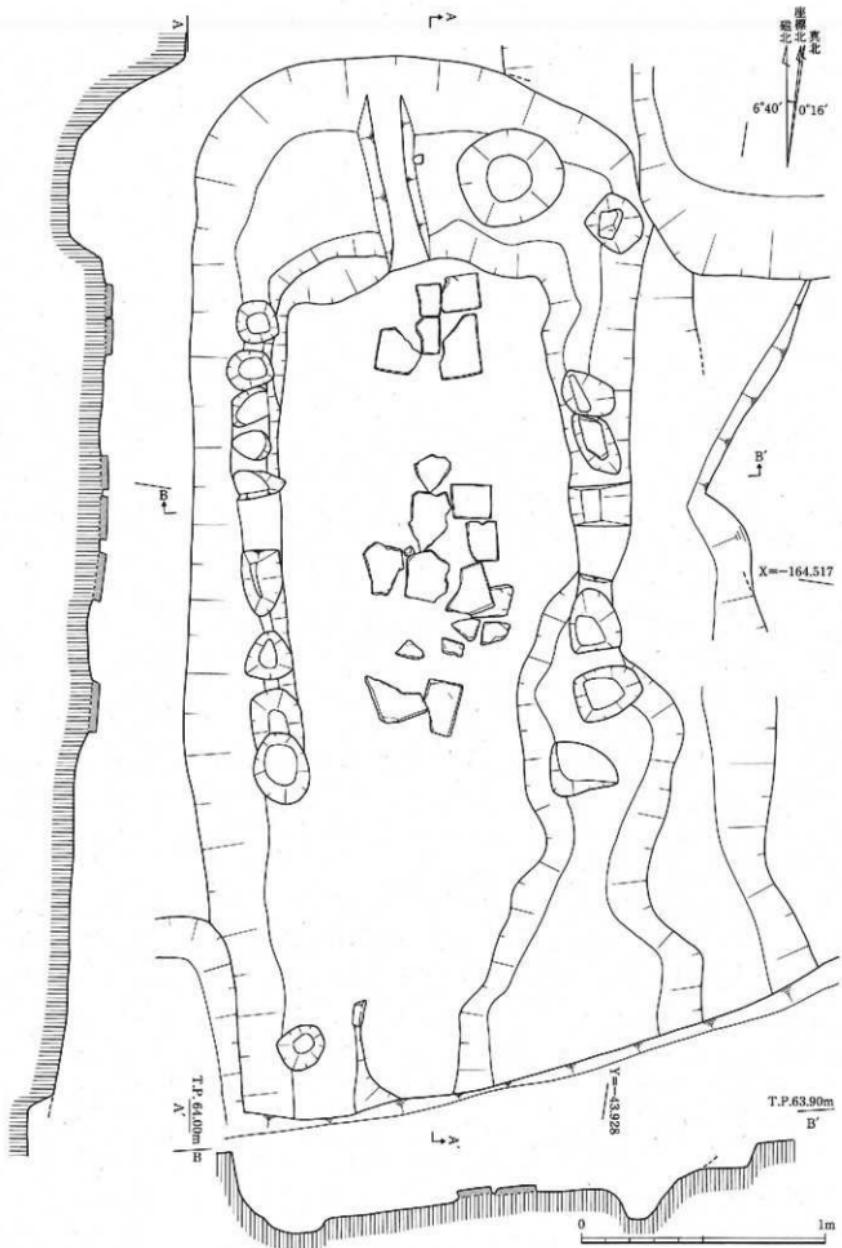
調査区中央付近に位置する。どちらも東西・南北とも2間の掘立柱建物で、柱穴の切り合い関係から、SB03からSB04に、ほぼ同一位置で建替えられたものと考えられる。

ともに柱痕の確認された柱穴が少なく、正確な規模・方位は明らかにできないが、柱穴の中心部で測ると、SB03は東西2.9m、南北は東側が3.0m、西側が3.5m。SB04は東西方向の北側が3.0m、南側が2.9m、南北方向の東側が3.1m、西側が3.2mとなり、2棟ともやや不整な構造である。柱痕が確認された部分での柱間は、SB03で1.4m、SB04で1.5mを測る。柱穴は円形ないし不整な円形で、その大きさも長軸が0.4mを超えるものから0.1m程度のものまで様々である。ただ、SB04に限れば径0.25m程度のものが平均的な大きさであるといえる。柱痕の径も0.09~0.18mであるが、使用された柱は径0.10m程度のものと推定される。柱穴中心線で測る主軸方位はSB03 N31°E、SB04 N26°E。

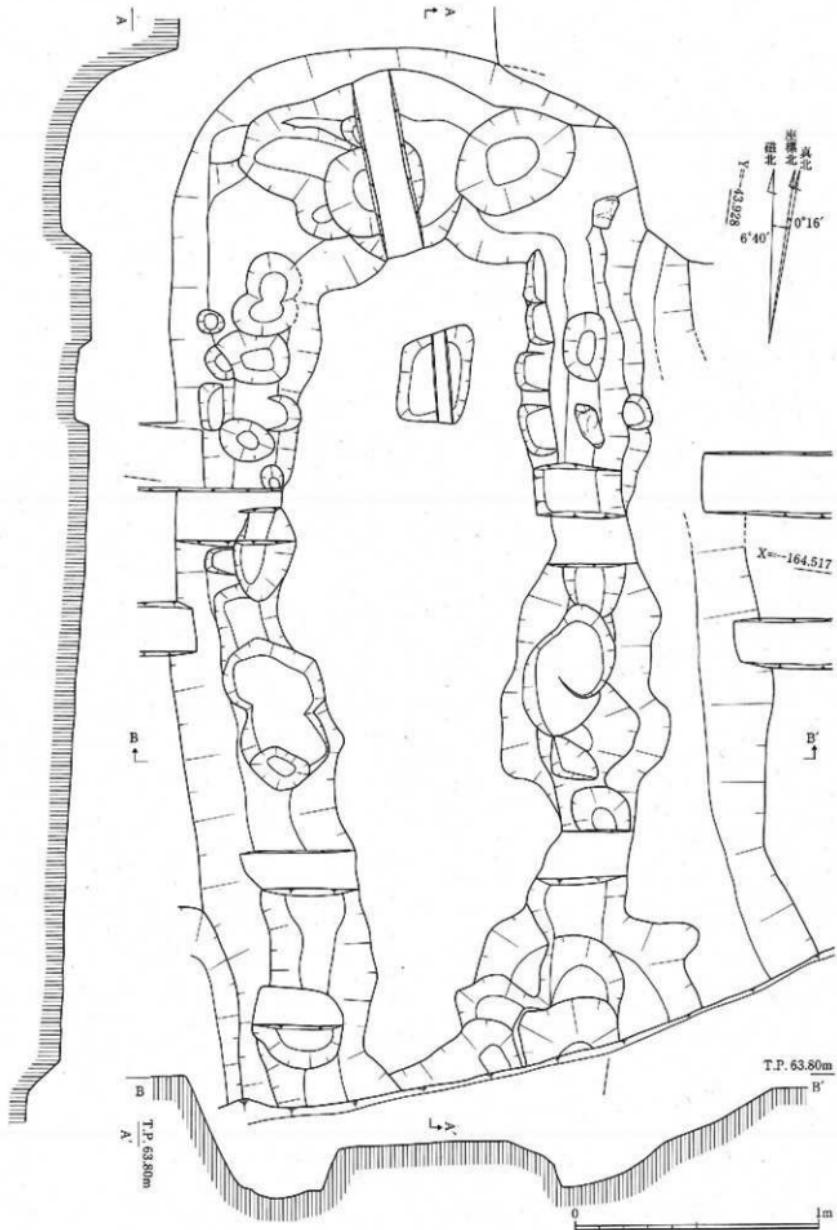
#### 古墳

4区西側南辺に位置する。南側は調査区外にあり、東側は中世の大型溝によって大きく破壊されているが、東西と北側の周溝及び主体部が検出された。周溝を含む大きさは、東西約11.4m、南北8.6m以上。調査区の南側がすぐに谷に下る急斜面になっていること、後述のように横穴式の主体部を持っていることなどから、南に面して築かれた方墳で、その規模も現状の東西長約11.4mと大きさは異ならないものと推定される。なお、周溝が掘立柱建物SB05の一部を破壊しており、古墳がSB05より時期の下がることは明らかである。主体部の裏込と考えられる土層中と主体部壁溝内から、宝珠つまみの付く蓋杯あるいはその直前の時期の蓋杯と考えられる須恵器細片が、それぞれ1点ずつ出土している。

東西及び北側で検出された周溝は、断面が逆台形状を呈するが、北側から東側の北寄りにかけては、外側が2段掘りになっている。上部幅が北側で1.8~2.0m、西側で1.5~2.1m、東側で1.5~1.6m、底部幅は北側で0.4~0.5m、西側で底部幅0.5~1.2m、東側で底部幅0.4~0.6mをそれぞれ測る。東側で上部幅がやや狭いが、これは中世大溝による破壊の影響を考慮すべきであろう。底部幅は、南に向かって広がる傾向があり、特に西側で顕著である。さらに西側の溝については、上部幅についても同様の傾向が見て取れる。このことに注意すると、周溝は、南側には存在せず、東西の溝が南に開放したまま終わっていた可能性も考えられる。深さ0.45~0.5m。北側の周溝内には粘質土、東側と西側の周溝内には砂混じりの粘質土や砂質土が主として堆積していたが、その様相は均一でなく、場所による変異が大きい。また、下層近くに異なる色調の土がブロック状に混ざり合った土層（第20図b-b'面図9層）が存在するところもあり、すべてが自然堆積層とは考え難い。中・下層からの遺物の出土はさほど多くないが、上層のにぶい黄褐色砂混じり粘質



第22図 4区古墳主体部平・断面図 (1/20)



第23図 4区古墳主体部室溝完掘状況平・断面図 (1/20)

主（同a-a' 面図2層、c-c' 面図2層、b-b' 面図1層）からは、奈良時代の須恵器が多量に出土した。これらは周溝上層の堆積土中に溝遍なく存在するものではなく、6群に分かれるまとまりとして把握できるものであった。

墳丘はすでに周囲の地山層上面と同一レベルにまで削平されていたが、部分的に盛土層の残っているところもあった。その分布状態や様相から墳丘盛土層と認識されたのは、主体部西側ではぶい褐色（2.5YR5/4）粘質土ブロックの混じる暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土層（第21図1層）、東側では黄灰色（2.5Y6/1）粘質土と砂混じりのぶい褐色（7.5YR5/4）粘質土の混合層（同11層）及び砂混じりの明赤褐色（5YR5/6）粘質土のブロックを多量に含む灰黄色（2.5Y6/2）粘質土層（同12層）である。盛土層の残っていた箇所での地山層上面には凹凸があり、墳丘築造時ににおける地山層の整形は、上面の平坦化といったものではなかったようである。

主体部は、地山層を掘り込んだ横穴式のもので、南に開口する。墳丘中央部に位置する墓壙は、東西約2.4m、南北4.3m以上を測る隅丸長方形。壙底は、東・西・北壁沿いが溝状に掘り込まれていて、中央に断面台形の基壙状の高まりが残る。この高まり上面が主体部床面の作られた部分で、中央部から北側では部分的に磚が残っていた。床面北側で検出された磚はほぼ原位置を保っていたものと考えられたが、遺存している数が少なく、磚の敷き方や数など床面構造の詳細を知ることはできなかった。なお、地山層を削り出した基壙状の高まりと磚の間に、堅くしまった厚さ1～2mmの黄色土が確認できた。磚を敷く段階で、基壙状高まりの上に黄色土をつきかため、床面を水平にしたことがわかる。

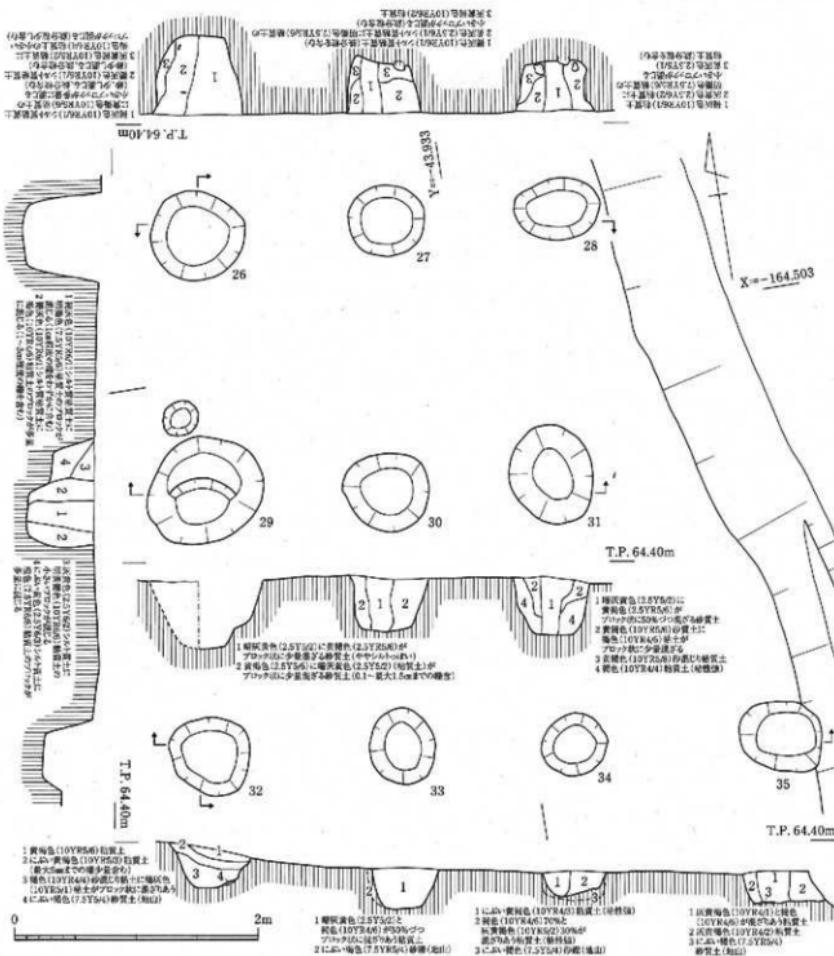
墓壙の深さは、北側の床面まで0.35m、溝状部分の底まで0.5m程を測る。床面は、墓壙底の周囲を溝状に粗く掘り窪めた後、底を部分的に埋め戻して形を整えたものようで、特に南側では埋め戻された土のブロック状の塊が顕著に観察された。床面の幅は遺存状態のよい北側部分で約1.2mを測る。

本主体部の調査では、横穴式石室に使用されたと考えられるような石材はまったく検出されなかつた。また、墓壙底において石材の抜き取り跡と考えられるような痕跡も認めることができなかつた。一方、墓壙底周囲の周溝状部分では径0.15～0.30mの柱穴状の落込みが検出された。とりわけ西側では、墓壙壁に沿って並んだ状態で検出されており、墓室の壁面を構築するための柱列の痕跡と考えることができる。以上のことから、本墳の主体部は、横穴式木芯室のような構造であったと想定される。

本墳からは副葬品と考えられる遺物は全く出土しなかつたが、主体部床面から18点の磚が出た。すべて破片であるが、これらは厚さA…2.6～2.7cm、B…約3.0cm、C…3.4～3.6cmの三種類に分かれる。Aは幅14cm、長さ15.6cm以上でB・Cより小型である。B・Cには本來の長さや幅がわかる固体は無いが、最も大きな破片で、Bは20.0×19.0cm、Cは24.7×16.5cmあるいは20.8×18.8cmを計る。焼成はいずれもやや不良で、A・Bの胎土には砂粒が多く認められる。文様等の認められるものはない。

### 3-2. 奈良時代の遺構

当該時期の主要な遺構は、調査区西側に分布する掘立柱建物群である。確認できたもので7棟を数える。4区SB01とSB03及び5区SB05とSB06は、それぞれ近接した位置にあり、主軸方位も似通っている。主軸方位の共通性は、4区のSB02とSB04の間にも認められ、これらの建物はそれが一对の建物であった可能性もある。古墳周溝の上層からは多量の当該時期の須恵器が出土している。周溝が埋まり、浅い窪みのようになっていたところが、奈良



第24図 4区SB01平・断面図 (1/40)

時代に再利用されたものであろう。古墳周溝出土の土器群については、遺物の項で報告する。

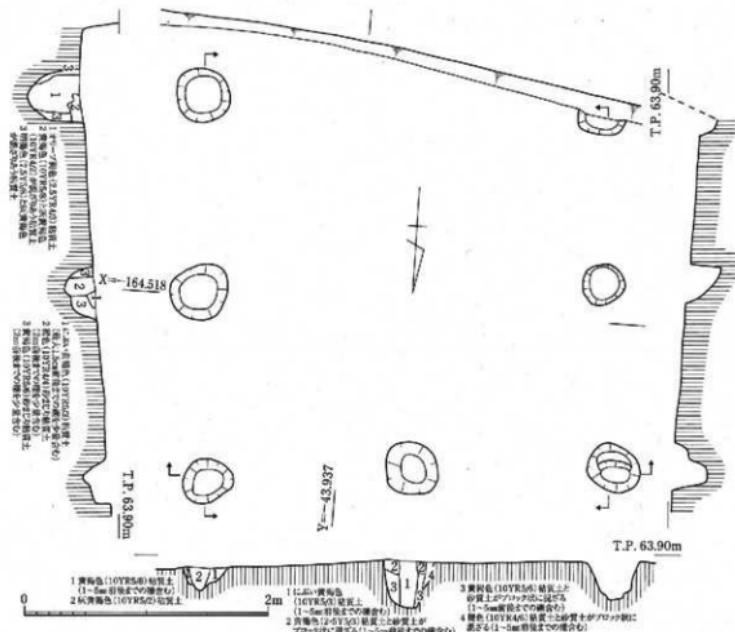
獨立柱建物

4区SB01

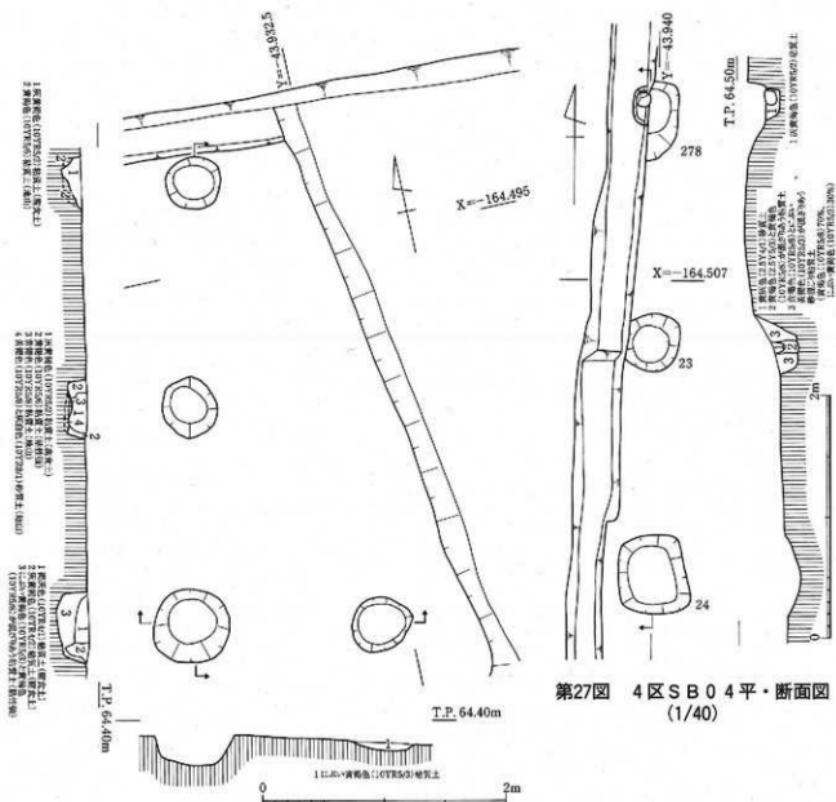
調査区西側中央部に位置する。東西3間、南北2間、縦柱の掘立柱建物。北東隅が中世の大型溝によって破壊されている。柱痕の検出できた柱穴が多くないため、正確な規模や方位は確認できない。柱穴の中心部分で測ると、東西・南北ともに約4.3m。ほぼ方形の建物となる。ただし、柱穴は東西が南北よりも一つ多く、確認できたところでの柱間は、東西方向で1.50m、南北方向で2.2mを測る。柱穴は、円形ないし梢円形で、径0.9mを超える大型のものから0.6mに満たないものまで、ばらつきがある。柱穴中心線で測る主軸方位N 9° E。柱穴27、28から須恵器蓋杯の擬宝珠つまみが、26から須恵器甕口縁部小片が出土している。

4 S B 0 2

調査区南西隅に位置する。南側は調査区外へ広がっており、東西2間、南北3間以上の掘立柱建物。柱痕の検出できた柱穴が少なく、正確な規模、方位は確認できない。東西の規模は、柱穴の中心部分で測ると約3.4m。南北3.8m以上。柱痕の確認できたところでの柱間1.7m。柱穴はほぼ円形で、やや小型のひとつを除き、径0.4~0.45m。柱穴中心線で測る主軸方位N 4° W。



第25図 4区SB02平・断面図 (1/40)



第26図 4区SB03平・断面図 (1/40)

4 XSB 03

調査区西側の北辺に位置する。検出された柱穴は4個だけで、東側は中世の大溝によって破壊され、北側は調査区外に広がっている。柱痕の検出された柱穴も無く、全体の規模は明らかでない。東西2m以上、南北4m以上を測るが、大溝の東側では柱穴が検出されなかったことから、東西2間、南北2間以上の掘立柱建物であったと推定される。柱穴は、ほぼ円形で、南西隅のものが径約0.60mと一回り大型である以外は、0.45m程である。柱穴中心線で測る主軸方位N12°E。

4☒S B 0 4

調査区西辺中央部に位置し、南北2間の掘立柱建物の東辺だけが検出されたものと推定される。南北の規模は、柱穴の中心部分で測ると約3.9m。柱穴は、両端が隅丸長方形、中央が円形。南側の柱穴は、長軸0.65m、短軸0.6m、中央のそれは径0.5m。柱穴278の底部から根石かと思われる

握り拳大の礫がひとつ出土している。柱穴中心線で測る主軸方位N 1° W。柱穴24から須恵器台付壺底部の小片が出土している。

#### 4区SB08

調査区中央やや西よりの南辺に位置し、東西2間の掘立柱建物の北辺だけが検出されたものと推定される。柱痕が明確でなく、東西の規模は、柱穴の中心部分で測ると約4.0m。柱穴は、円形ないし隅丸方形で、径0.6~0.65m。柱穴中心線で測る主軸方位N 0° E。

#### 5区SB05

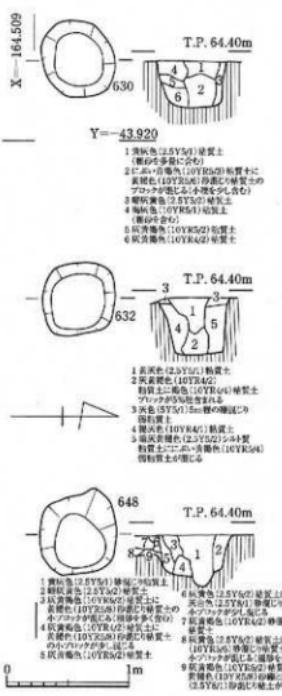
調査区西寄り南辺に位置する。東西2間、南北2間の縦柱の掘立柱建物と考えられるが、更に南に広がっている可能性もある。六つの柱穴で、柱の抜き取り跡とみられる痕跡が確認でき、およそその柱の位置を知ることができる。抜き取り跡の中心部分で測ると、東西約3.5m、南北は西側で約4.2mと、わずかに南北方向に長い建物となる。また、更に南に広がる可能性があり、かつ東南隅の柱穴が一部しか検出されなかつたため判然としないが、2間×2間の建物であれば、西辺に対して東辺が短い、やや歪んだ平面プランになる可能性が強い。柱穴の平面形は、柱を抜き取る際に変形したものか、円形に近いものから隅丸長方形状のものまである。その大きさも平均すると0.6m前後であるが、長径0.8m以上のものから、径0.55m程度のものまで変異がある。抜き取り跡の中心線で測る主軸方位N 1° E。

#### 5区SB06

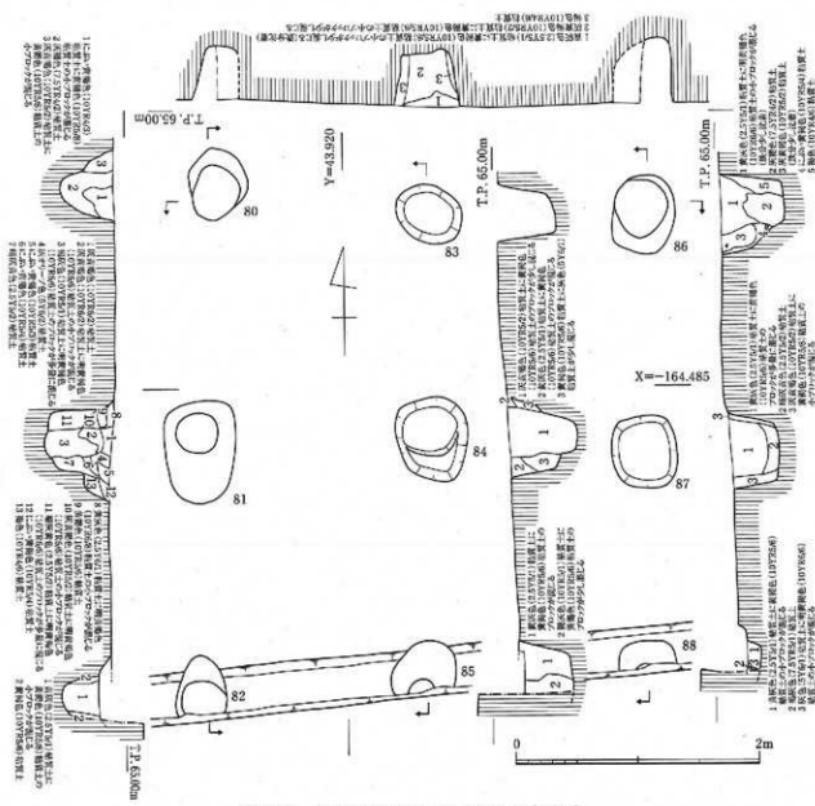
調査区中央からやや西よりの南辺、SB05の東側約2mに位置する。東西2間の掘立柱建物であるが、東西は西辺の1間分が検出されただけで、大半は4区と5区の間の未調査区にあるものと推定される。柱穴の中心部で東西約6m。南北は、東北隅の柱穴の中心部と、調査区南辺で検出された柱穴の抜き取り跡と考えられる痕跡の中心部とで、約3.9m。柱穴はやや不整な円形であるが、その大きさはまちまちで、径0.45m程のものから、0.6mを超えるものまである。柱穴中心線で測る主軸方位N 4° E。

### 3-3. 古墳時代～奈良時代の遺物

(4区西半部) 4区は、調査の便宜上、西半部・東半部に分けて遺物を取り上げている。4



第28図 4区SB08平・断面図  
(1/40)

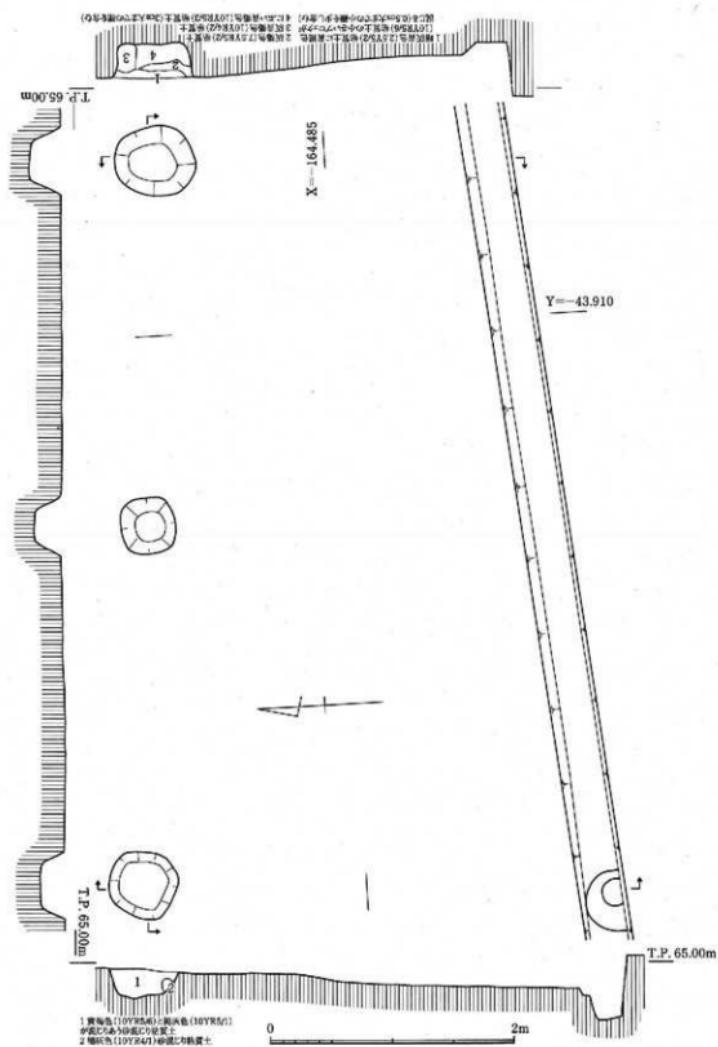


第29図 5区SB05平・断面図 (1/40)

区西半部からは、遺物収納用コンテナに143箱もの多数の遺物が出土している。その大半は、古墳周溝出土の奈良時代の須恵器・土師器などである。

調査区北西隅にかかっていた溝か土坑か不明な02から、古墳時代後期の須恵器鉢形器台(141)や杯身(142)、縄文時代のサスカイト製凹基式石鏃(143)が出土している。

古墳の周溝であるSD04から、多量の奈良時代の遺物が出土しているが、周溝埋土最上層の土器は、西側周溝から時計回りに土器群1~6として取り上げた。各土器群の土器はいずれも破片ばかりで、相互に接合し合うものが多くあり、古墳の周溝中に奈良時代にまとめて投棄されたものと考えられた。土器群3からは、ヘラ記号か漢字かは不明だが、「井」と書かれた生焼けの須恵器杯が2点出土している(159・160)。土器群3からは、口縁部外面に、「泉」と漢字が、焼成前にヘラで線刻された須恵器横瓶も出土した(163)。泉の意味は、明確ではないが、和泉郡あるいは和泉監の可能性が考えられた。土器群6からは、両端に一孔のある須恵器の棒状土錐や錨?な



第30図 5区SB06平・断面図 (1/40)

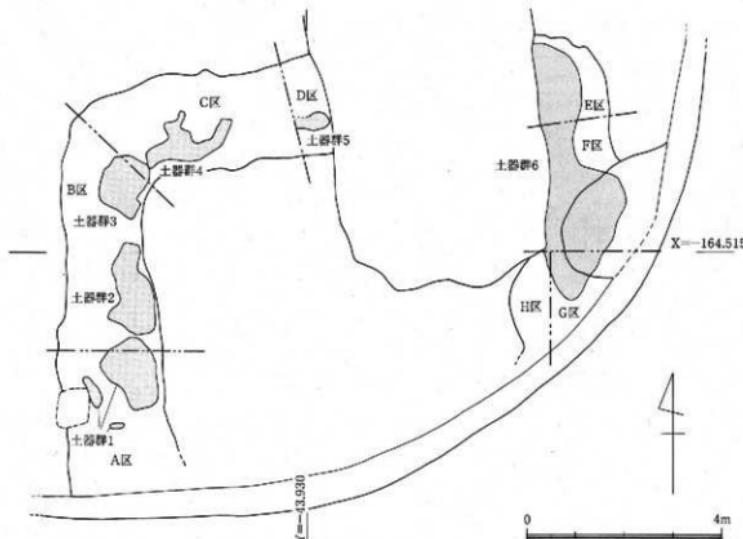
どの漁具 (175・176) の他、底部外面に判読不明な漢字二文字が、焼成前にヘラで線刻された須恵器底 (179) も出土している。

古墳の周溝である SD04 の埋土上層・中層・下層・最下層の遺物は、最上層の土器群同様に、

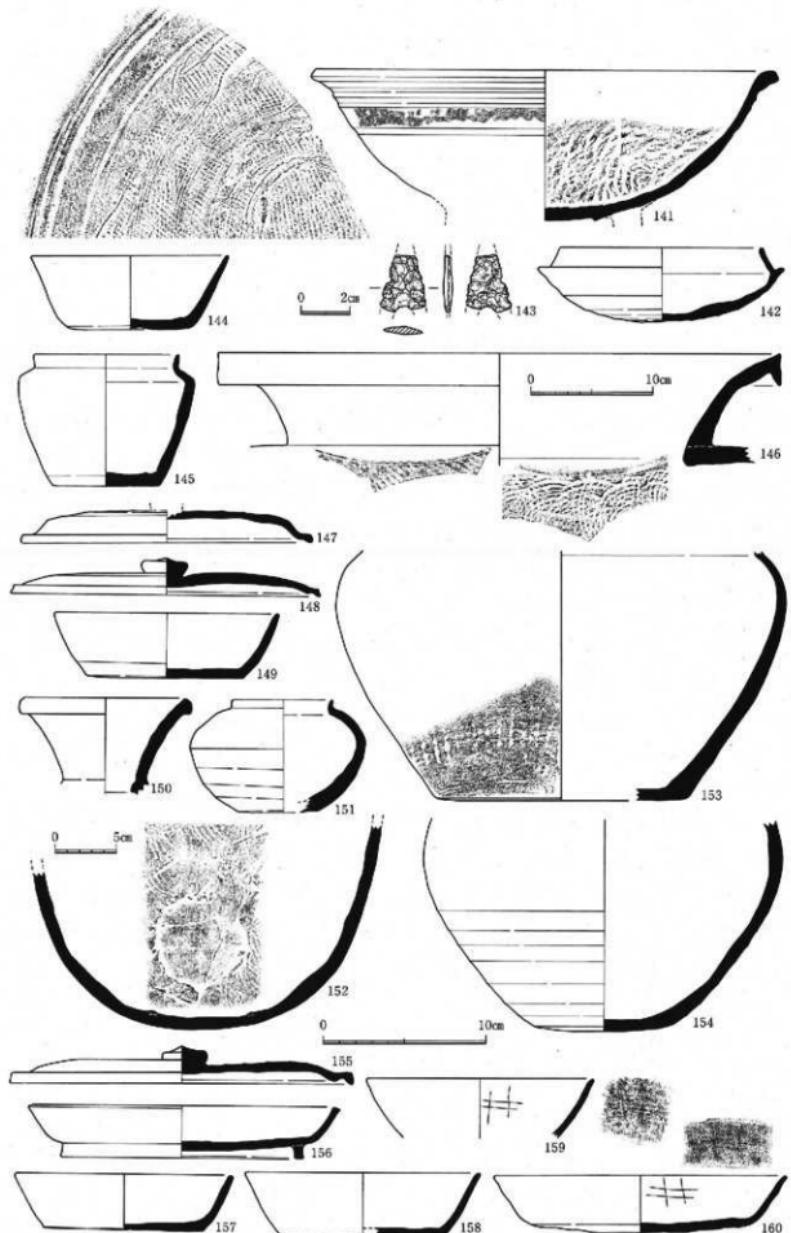
西側周溝から時計回りに、A区～H区の各層出土遺物として取り上げた。しかし、接合の結果は、各層遺物が互いに接合し、層による時期差を認めることはできなかった。C区（中層）からは、绳文時代の楔形石器や飛鳥時代の須恵器杯身や生焼けの陶棺脚部片などの混入品も出土した。

また、C区・E区・F区（中層）からは、「平」「九」「井」と焼成前に線刻された須恵器も出土した（199・200・202）。奈良時代の須恵器中には、器種不明なもの（207）、大型の鉢（208・217）、有蓋鉢（213）などのあまり見かけない器種も含まれていた。緑色片岩の石材は、弥生時代の磨製石包丁未製品と考えられた（218・219・227）。丸瓦破片も出土したことから（226）、近辺に瓦葺き建物の存在が推定された。また、判読不明な漢字状の文字？の書かれた須恵器杯（220）も出土した。C区（最下層）からは、奈良時代の土師器高杯（209）も出土している。F区（中・下層）からは、珍しい須恵器横瓶（233）・瓶（236・251）・大型鉢（248・249）・高台付きの大型鉢（250）などの他、少数ではあるが、古墳時代後期の須恵器・窯壁片なども出土した。B区・C区の境であるあぜ2からは、製塩土器（270）も出土している。また、古墳周溝のD区とE区の間は、後世の遺構であるSD17によって、削られてしまっているが、溝中には、削られた溝に含まれていた遺物も残存していた。厚さ2.7cm、高さ30.2cmの方形磚（279）、極めて精良な胎土で丁寧に作られた器種不明の土製品（280・281）、焼成時に口縁部が歪んでしまった奈良時代の須恵器壺（283）、釣鐘形のイイダコ壺（284）などが出土している。

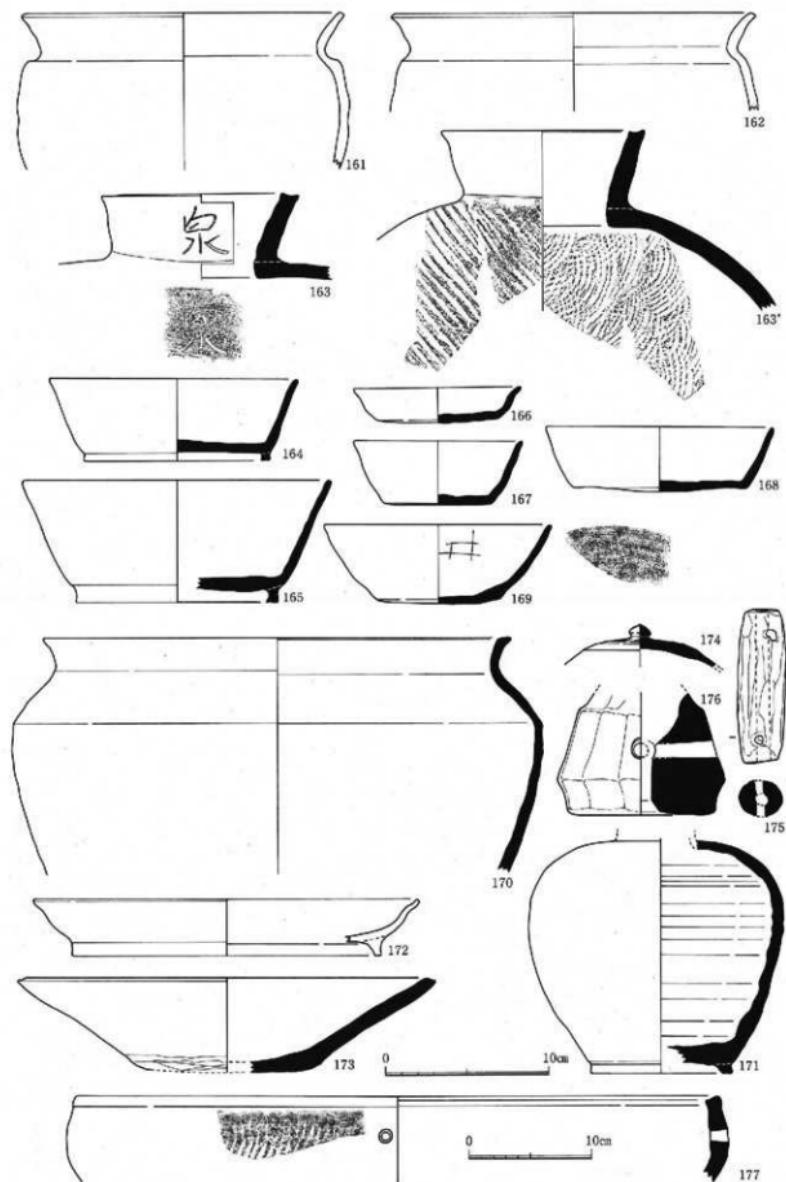
包含層中からは、奈良時代の片口付きの須恵器すり鉢（286）も出土している。



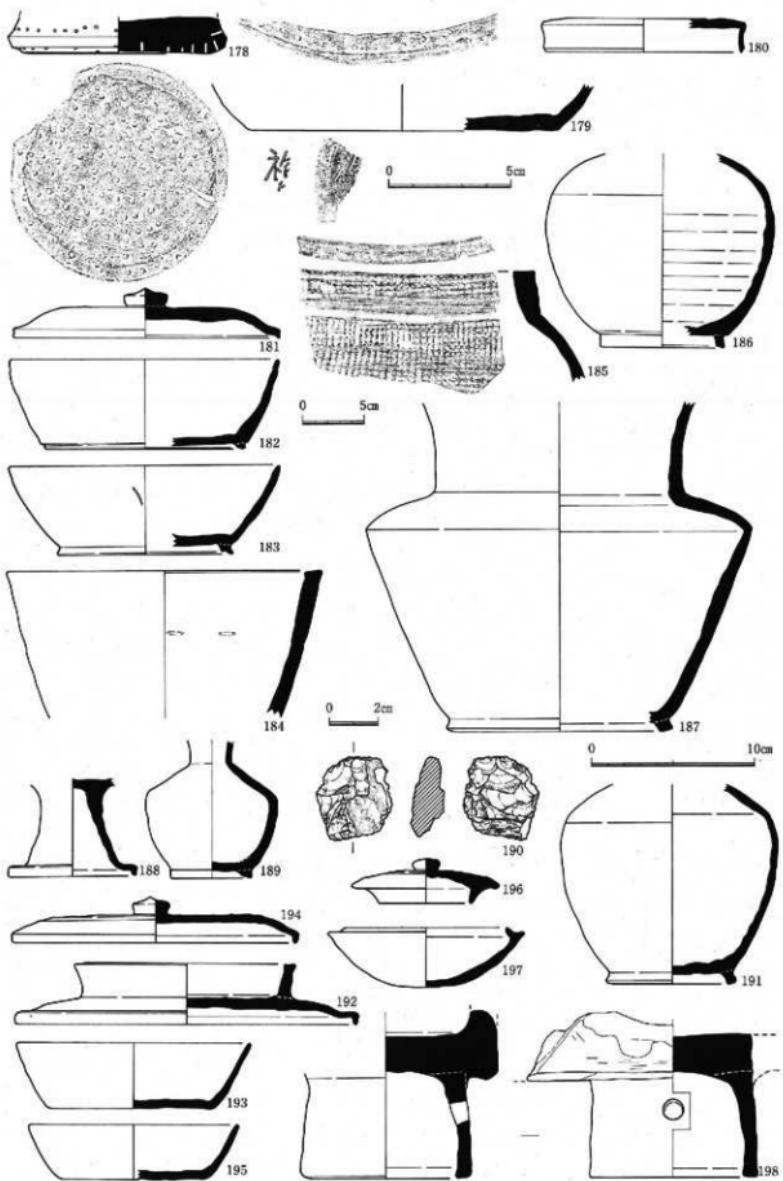
第31図 古墳周溝内地区割り及び土器群分布図 (1/100)



第32図 4区出土遺物実測図1 (1/3)  
02(141~143)、S D04土器群1(144~146)・同2(147~154)・同3(155~160)

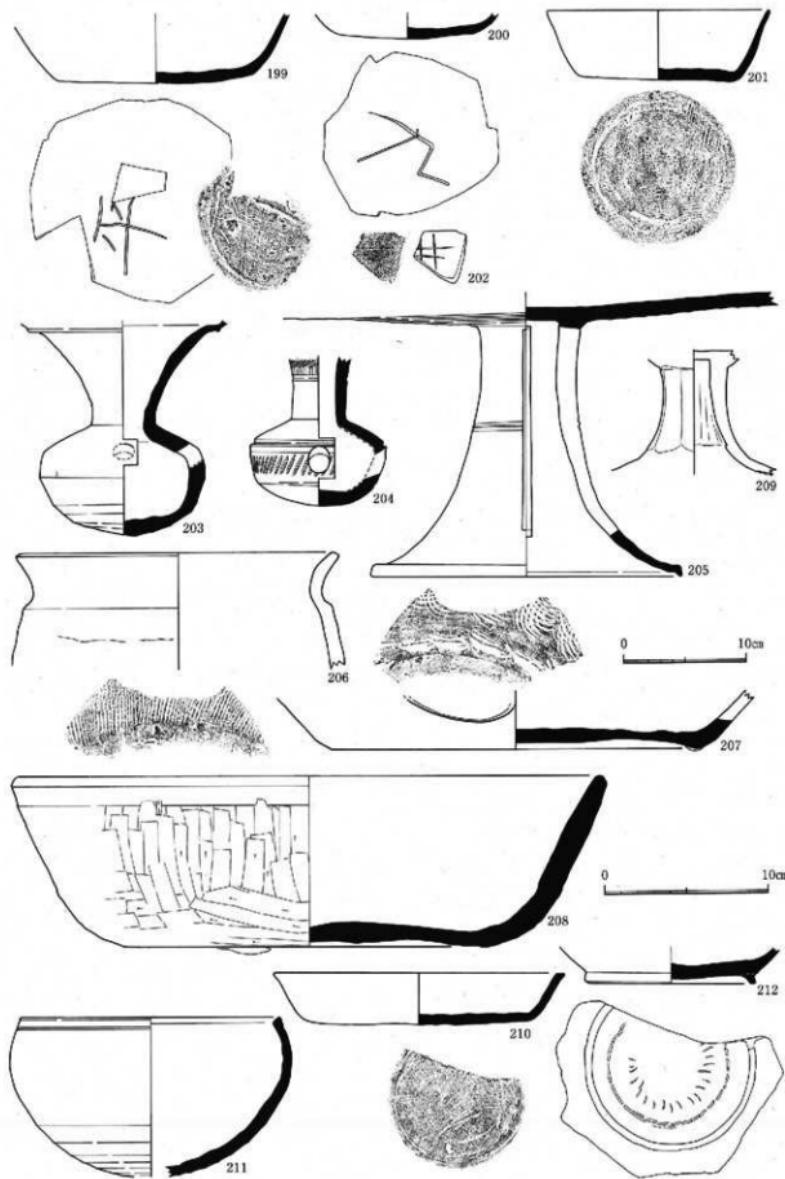


第33図 4区出土遺物実測図 2 (1/3)  
 S D04土器群3(161)・同4(162~169)・同5(170,171)・同6(172~177)

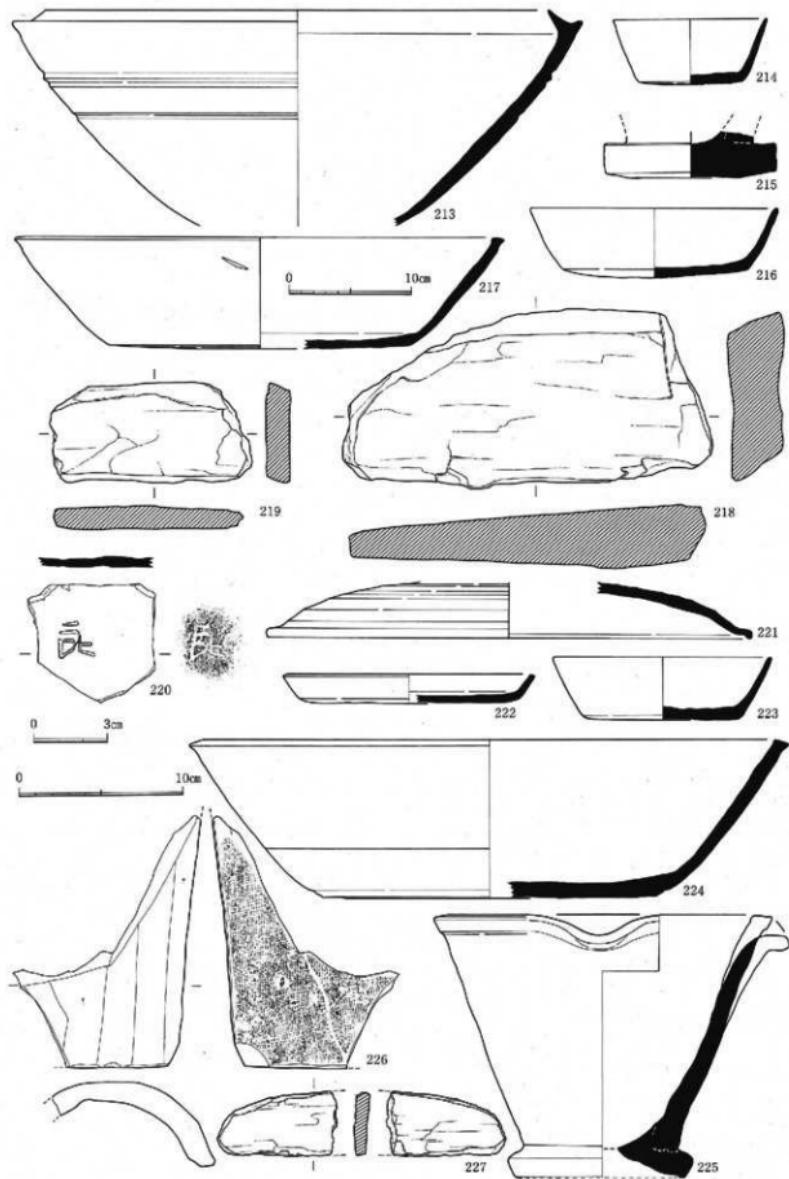


第34図 4区出土遺物実測図3 (1/3)

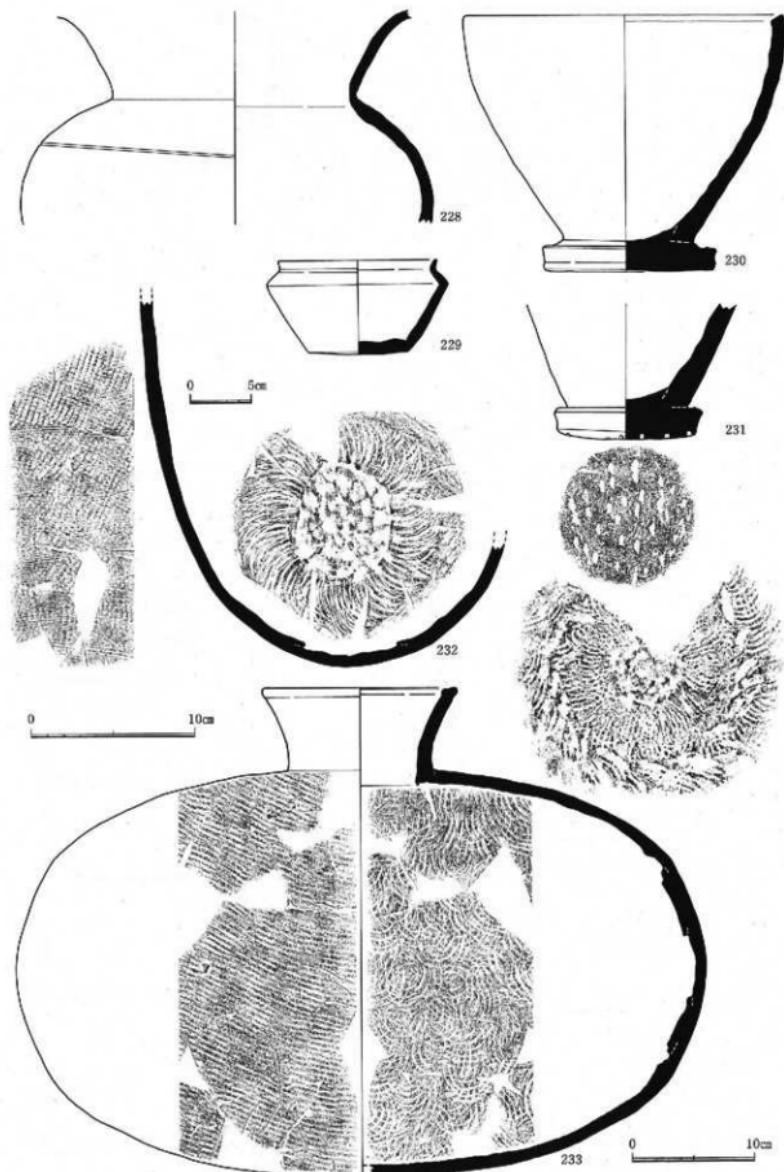
S D04土器群(178~187)、S D04A区中層(188~190)・B区上層(191)・C区上層(192,193)・C区中層(194~198)



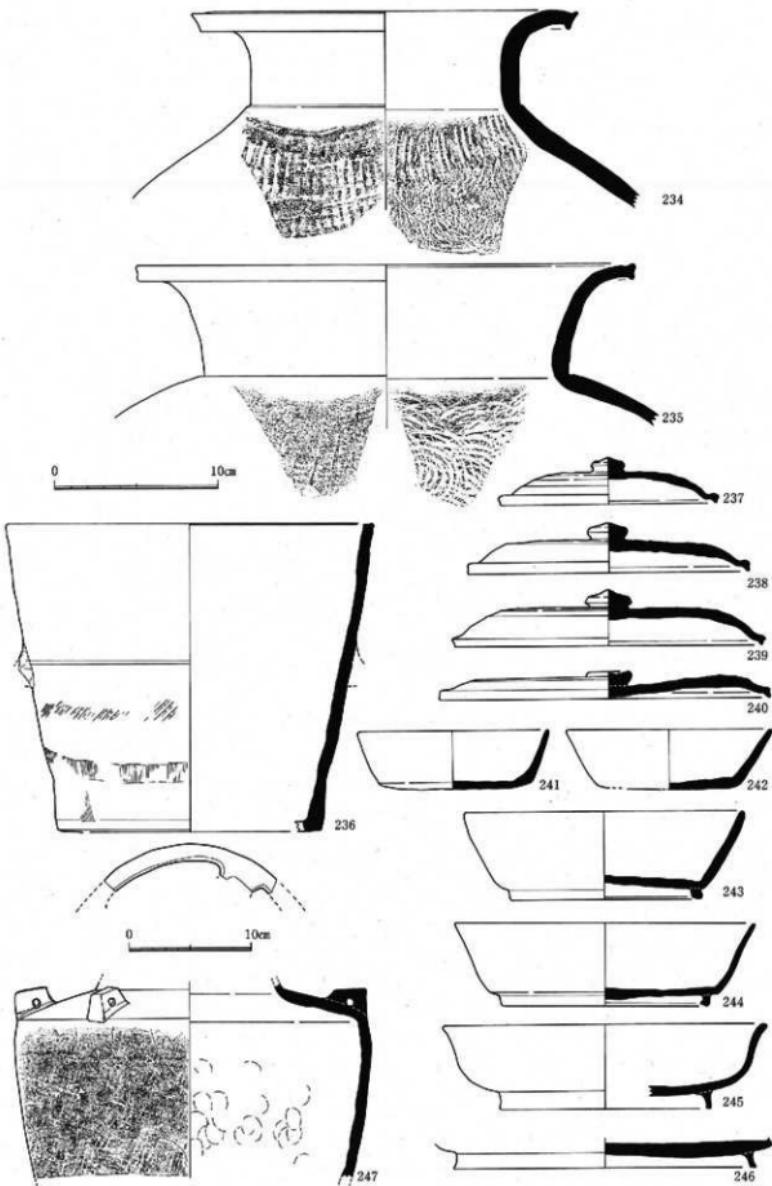
第35図 4区出土遺物実測図4 (1/3)  
 S D04 C区中層(199~208)・C区最下層(209)・D区上層(210)・D区中層(211,212)



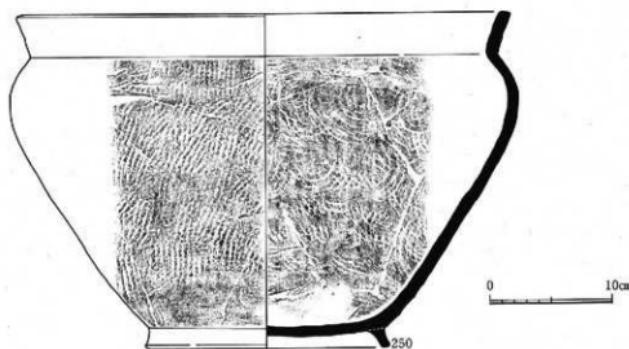
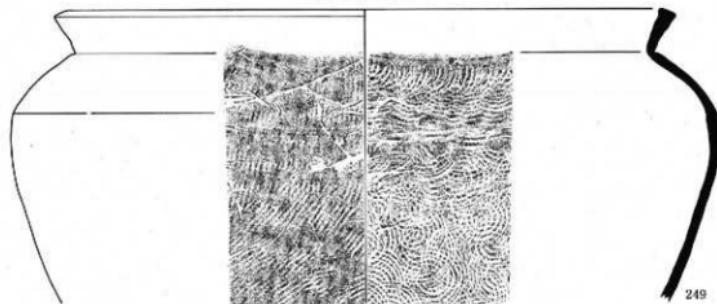
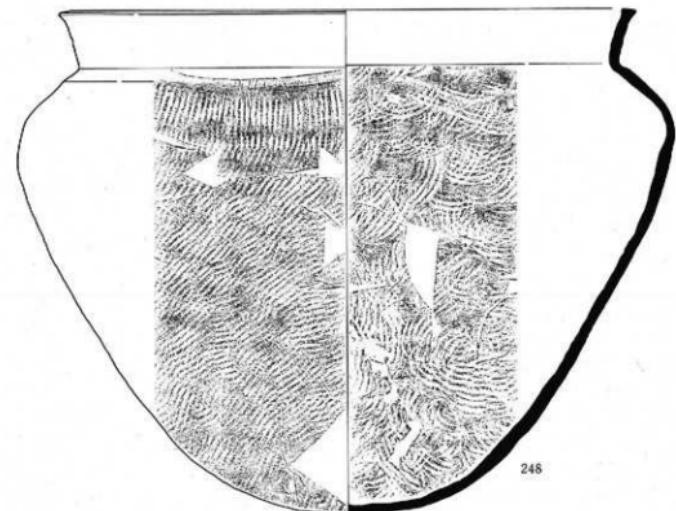
第36図 4区出土遺物実測図5 (1/3)  
SD04 E区中・下層(213~218)・F区中層(219~225)・F区中・下層(226,227)



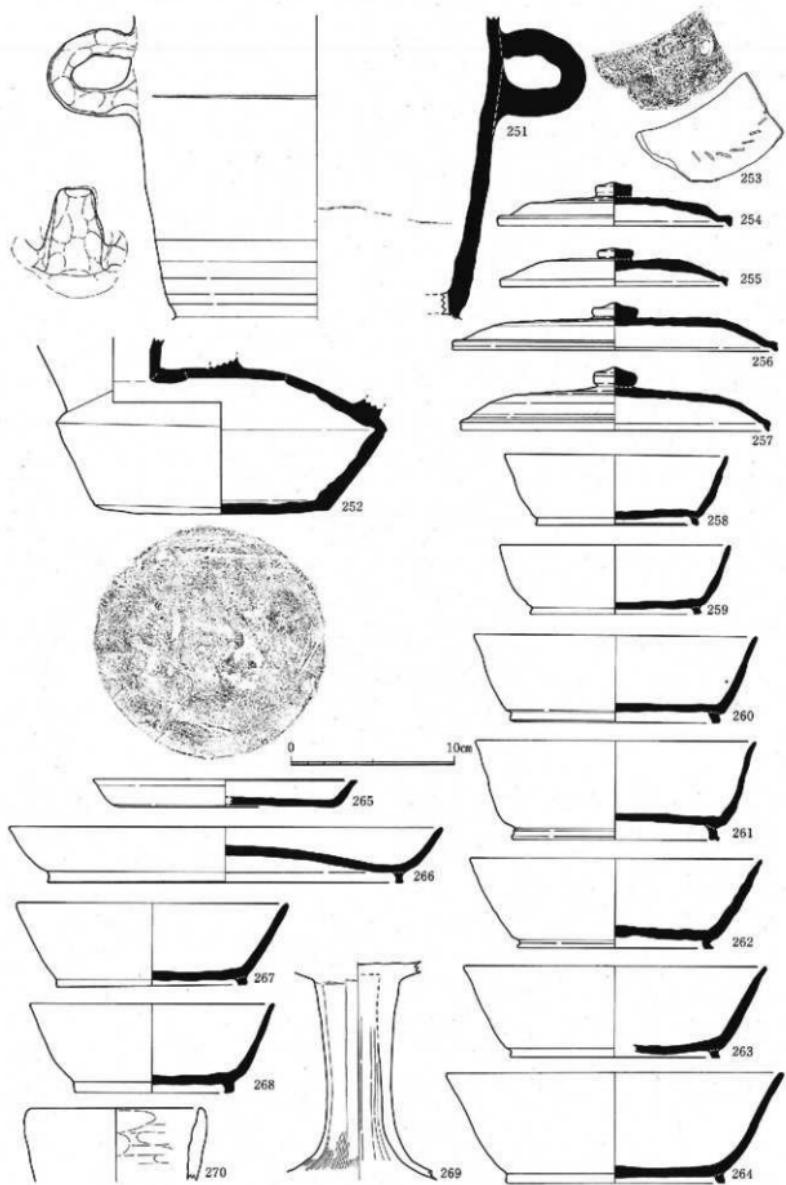
第37図 4区出土遺物実測図6 (1/3) SD04 F区中・下層(228~233)



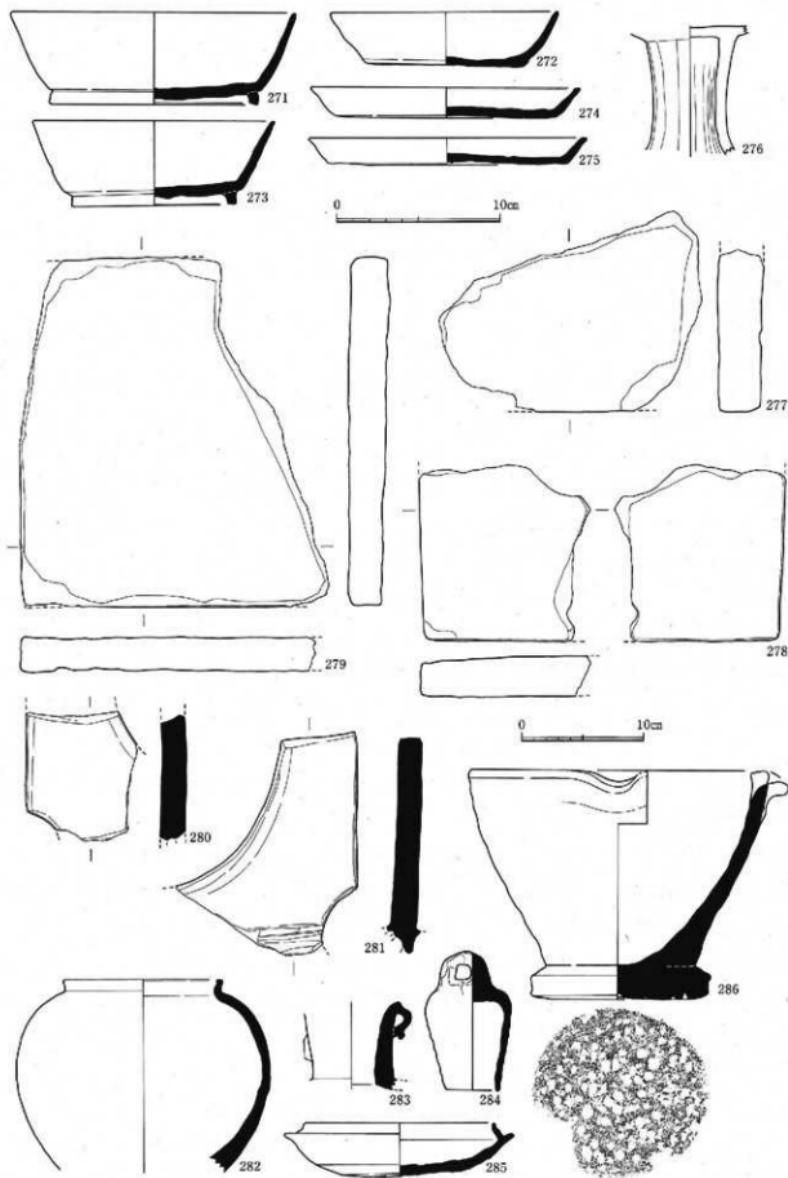
第38図 4区出土遺物実測図7 (1/3) SD 04 F区中・下層(234~246)・G区中・下層(247)



第39図 4区出土遺物実測図 8 (1/4) SD04G区中・下層(248~250)



第40図 4区出土遺物実測図9 (1/3)  
S D04G区中・下層(251~266)、S D04畦1(267,268)・畦2(269,270)



第41図 4区出土遺物実測図10 (1/3)

S D04陸2(271)・陸4(272~276)、S D17最上層(277,278)、S D17(279~284)、S B05柱穴198(285)、包含層(286)

### 3-4. 鎌倉時代の遺構

中世の遺構は、ほぼ調査区全域で検出された。おおむね鎌倉時代後期に属するが、一部により時期の下がるものも認められる。主要な遺構は、大溝と掘立柱建物・柵からなる屋敷跡と推定される遺構群およびそれらと何らかの有機的関連を持つと考えられるピット、土坑、溝、落込み等である。

#### 屋敷跡

屋敷跡を構成すると認識できる遺構に、溝4区SD17・5区SD01、4区SD644、内外2条の柵、掘立柱建物4区SB06、SB07-1, 2がある。5区北辺を東西に走り、北西隅ではほぼ直角に曲がり、4区西側中央部を南北に貫く大溝（4区SD17・5区SD01）に囲まれた中に、溝と柵で囲まれた中心的な掘立柱建物（4区SB07-1, 2）があり、その東側にも少し規模の小さい掘立柱建物（4区SB06、SB09）があるという構造が復元でき、調査区が屋敷地の北西部にあたっていたことになる。

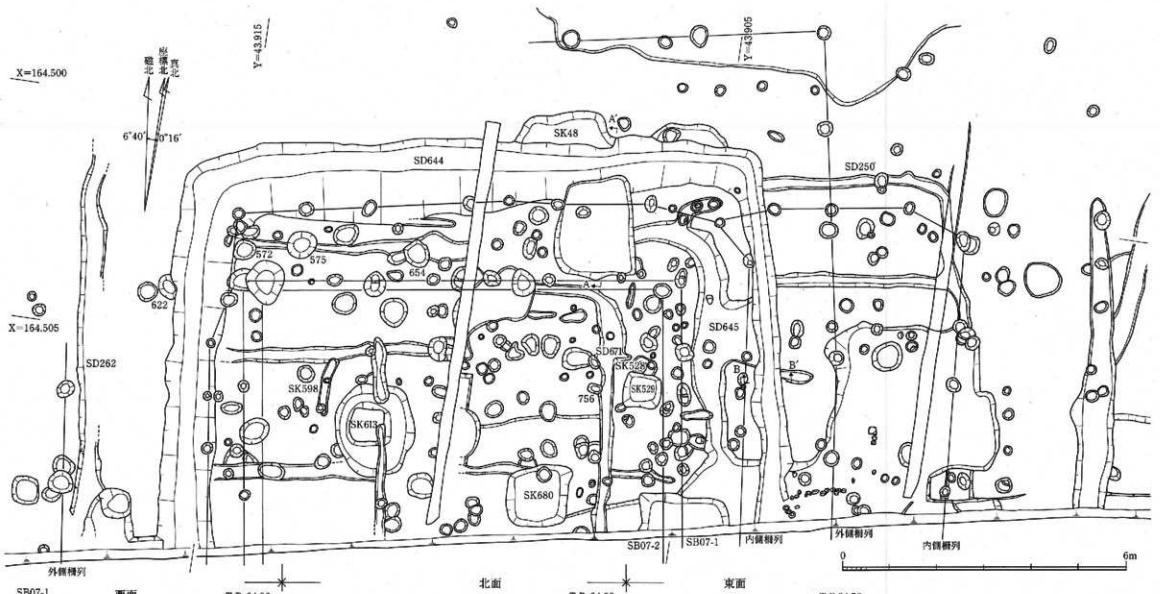
SB07-1, 2の内部を中心に、屋敷地内では多数の柱穴、土坑、溝等々が検出されている。その多くは、当該屋敷地の中で何らかの機能を果たしていた施設の痕跡と推定される。ただし、それらがどのような構造の施設を構成していたかは、明らかにできていない。このため、それらの遺構については主要なもののみ取り上げる。

SB07-1, 2は4区中央部やや東寄りに位置し、南側は調査区外に広がっている。長方形に回る溝SD644の内側で、ほぼ同一の位置にあり、建替えがあったものと考えられる。SD644で囲まれた範囲の規模は、その内側で東西約11.4m、南北7m以上、面積にして80m<sup>2</sup>程になる。

SB07-1は東西4間、南北3間以上の掘立柱建物で、柱穴の中心部分で測ると、その規模は東西約9.3m、南北5.6m以上。SB07-2は東西3間、南北2間以上の建物で、東西8.4m、南北5.6m以上を測り、SB07-1よりも一回り小さい。その形状と土層断面の観察から当初の形態に近いと考えられるSB07-2南東の柱穴からすると、柱穴は径0.3m程の円形であったと推定される。柱穴の切り合い関係から、SB07-1→SB07-2の順に変化したことが確認できる。柱穴中心線で測る主軸方位N 8° W。

土坑SK680は、SB07-1, 2内部の中央やや東寄りに位置する。平面はやや不整な隅丸方形で、上部の幅は東西、南北とも1.32m、底部では東西1.08m、南北0.95mを測る。底部は平坦で断面逆台形を呈する。深さ0.16m。底部北端中央に径0.34m、深さ0.16mのピットが一つある。埋土は、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土、灰黄褐色（10YR5/2）粘質土、褐色（10YR4/4）砂質土、黄褐色（10YR5/6）砂質土。

SK613は、SB07-1, 2内部の西寄りに位置する。平面形は不整な梢円形で、中央部が方形に掘り残されている。長径1.98m、短径1.68m、中央の掘り残し部分は一辺0.7m前後。掘り残し部分周囲の溝部分は、断面が逆台形に近く、上部幅0.30~0.75m、底部幅0.15~0.57m、深



第42図 4区由世屋敷地中央建物及び柵列平・断面図 (1/80, 1/40)

さ0.15~0.2mを測る。埋土は、砂混じり灰黄褐色（10YR5/2）粘質土、灰黄褐色（10YR5/2）粘質土と褐色（10YR4/4）粘質土の砂混じり混合土、砂混じり黄褐色（10YR5/8）粘質土。

S K 5 2 8, 5 2 9は、S B 0 7 - 1, 2内部の東辺、北寄りに位置する。5 2 8は、平面がやや不整な梢円形で、南側を5 2 9によって破壊されている。長径1.13m、短径0.7m以上、深さ0.54m。埋土は、砂及び小砾を含む灰黄褐色（10YR5/2）粘質土、にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土、砂混じりの明黄褐色（10YR6/6）粘質土の混じるにぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土、明黄褐色（7.5YR5/6）砂礫。5 2 9は、平面が不整な隅丸方形で、東西1.66m、南北1.45m、深さ0.64mを測る。底部はほぼ平坦。上・中層の埋土は、褐色（10YR4/3）、にぶい赤褐色（5YR4/4）、灰黄褐色（10YR4/2）、にぶい黄色（2.5Y6/3）、にぶい黄橙色（10YR6/3）等の粘質土であるが、最下層には砂混じりの褐灰色（10YR4/1）粘土が堆積し、上・中層には2層にわたって炭の薄層が挟在する。

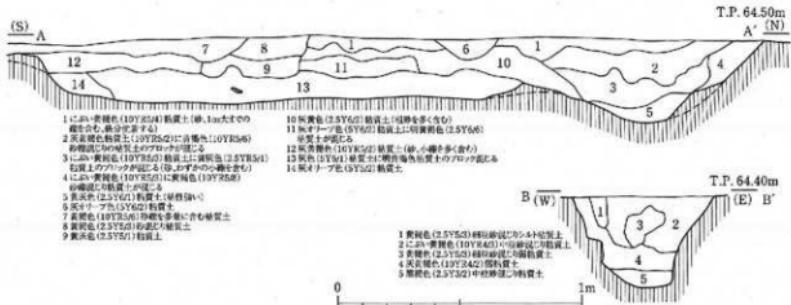
S K 5 9 8は、S B 0 7 - 1, 2内部の西辺近く、北寄りに位置する。平面は円形で径0.75m、深さ0.42mを測る。底部は平坦で、断面逆台形を呈する。底部近くから瓦器碗、土師器小皿が一括出土している。地鎮に関わる土坑と考えられる。瓦器碗、土師器小皿の出土した底部の埋土は褐灰色（10YR4/1）粘質土で、その上層は、暗褐色（10YR3/4）、褐色（10YR4/4）、暗褐色（10YR3/3）、灰黄褐色（10YR4/2）、にぶい黄褐色（10YR6/3）、褐色（10YR4/6）、明褐色（7.5YR5/8）等、ブロック状の粘質土で埋められていた。

S B 0 7の周囲、溝S D 6 4 4の内側肩部分には柵が設けられていた（内側柵列）。S D 6 4 4に沿って作られていて、北側で7間、東側で4間以上、西側で5間以上を数える。柱穴の並び方が若干不整なところがあり、その間隔も0.8~2.2mと場所による変異が大きい。柱穴は、おおむね円形で径0.2~0.25mのものが多い。この柵は後に東側に拡張されたものようで、S D 6 4 4の東側に取り付く溝S D 2 5 0に沿って東へ約5.1m延び、さらに屈曲して南に延びている。

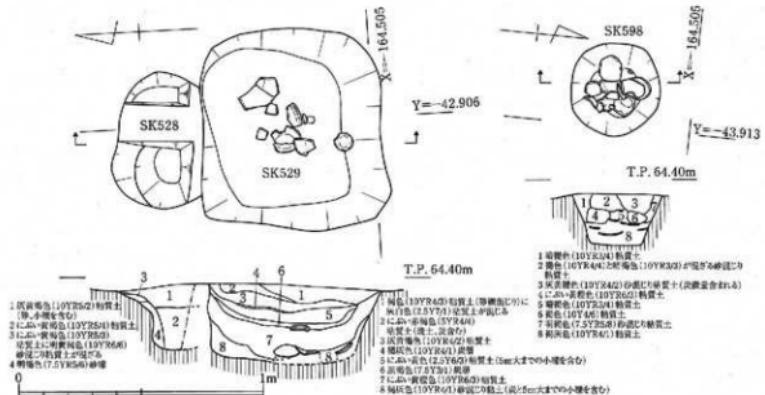
溝S D 6 4 4は上部幅0.5~1.6m、底部幅0.2~0.5m、拡張部分にあたるS D 2 5 0は上部幅0.3m前後、底部幅0.2m前後。北と西で幅広となっている。断面U字形。深さは北側で約0.35m、東側で約0.4m。

溝S D 6 4 4の外側にもう一列柵がある（外側柵列）。東側5間以上、西側3間以上、北側は東から2間分が検出されている。北側約5.4m、東側10.4m以上、西側3.5m以上を測り、北西部では対応する柱穴を検出していない。この部分はかなりの削平を受け消失してしまったとも考えられるが、北側西端の柱穴で現存する深さ0.35mという数字を考慮すると、ここには当初から柵が無かった可能性もある。柱穴の間隔は、その中心部分で測ると、約2.0mと約2.6mの2種に分かれるが、検出範囲が狭く、柱穴の並びとの間に有機的な関係を見出すことはできない。柱穴はほぼ円形で径0.3~0.35m程のものが多い。この柵に囲まれた範囲は、南北10.5m以上、東西は調査区南辺近くで約16.3mを測る。

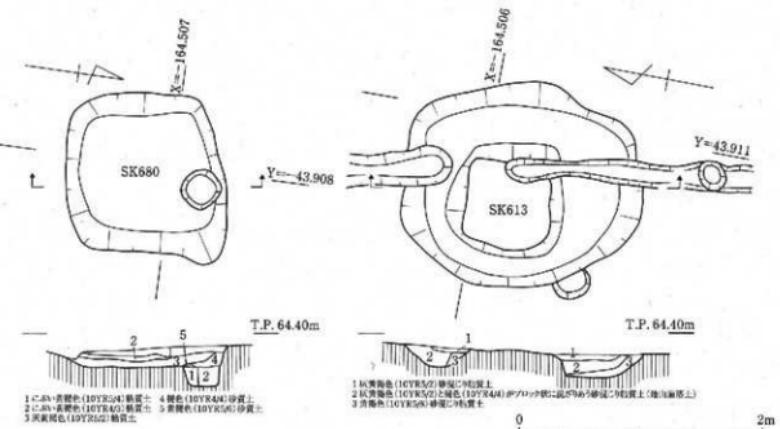
西側外側柵列の東に接して溝S D 2 6 2が、西側約2mに溝S D 2 5 2及びS D 2 6 1がそれ



第43図 4区SB07周溝SD644土層断面図 (1/20)



第44図 4区SK528, 529, 598遺物出土状況図・断面図 (1/20)



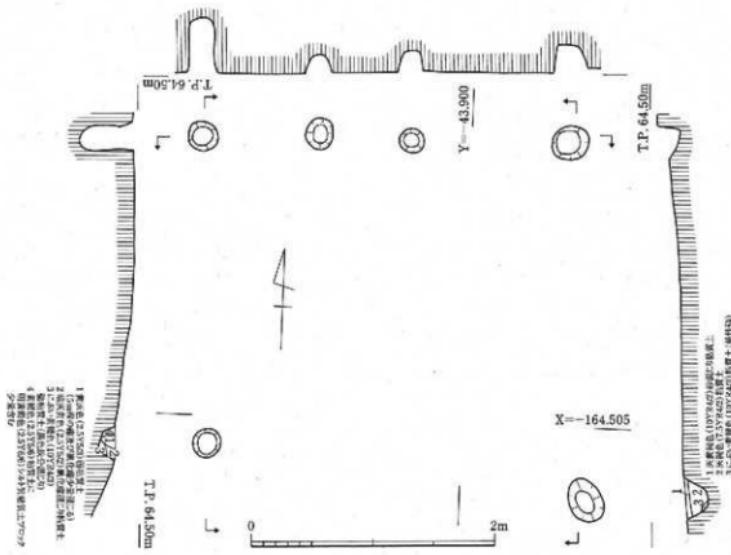
第45図 4区SK680, 613平・断面図 (1/40)

ぞれ南北に走る。これらの溝もその位置と方向性から上述の掘立柱建物、柵、溝と一連の遺構であった可能性が強い。ただし、いずれも部分的な検出にとどまったため判然としないところが多い。

調査区中央西寄りの北辺から始まるSD252は、はじめ東北から西南に走った後、屈曲して南に延びる。屈曲部でSD261と分岐するが、SD261は調査区南端近くでSD252に切られる形で終わっている。SD252は上部幅0.9~1.0m、底部幅0.7~0.8m、深さ約0.15m、SD261は上部幅0.3~0.5m、底部幅0.2~0.4m、深さ0.05~0.1m。ともに、断面逆台形に近く、内部には砂混じり粘質土が堆積していた。

SD262は、調査区北辺から南へ約6.5mの地点から南方へ約8.0m検出されたが、東側の壁が3.5m程にわたって削平のために消失しているなど、遺存状態が悪い。上部幅0.4~0.55m、底部幅0.25~0.3m、深さ0.1m前後。断面形は幅の広いU字形で、内部には疊混じりの黄灰色粘質土、灰黃褐色粘質土が堆積していた。

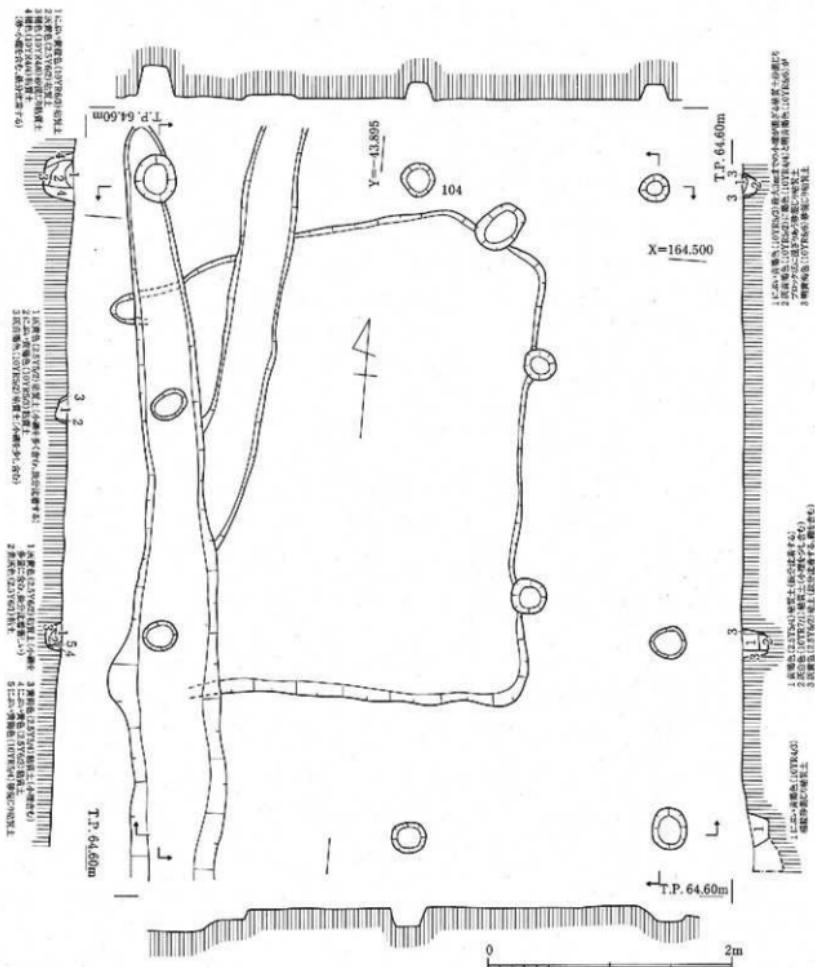
掘立柱建物4区SB06は、外側柵列の東方約5.5mに位置する。東側では北から2番目の柱穴が存在しないという変則的な構造であるが、東西2間、南北は東側2間、北側3間の建物と推定している。南西隅の柱穴は溝SD114による破壊のため消失したものと考えられる。柱穴の中心部で測ると東西約4.1m、南北約5.3mの規模になる。なお、西側が東側より0.1~0.2mほど長くなる可能性もある。柱穴はほぼ円形で径0.25~0.3mのものが多く、本来この程度の規模であった



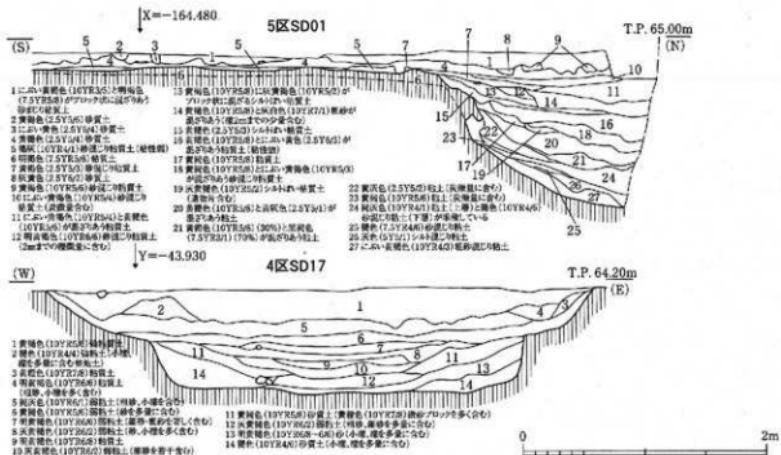
第46図 4区SB09平・断面図 (1/40)

と考えられる。柱穴中心線で測る主軸方位N 5° W。

4区SB09は、調査区中央やや西寄りの南辺に位置する。南側が調査区外に広がる東西3間、南北2間以上の掘立柱建物と推定されるが、柱穴の間隔が不揃いで、南北方向の柱穴の位置が東西で対応しないなど、疑問の残るところもある。柱穴の中心で測ると東西3.0m、南北3.4m以上。



第47図 4区SB06平・断面図 (1/40)



第48図 4区SD17、5区SD01土層断面図(1/40)

柱穴はほぼ円形で径0.25m前後である。柱穴中心線で測る主軸方位N 3° W。

4区SB06とSB09は、屋敷地の中心的な建物と推定されるSB07の拡張に伴って建替えられた付属的な建物とも考えられるが、出土遺物による正確な時期比定ができていないため、断言できない。

溝4区SD17・5区SD01は、前述のように、屋敷地を区画すると考えられる大溝である。調査区が分かれており、5区では北及び西側の肩部が調査区外にあたるが、位置・形状・堆積土の状況から同一の溝と判断できる。5区東北端から西に向かい、5区北西端で直角に近く曲がった後、4区西部を縦断する形で南に走り、4区南辺から3m付近で終わる。4区北辺から南へ5.5m付近には、上部幅0.5~0.7m、底部幅1.6~2.3mの、東西をつなぐブリッジが掘り残されている。ブリッジを挟む南と北の大溝は、上部幅0.7m、底部幅0.2mほどの細い溝でつながれている。大溝底部の高さには、ブリッジを挟んで0.5m以上の落差があり、南側大溝北壁斜面の途中に南北をつなぐ溝が口を開ける構造となっている。ブリッジ南側で上部幅約4.6m、底部幅2.9~3.1m、深さ0.8~1.1mを測る。深さは、ブリッジ北側では約0.5mと浅くなるが、5区では再び1m前後と深くなっている。このため、4区・5区間の未調査区の中で、4区に見られたと同様の溝底段差があるものと推定される。4区で見る限り断面逆台形であるが、ブリッジ南側では明瞭な2段掘りとなっている。同様の形状は、ブリッジ南側ほど明瞭ではないものの、ブリッジ北側や5区でも認められ、基本的な形状であった可能性が強い。溝底は、ブリッジ北側を除いて、北東端から南端へ向かって緩く傾斜しており、5区北東端付近と4区南端付近での比高差は約0.6mを測る。溝内の堆積土は、砂、砂質土、粘質土、粘土が互層をなし、流水堆積であることを示している。大溝に設けられたブリッジは、屋敷地の出入り口の一つであった可能性があり、ブリッジの東側

で外側柵列が検出されなかったことも、そのような考え方を補強するかもしれない。ただし、大溝は、南端部分で急激に浅くなってしまい、4区南辺から3m付近で終わるようである。このため、上述のブリッジ部が出入り口の一つであったとしても、大溝から南側の構造との関係が重要になってくる。今回の調査では、大溝の南側の構造が明らかにできなかった。今後、類例等の検討によって解明すべき課題である。また、4区において大溝東側に幅5m前後の遺構の希薄なゾーンが認められるため、ここに土壘等のあった可能性も考えられるが確認できていない。

#### 参考文献

山田1999 竹原 伸次・山田 隆一『陶器南遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会 1999.3

### 3-5. 鎌倉時代の遺物

(4区東半部) 4区東半部からは、遺物収納用コンテナに13箱の遺物が出土している。その大半は、包含層出土の古墳時代後期～奈良時代の須恵器であるが、中世屋敷跡が検出されたため、中世土器が遺構に伴って、数多く出土している。

S K 4 8 からは、鎌倉時代後期の土師器小皿(289)・東播瓦質壺・玉縁式丸瓦・凝灰岩製の砥石(287)・泥岩製の砥石(288)が出土している。砥石は、共に中砥で、手持ち砥石である。

柱穴104は、掘立柱建物S B 0 6を構成する柱穴であるが、埋土中から、奈良時代の須恵器杯蓋(290)が出土している。混入品と考えられた。

S K 5 2 9 からは、鎌倉時代後期の和泉型瓦器椀(292・293)・土師器小皿(291)・東播ねり鉢(294)・凝灰岩製砥石(295)などが出土している。凝灰岩製砥石は、淡灰茶色を呈し、茶色の縞が明瞭に入っている。裏面が焦げて、暗灰色を呈している。表裏2面使用しており、中砥の置き砥である。

S K 5 7 2 からは、鎌倉時代後期の土師器小皿(296)が出土している。

S K 5 7 5 からは、鎌倉時代後期の瓦器椀(297)が出土している。

S K 5 9 8 からは、鎌倉時代後期の瓦器椀(298～301)・土師器小皿(302)が出土している。

S K 6 2 2 からは、鎌倉時代後期の和泉型瓦器椀(303)・土師器小皿(304)が出土している。

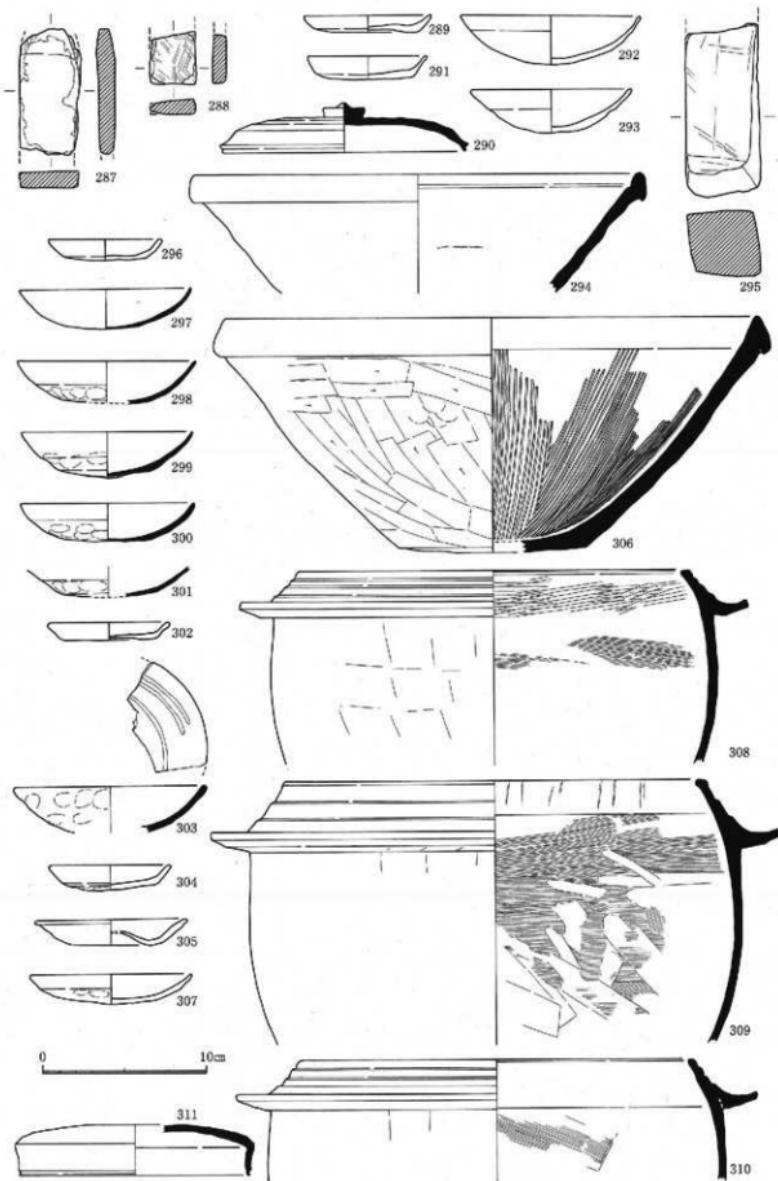
S D 6 4 4 からは、鎌倉時代後期～南北朝時代の土師器へそ皿(305)・常滑焼壺・瓦質すり鉢(306)が出土している。瓦質すり鉢は、内面に断続的なすり目を刷毛で入れたものである。

S D 6 4 5 からは、鎌倉時代後期の土師器小皿(307)が出土している。

柱穴654からは、鎌倉時代後期の土師器羽釜(308)が出土している。

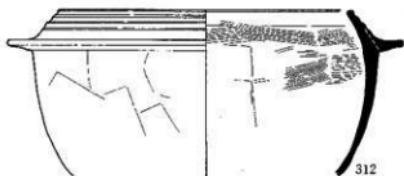
S D 6 7 1 からは、鎌倉時代後期の瓦質羽釜(309・312・313・315・316)・土師質羽釜(310・314)が出土している。これらの羽釜には、鋸部から下の部分に煤が厚く付着し、長期間実際の煮炊きに使用されていたことが明らかなもの(312・315・316)が含まれていた。

柱穴756は、掘立柱建物S B 0 7-1を構成する柱穴であるが、埋土中から、奈良時代の須恵器壺蓋(311)が出土している。混入品と考えられた。

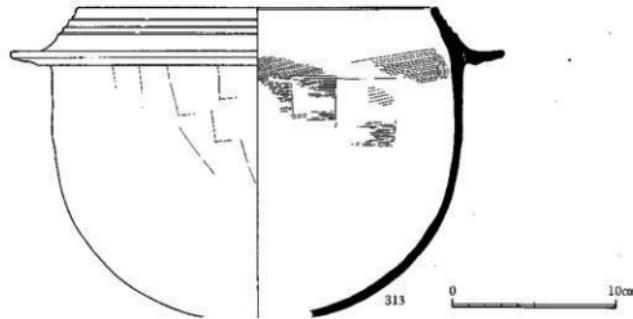


第49図 4区出土遺物実測図11 (1/3)

S K 48(287~289)、柱穴104(290)、S K 529(291~295)・572(296)・575(297)・598(298~302)、柱穴622(303,304)、  
S D 644(305,306)・645(307)、柱穴654(308)、S D 671(309,310)、柱穴756(311)



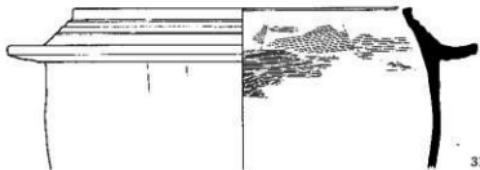
312



313

0

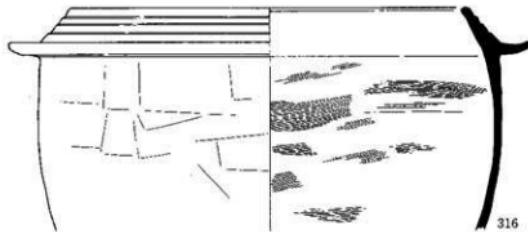
10cm



314

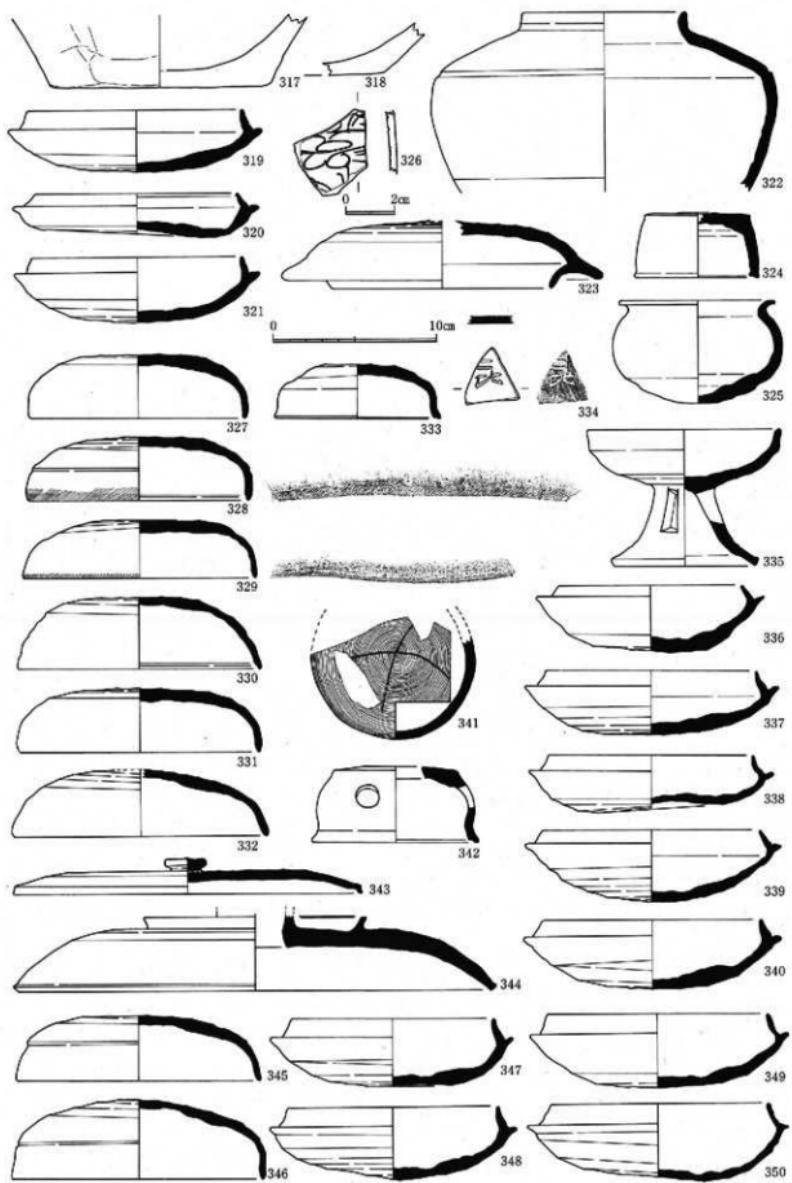


315

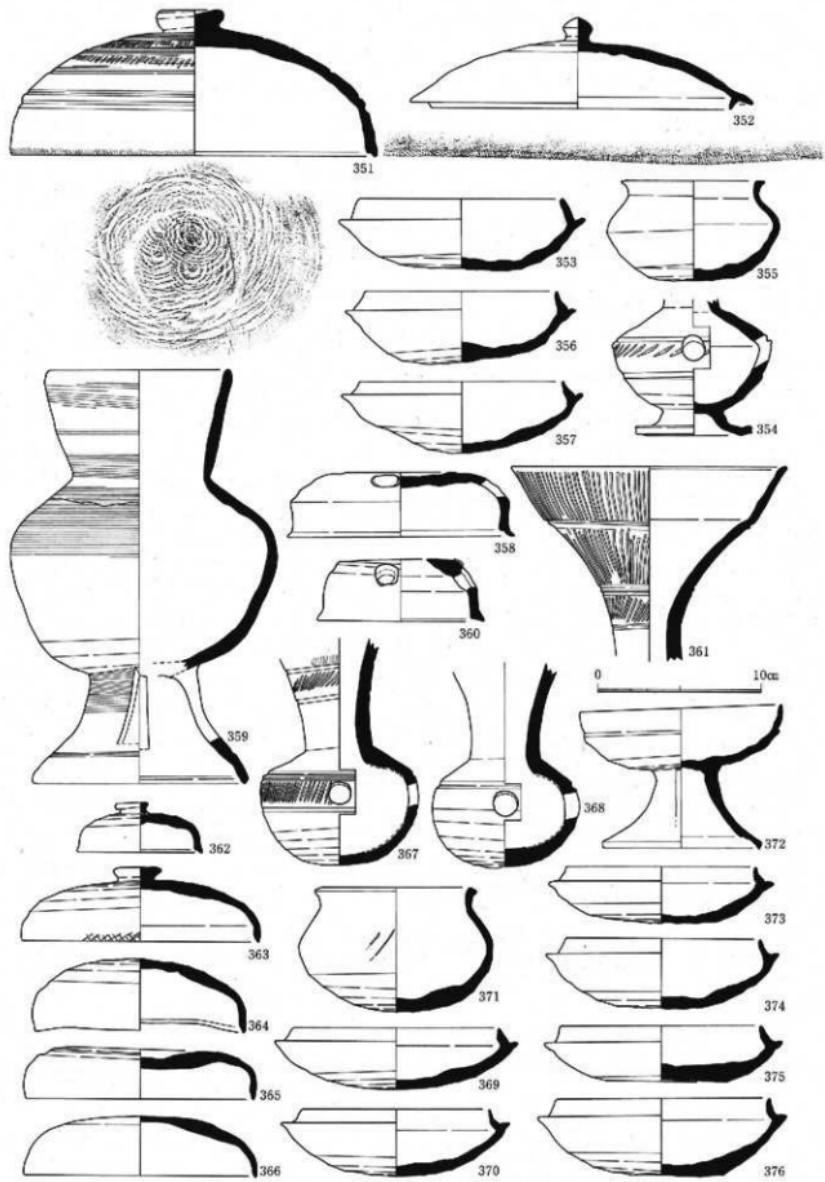


316

第50図 4区出土遺物実測図12 (1/3) S D671(312~316)

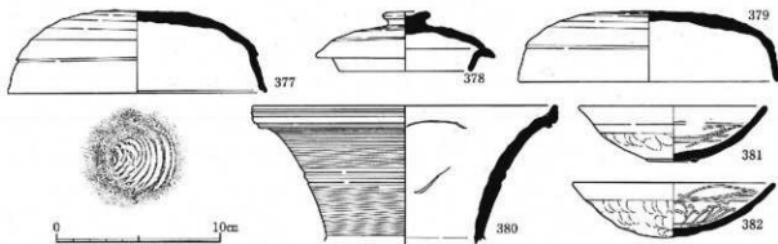


第51図 5区出土遺物実測図1 (1/3) SD 01(317~326)、包含層(327~344)、SK 04(345~350)



第52図 5区出土遺物実測図2 (1/3)

S K 04(351)・76(352)・94(353)、柱穴243(354)・244(355)、S D 340(356～359)・341(360～376)



第53図 5区出土遺物実測図3 (1/3) SK 346(377)・366(378~380)・175(381,382)

(5区) 5区からは、遺物収納用コンテナに36箱の遺物が出土している。その大半は、生焼けや焼け歪んだ古墳時代後期の須恵器である。

SD 01からは、弥生時代中期の壺底(317・318)・古墳時代後期の須恵器杯身(319~321)・短頸壺(322)・径が20cmもある大型の蓋(323)・焼き台(324)・壺(325)・安土桃山時代の華南三彩盤(326)などが出土している。

SD 01の南側、調査区西端付近の遺構群上層(遺物包含層)からは、古墳時代後期の須恵器杯身(336~340)・外面端部に細かい刷毛目が残されている杯蓋(328・329)・ヘラ記号の施された小型提瓶(341)・焼き台(342)・無蓋高杯(335)・壺蓋(333)、奈良時代の4区出土のものと全く同じ文字?の書かれた須恵器杯(334)・杯蓋(343)・大型の蓋状のもの(344)などが出土している。

SK 04からは、古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋・口径が22.4cmもあり、外面に櫛描き刺突文や沈線文が施された、初期須恵器の形状をもった、内面に青海波叩き目痕を残す大型蓋(351)などが出土している。

SK 76からは、飛鳥時代の口径18.6cmの生焼けの大型須恵器杯蓋(352)が出土している。

柱穴243・244からは、古墳時代後期の須恵器はそう(354)・壺(355)が出土している。

SD 340は、枝番を付して遺物を取り上げているが、古墳時代後期の須恵器杯身(356・357)・焼き台(358)・台付き壺(359)などが出土している。

SD 341は、枝番を付して遺物を取り上げているが、古墳時代後期の須恵器高杯蓋(362・363)・杯蓋・はそう・無蓋高杯(372)・杯身・焼き台(360)などが出土している。

SK 346からは、青海波叩き痕を残す古墳時代後期の須恵器杯蓋(377)が出土している。

SK 346の上層にあったSK 366からは、古墳時代後期の須恵器壺蓋(378)・杯蓋(379)などが出土している。

SK 175からは、鎌倉時代後期の和泉型瓦器椀(381・382)が出土している。

## 第4章　まとめ

前章で概述したように、今年度の発掘調査で検出された遺構・遺物は、概ね古墳時代後期後半、奈良時代、鎌倉時代後期に大別される。以下、時期毎に補足的な説明を加えておく。

まず、古墳の所属年代について。この問題は、陶器千塚古墳群の造営期間や分布範囲にも大きな影響を与える。よって、現時点での考え方を少し詳しく述べておきたい。

今回発見された古墳の築造時期を直接示す根拠となりえる遺物は、主体部床面に敷かれていた磚、主体部壁溝内及び裏込土から出土した少量の須恵器細片、周溝出土の土器の3種類に限られる。まず磚であるが、今回出土したような無紋の磚について、詳細な年代観を語るのは困難であろう。次に周溝内出土の須恵器であるが、前述のように、周溝埋土上層から多量の須恵器が出土している。下層からも少量の土器が出土しているが、そこでは古墳時代後期後半、曆年代に言い換えると6世紀後半から末葉のものと奈良時代のものの両者が認められる。上層での須恵器の出土状態からすると、周溝はある程度埋没した段階で、土器捨て場のような用途に再利用されていた可能性が高く、周溝出土の土器から本墳の時期を推定することは困難である。最後に、主体部壁溝内及び裏込土出土の須恵器細片である。時期比定の困難なものが多いとはいえ、明らかに奈良時代に下る須恵器は認められない。また、宝珠つまみの付く蓋杯出現前後と推定できる個体の存在が確認できる。4区SB05柱穴198出土杯身よりは明らかに後出で、遺構の切りあい関係とも矛盾しない。本書で、本墳の時期を古墳時代後期後半と位置づけてきた所以であり、曆年代でいえば、7世紀初頭から前葉にあたると推定しておきたい。

本墳を陶器千塚古墳群に含めることは、その造営場所、主体部構造からも異論の少ないところと考えるが、本墳の時期を上記のように考えた場合に、本墳は、出土遺物等が知られている陶器千塚古墳群中の古墳に比べ、明らかに一段階時期の下るものとなる。この点については、小規模な方墳でかつ南向きの崖面近くに営まれているという本墳の形状や立地にも、時期的要素が現れているものと考えられる。

さらに重要なことは、今回の調査で発見された古墳時代後期後半の掘立柱建物群は、西隣にある陶器千塚古墳群のいくつかと、存続時期の並行する可能性が強いということである。掘立柱建物群によって構成された集落構造を解明するにはいたっていないが、古墳群の形成と何らかのつながりを持っていた人々の集落であった可能性は強い。少なくとも、ここに住んでいた人々は古墳の築かれしていく様子を見ていたはずであるから。

次に、古墳造営集団の性格に関わる問題として、主体部出土の磚についても若干の補足を加えておく。前章で述べたように出土した磚は18点を数え、それらは法量と胎土から三種類に大別できる。出土数はAとした厚さ2.6~2.7cmのものが4点、厚さ約3.0cmのBが2点、その他は厚さ3.4~3.6cmのCである。前述のように、北側で検出された磚は原位置を保っていたと判断できる。最も北側にある3点がその確実なもので、そこではAだけが使用されている。その点では、規格

の異なる磚を場所によって使い分けていた可能性もある。ただし、このことはこれらの磚が本墳のために製作されたことを、直ちに意味するものではない。出土した磚に完形品や焼成良好なもののみがより重要で、失敗品や不良品を主体部床面の素材として再利用した可能性も考えられるのであり、今後、磚を使用した古墳全体の中で検討すべき課題である。

奈良時代については、7棟の掘立柱建物が検出された。そのうち2棟が総柱の建物である。位置関係からすると、4区SB01とSB03、5区SB05とSB06はそれぞれセットになる可能性が強く、4区SB02とSB04にもその可能性がある。また、5区SB05・SB06と4区SB08とは方位が近似している。通常言われているように、総柱の建物を倉庫と理解してよければ、4区SB01とSB03、5区SB05とSB06は住居と倉とがそれぞれワンセットで営まれていたことになる。さらに、5区SB05・SB06と4区SB08の方位が近似を重視すると、調査区南西部にある程度のまとまりを持った集落が存在していたことも想定可能である。このような想定は、古墳周溝上層から当該時期の多量の須恵器が出土したことともよく整合しているものと考えられる。

鎌倉時代後期には、調査区東半部を中心に、屋敷地が成立している。この屋敷地は、検出された範囲で東西約45m、南北約42m、面積約1,890m<sup>2</sup>に及ぶ。東側にどれだけ広がっているかは推測できないが、南側は陶器川の谷に近くそれほど広がることは無いと考えられる。中心的な建物と考えられる4区SB07を囲む溝及び柵の北側、大溝との間に幅30m前後の空地があったようであるが、作業場等に利用された空間と推定される。なお、建物内部の構造を復元するにはいたっていない。

鎌倉時代から室町時代のいわゆる中世の時期、隆盛を誇った陶邑窯は既に無い。しかし、陶器川右岸では、東方約300mに本遺跡と同様、検出された遺構群が屋敷跡と推定されている小角田遺跡があり、左岸でも、陶器南遺跡では4個所で掘立柱建物群が発見され、田園遺跡では多数の遺物とともに土坑や溝が検出され周辺に住居あるいは館跡の存在が推定されているなど、この時代の遺構・遺物は本遺跡周辺でも数多い。今回の調査で発見された屋敷地のような遺構が、地域の遺跡群の中で、どの程度の密度で存在するのか。それらの併存関係はどうか。それによって、本遺跡の屋敷地の歴史的評価も大きく変動することになろう。残された課題は多い。

出土遺物觀察表

遺物番号	地区	遺構・層位	種別	器種	時 期	法量 (cm)		摘要	図	図版
						高さ	幅			
1	3	S D 0 1	須恵器	器台	古墳後期	(7.7)	29.6		6	15
2	3	S D 0 1	須恵器	器台	古墳後期	(10.6)	19.6	短脚二段造かし。	6	15
3	3	S D 0 1	須恵器	高杯	古墳後期	12.4	7.9	二方通かし。	6	
4	3	S D 0 1	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.9	13.4		6	
5	3	S D 0 1-1	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.6	14.5		6	
6	3	S D 0 1-1	須恵器	杯身	古墳後期	7.2	25.6	生焼け。	6	15
7	3	S D 0 1 1	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	14.4	ヘラ記号。	6	
8	3	S D 0 1-1	須恵器	杯身	古墳後期	3.7	13.8		6	
9	3	S D 0 1-1	須恵器	杯身	古墳後期	3.9	14.6	内面に叩き目痕。	6	
10	3	S D 0 1-1	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	15.4		6	
11	3	S D 0 1-1	須恵器	杯身	古墳後期	3.7	15.6	ヘラ記号。	6	
12	3	S D 0 1-1	須恵器	はそう	古墳後期	(11.2)	9.0		6	
13	3	S D 0 1-1	須恵器	はそう	古墳後期	(13.0)	10.5		6	
14	3	S D 0 1-1	須恵器	はそう	古墳後期	(8.8)	9.7		6	
15	3	S D 0 1-2	須恵器	高杯	古墳後期	9.6	12.7		6	
16	3	S D 0 1-2	須恵器	器台	古墳後期	(9.5)	32.6		6	
17	3	S D 0 1-2	須恵器	瓶	古墳後期	22.0	26.2		6	15
18	3	S D 0 1-2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.1	15.8		7	
19	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.4	ヘラ記号。	7	
20	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	14.5	ヘラ記号。	7	
21	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	14.8		7	
22	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	3.8	15.4	ヘラ記号。	7	
23	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.8	15.5		7	
24	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	16.7	ヘラ記号。	7	
25	3	S D 0 1-2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	15.4	ヘラ記号。	7	
26	3	S D 0 1-2	須恵器	高杯	古墳後期	19.4	16.2	長脚二段造かし。	7	15
27	3	S D 0 1-2	須恵器	高杯	古墳後期	(8.4)	14.0		7	
28	3	S D 0 1-2	須恵器	高杯	古墳後期	(4.1)	8.2		7	16
29	3	S D 0 1-2	須恵器	高杯	古墳後期	(2.0)	6.3		7	16
30	3	S D 0 1-2	弥生土器	甕	弥生後期	(3.7)	4.6		7	16
31	3	S D 0 1-3	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.2	14.2	ヘラ記号。	7	16
32	3	S D 0 1-3	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	14.0	ヘラ記号。	7	16
33	3	S D 0 1-3	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.1	13.4		7	
34	3	S D 0 1-3	須恵器	高杯	古墳後期	(5.9)	7.4		7	16
35	3	S D 0 1-3	須恵器	高杯	古墳後期	(5.3)	7.6		7	16
36	3	S D 0 1-3	須恵器	高杯	古墳後期	(8.0)	10.2		7	16
37	3	S D 0 1-3	須恵器	杯身	古墳後期	3.9	15.5	内面に叩き目痕。	7	
38	3	S D 0 1-3	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	14.4		7	
39	3	S D 0 1-3	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.8		7	
40	3	S D 0 1-3	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	14.9		7	
41	3	S D 0 1-3	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	15.2		7	
42	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	13.5		8	
43	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.6	13.8	ヘラ記号。	8	16
44	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.3	13.4		8	16
45	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.3	13.4	ヘラ記号。	8	16
46	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.3	14.7	ヘラ記号。	8	16
47	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.6	13.7	ヘラ記号。	8	
48	3	S D 0 2	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.9	14.2		8	
49	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	13.9	ヘラ記号。	8	16
50	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.8		8	
51	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	15.2	ヘラ記号。	8	
52	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	14.4		8	
53	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	14.4	ヘラ記号。	8	16
54	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	15.4	ヘラ記号。	8	
55	3	S D 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	15.5		8	

遺物番号	地区	遺構・層位	種別	器種	時期	法量(cm)		摘要	図	図版
						高さ	幅			
56	3	SD 0 2	須恵器	杯身	古墳後期	5.3	15.3	ヘラ記号。	8	
57	3	SD 0 2	須恵器	鉢	古墳後期	8.6	27.8		8	16
58	3	SD 0 2	須恵器	壺	古墳後期	(10.2)	(31.4)		8	
59	3	SD 0 2	須恵器	高杯	古墳後期	(5.1)	10.4		8	
60	3	SD 0 2	石器	筋錐車	古墳後期	1.7	3.6	滑石製。刻線あり。	8	16
61	3	SD 0 9	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.4	14.4		8	17
62	3	SD 0 9	須恵器	杯身	古墳後期	3.1	10.7		8	17
63	3	SD 0 9	須恵器	杯身	古墳後期	3.8	15.2	内面に叩き目痕。	8	
64	3	SD 0 9	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	16.7		8	
65	3	SD 0 9	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	17.2		8	
66	3	SD 0 9	須恵器	すり鉢	古墳後期	12.7	13.7	底部に一孔。	8	17
67	3	SD 0 9	須恵器	壺	古墳後期	6.8	9.5	底部にヘラ記号。	8	17
68	3	SD 0 9	須恵器	高杯	古墳後期	8.5	12.8		8	17
69	3	SD 0 9	須恵器	壺	古墳後期	(14.1)	30.4		8	
70	3	SD 3 0	須恵器	高杯蓋	古墳後期	5.3	15.6	叩き目痕。ヘラ記号。	9	17
71	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.8	13.6		9	17
72	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	13.6		9	17
73	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.5	14.7		9	17
74	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.9	14.2	内面に叩き目痕。	9	17
75	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.7	14.7	ヘラ記号。	9	17
76	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	15.0		9	
77	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.4	14.1		9	17
78	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.3	14.6	ヘラ記号。	9	18
79	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.7	13.3		9	
80	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.6	13.4	ヘラ記号。	9	18
81	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	14.4		9	18
82	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.5	14.4	ヘラ記号。	9	18
83	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.8	13.8	ヘラ記号。	9	18
84	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.3	14.8	ヘラ記号。	9	
85	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.5	13.5	ヘラ記号。	9	18
86	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.8	13.4	内面に叩き目痕。	9	18
87	3	SD 3 0	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.7	12.8	ヘラ記号。	9	18
88	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	15.2	ヘラ記号。	9	
89	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	3.8	15.2	内面に叩き目痕。	9	18
90	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	(15.1)	ヘラ記号。	9	
91	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.8	14.4		9	
92	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.0		9	
93	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	15.2		9	18
94	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.8	ヘラ記号。	9	
95	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	14.0		9	18
96	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	3.7	14.1		9	
97	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	15.6	ヘラ記号。	9	
98	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	15.4		9	
99	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	14.8		9	18
100	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	15.2	ヘラ記号。	9	
101	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	3.9	14.4		9	18
102	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	15.5		9	18
103	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	13.8		9	
104	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	14.9	ヘラ記号。	9	18
105	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	16.1	ヘラ記号。	9	
106	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	16.1		9	
107	3	SD 3 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	19.4	ヘラ記号。	9	18
108	3	SD 3 0	須恵器	高杯	古墳後期	10.2	15.8	内面に叩き目痕。	10	
109	3	SD 3 0	須恵器	高杯	古墳後期	7.7	12.8		10	19
110	3	SD 3 0	須恵器	高杯	古墳後期	7.2	11.5		10	19

遺物番号	地区	造形・層位	種別	器種	時期	法量(cm)		摘要	図	国版
						高さ	幅			
111	3	SD30	須恵器	鉢	古墳後期	5.8	19.9		10	
112	3	SD30	須恵器	高杯	古墳後期	(6.7)	18.4		10	
113	3	SD30	須恵器	高杯	古墳後期	(6.7)	16.5		10	
114	3	SD30	須恵器	壹蓋	古墳後期	3.9	10.4		10	
115	3	SD30	須恵器	壹蓋	古墳後期	(7.9)	29.1		10	
116	3	SD30	須恵器	壹蓋	古墳後期	3.3	11.0		10	19
117	3	SD30	須恵器	壹	古墳後期	(3.5)	10.9		10	
118	3	SD30	須恵器	壹	古墳後期	10.2	13.1	底面にヘラ記号。	10	19
119	3	SD30	須恵器	鉢	古墳後期	7.8	11.1		10	19
120	3	SD30	須恵器	鉢	古墳後期	10.6	15.6		10	19
121	3	SD30	須恵器	無蓋壹	古墳後期	(7.7)	(25.5)		10	
122	3	SD30	須恵器	壹	古墳後期	(14.0)	32.1		10	
123	3	SD30・SK61交点	須恵器	小型壹	古墳後期	5.6	8.4		10	19
124	3	SD30・SK61交点	須恵器	壹蓋	古墳後期	3.8	13.5		10	19
125	3	SD30・SK61交点	須恵器	高杯	古墳後期	4.0	13.9	ヘラ記号。	10	19
126	3	SK54	須恵器	壹蓋	古墳後期	3.9	13.0		10	
127	3	SK54	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	14.7		10	
128	3	SK54	石器	刃器	縄文	3.4	3.1	サヌカイト製。	10	20
129	3	SD55	須恵器	高杯	古墳後期	17.8	17.0		10	
130	3	SD55	須恵器	高杯蓋	古墳後期	5.8	14.6		11	19
131	3	SD55	須恵器	壹蓋	古墳後期	4.0	13.5	ヘラ記号。	11	
132	3	SD55	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	15.5	ヘラ記号。	11	
133	3	SD55	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	15.0		11	
134	3	SD55	須恵器	カップ	古墳中期	5.2	7.5	初期須恵器。	11	
135	3	SK61	須恵器	杯身	古墳後期	3.6	14.8		11	
136	3	柱穴17	瓦筒	楕	鍾乳後期	3.3	12.3		11	
137	3	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	14.1		11	
138	3	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.7	14.0		11	
139	3	包含層	須恵器	壹	古墳後期	7.3	10.0		11	
140	3	包含層	須恵器	壹	古墳後期	8.3	14.0		11	
141	4	02	須恵器	器台	古墳後期	(9.4)	28.4		32	
142	4	02	須恵器	杯身	古墳後期	4.8	15.3	底面外面にヘラ記号。	32	
143	4	02	石器	石椎	縄文	(2.4)	1.9	サヌカイト製。	32	20
144	4	SD04土器群1	須恵器	杯	奈良	4.7	12.1		32	
145	4	SD04土器群1	須恵器	壹	奈良	8.3	11.0		32	21
146	4	SD04土器群1	須恵器	壹	奈良	(9.3)	45.4		32	
147	4	SD04土器群2	須恵器	壹蓋	奈良	(2.0)	18.1		32	21
148	4	SD04土器群2	須恵器	壹蓋	奈良	2.3	19.0		32	
149	4	SD04土器群2	須恵器	杯	奈良	4.1	13.8		32	
150	4	SD04土器群2	須恵器	提瓶	古墳後期	(6.0)	10.0		32	
151	4	SD04土器群2	須恵器	壹	奈良	(7.0)	10.9		32	21
152	4	SD04土器群2	須恵器	横板	奈良	(17.0)	(28.5)		32	
153	4	SD04土器群2	須恵器	壹	奈良	(15.6)	28.0		32	
154	4	SD04土器群2	須恵器	壹	奈良	(13.3)	22.1		32	
155	4	SD04土器群3	須恵器	壹蓋	奈良	2.3	21.2		32	21
156	4	SD04土器群3	須恵器	杯身	奈良	3.3	18.5		32	
157	4	SD04土器群3	須恵器	杯	奈良	3.6	13.8		32	
158	4	SD04土器群3	須恵器	杯	奈良	4.0	14.5		32	
159	4	SD04土器群3	須恵器	杯	奈良	(3.7)	14.0	井とヘラ書き。	32	21
160	4	SD04土器群3	須恵器	杯	奈良	3.5	18.0	井とヘラ書き。	32	21
161	4	SD04土器群3	上器群	壹	奈良	(9.7)	19.3		33	21
162	4	SD04土器群4	土器群	壹	奈良	(6.1)	(22.8)		33	21
163	4	SD04土器群4	須恵器	横板	奈良	(10.9)	(24.7)	泉とヘラ書き。	33	21
164	4	SD04土器群4	須恵器	杯身	奈良	5.2	15.4		33	21
165	4	SD04土器群4	須恵器	杯身	奈良	7.7	18.8		33	

遺物番号	地区	遺構・層位	種別	器種	時 期	法 直 (cm)		摘要	図	図版
						高さ	幅			
166	4	SD04土器群4	須恵器	杯	奈良	2.3	10.3		33	
167	4	SD04土器群4	須恵器	杯	奈良	4.0	10.4		33	
168	4	SD04土器群4	須恵器	杯	奈良	4.1	14.1		33	
169	4	SD04土器群4	須恵器	杯	奈良	4.9	14.0	井とヘラ書き。ヘラ記号。	33	22
170	4	SD04土器群5	須恵器	鉢	奈良	(14.7)	33.0		33	
171	4	SD04土器群5	須恵器	壺	奈良	(14.6)	15.8		33	22
172	4	SD04土器群6	土師器	杯身	奈良	3.6	23.8		33	
173	4	SD04土器群6	須恵器	皿	奈良	5.9	24.7		33	22
174	4	SD04土器群6	須恵器	杯蓋	飛鳥	(2.5)	(9.5)		33	
175	4	SD04土器群6	須恵器	土錐	奈良	9.6	3.1	110g。両端に孔。	33	22
176	4	SD04土器群6	須恵器	錐?	奈良	(7.6)	8.8	237g。円孔4箇所。	33	22
177	4	SD04土器群6	須恵器	鉢	奈良	(7.1)	52.0	体部に一孔。	33	
178	4	SD04土器群6	須恵器	すり鉢	奈良	(2.2)	13.4		34	22
179	4	SD04土器群6	須恵器	杯	奈良	(1.9)	(15.7)	漢字二文字。	34	22
180	4	SD04土器群6	須恵器	壺蓋	奈良	2.1	12.2		34	
181	4	SD04土器群6	須恵器	壺蓋	奈良	3.1	16.4		34	
182	4	SD04土器群6	須恵器	杯身	奈良	5.6	16.8		34	
183	4	SD04土器群6	須恵器	杯身	奈良	5.5	16.8		34	
184	4	SD04土器群6	須恵器	すり鉢	奈良	(9.2)	19.4		34	
185	4	SD04土器群6	須恵器	鉢	奈良	(9.2)	52.0	外面部格子叩き。	34	
186	4	SD04土器群6	須恵器	收	奈良	(12.1)	14.3		34	22
187	4	SD04土器群6	須恵器	壺	奈良	(20.6)	24.0	美濃製。	34	23
188	4	SD04A区 中層	須恵器	高杯	奈良	(6.2)	7.8		34	22
189	4	SD04A区 中層	須恵器	壺	奈良	(8.5)	8.2	底部外面に糸切り痕。	34	22
190	4	SD04A区 中層	石器	楔形石器	縄文	3.5	3.1	サヌカイト質。	34	20
191	4	SD04B区 上層	須恵器	壺	奈良	(12.5)	13.6		34	
192	4	SD04C区 上層	須恵器	壺	奈良	3.8	21.1		34	23
193	4	SD04C区 上層	須恵器	杯	奈良	4.1	14.4		34	23
194	4	SD04C区 中層	須恵器	杯蓋	奈良	2.8	17.5		34	23
195	4	SD04C区 中層	須恵器	杯	奈良	3.4	12.8		34	
196	4	SD04C区 中層	須恵器	壺蓋	古墳後期	2.8	9.2		34	
197	4	SD04C区 中層	須恵器	杯身	飛鳥	3.7	12.2		34	
198	4	SD04C区 中層	須恵器	陶棺	古墳後期	(10.4)	(14.3)	生焼け。内面布目質。	34	23
199	4	SD04C区 中層	須恵器	杯	奈良	(4.4)	(17.0)	井とヘラ書き。	35	23
200	4	SD04C区 中層	須恵器	杯	奈良	(1.6)	(11.4)	丸とヘラ書き。	35	23
201	4	SD04C区 中層	須恵器	杯	奈良	3.5	15.0		35	
202	4	SD04C区 中層	須恵器	杯	奈良	(3.3)	(3.3)		35	23
203	4	SD04C区 中層	須恵器	はそう	古墳後期	(13.4)	(12.9)		35	
204	4	SD04C区 中層	須恵器	はそう	古墳後期	(9.4)	8.5	底部外面にヘラ記号。	35	
205	4	SD04C区 中層	須恵器	高杯	奈良	(17.7)	(30.7)	生焼け。	35	23
206	4	SD04C区 中層	土器群	壺	奈良	(7.2)	(19.8)		35	
207	4	SD04C区 中層	須恵器	鉢?	奈良	(3.9)	(39.0)	体部外面に刺り込み。	35	23
208	4	SD04C区 中層	須恵器	鉢	奈良	10.7	36.2		35	23
209	4	SD04C区 最下層	上等器	高杯	奈良	(12.7)	(10.1)		35	24
210	4	SD04D区 中層	須恵器	杯	奈良	3.2	18.3		35	24
211	4	SD04D区 中層	須恵器	鉢	奈良	9.9	17.5		35	
212	4	SD04D区 中層	須恵器	杯身	奈良	(2.3)	(18.7)	底部外面に爪跡。	35	
213	4	SD04E区 中・下層	須恵器	有茎鉢	奈良	(13.4)	31.3	器台?	36	21
214	4	SD04E区 中・下層	須恵器	鉢	奈良	4.1	9.5		36	
215	4	SD04E区 中・下層	須恵器	すり鉢	奈良	(2.9)	10.5		36	
216	4	SD04E区 中・下層	須恵器	杯	奈良	4.4	15.2		36	
217	4	SD04E区 中・下層	須恵器	鉢	奈良	9.2	40.0		36	
218	4	SD04F区 中・下層	石器	石庖丁	弥生中期	11.2	23.0	緑色片岩。未製品。	36	20
219	4	SD04F区 中層	石器	石庖丁	弥生中期	6.3	12.6	緑色片岩。未製品。	36	20
220	4	SD04F区 中層	須恵器	杯	奈良	(4.9)	(5.2)	漢字?をヘラ書き。	36	24

遺物番号	地区	遺物・層位	種別	器種	時 期	法量 高さ 幅(cm)	摘要		圖	図版
							高さ	幅		
221	4	SD04F区 中層	須恵器	杯蓋	奈良	(3.5) 30.0			36	
222	4	SD04F区 中層	須恵器	杯	奈良	1.8	15.2		36	
223	4	SD04F区 中層	須恵器	杯	奈良	4.0	13.4		36	
224	4	SD04F区 中層	須恵器	鉢	奈良	9.9	35.5		36	
225	4	SD04F区 中層	須恵器	すり鉢	奈良	16.4	20.8		36	24
226	4	SD04F区 中・下層	丸器	丸瓦	奈良	(15.8) (11.6)		内面布目。	36	24
227	4	SD04F区 中・下層	石器	石庖丁	弥生中期	4.0	(7.5)	緑色片岩。未製品。	36	20
228	4	SD04F区 中・下層	須恵器	壺	奈良	(13.3) 25.6		体部に沈線。	37	24
229	4	SD04F区 中・下層	須恵器	壺	奈良	5.7	11.3		37	24
230	4	SD04F区 中・下層	須恵器	すり鉢	奈良	16.0	19.5		37	24
231	4	SD04F区 中・下層	須恵器	すり鉢	奈良	(8.5) (13.0)			37	24
232	4	SD04F区 中・下層	須恵器	縹瓶	奈良	(29.6) (30.2)			37	25
233	4	SD04F区 中・下層	須恵器	縹瓶	奈良	41.5	56.4		37	25
234	4	SD04F区 中・下層	須恵器	壺	奈良	(12.4) (31.4)			38	
235	4	SD04F区 中・下層	須恵器	壺	奈良	(10.2) (33.7)			38	
236	4	SD04F区 中・下層	須恵器	壺	奈良	25.3	29.8	体部に沈線。	38	25
237	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	2.9	13.4		38	
238	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	3.1	17.3		38	
239	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	3.5	19.0		38	25
240	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	1.7	20.5		38	
241	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯	奈良	4.7	13.6		38	
242	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯	奈良	3.8	12.6		38	
243	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.5	17.1		38	
244	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.2	18.6	内面にヘラ記号。	38	
245	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.3	19.8		38	
246	4	SD04F区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	(1.9) (21.1)			38	
247	4	SD04G区 中・下層	須恵器	壺	奈良	(12.2) 22.1			38	25
248	4	SD04G区 中・下層	須恵器	大型鉢	奈良	41.2	53.9		39	26
249	4	SD04G区 中・下層	須恵器	大型鉢	奈良	(24.0) 58.0			39	26
250	4	SD04G区 中・下層	須恵器	大型鉢	奈良	23.6	41.4		39	26
251	4	SD04G区 中・下層	須恵器	壺	奈良	(19.0) 33.4		体部に沈線。	40	26
252	4	SD04G区 中・下層	須恵器	平瓶	奈良	(11.0) (21.7)		底部外面にゲタ痕。	40	27
253	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	(6.7) (9.2)		上面にヘラ書き文様。	40	27
254	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	2.8	14.4	内面にヘラ記号。	40	27
255	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	2.4	14.0		40	
256	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	3.0	20.1		40	27
257	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯蓋	奈良	4.0	19.1		40	
258	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	4.3	13.8		40	
259	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	4.3	14.2		40	
260	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.4	17.5		40	
261	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	6.2	17.4		40	
262	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.6	18.0		40	
263	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	5.7	18.8		40	
264	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	6.9	20.8		40	
265	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯	奈良	1.7	16.2		40	
266	4	SD04G区 中・下層	須恵器	杯身	奈良	3.5	26.7		40	27
267	4	SD04 帷1	須恵器	杯身	奈良	5.3	16.7		40	
268	4	SD04 帷1	須恵器	杯身	奈良	5.6	15.0		40	27
269	4	SD04 帷2	土師器	高杯	奈良	(13.6) (9.3)			40	27
270	4	SD04 帜2	製塗器	鉢	奈良	(4.2) 11.8			40	27
271	4	SD04 帜2	須恵器	杯身	奈良	5.8	17.5		41	
272	4	SD04 帜4	須恵器	杯	奈良	4.5	14.0		41	
273	4	SD04 帜4	須恵器	杯身	奈良	5.4	15.0		41	
274	4	SD04 帜4	須恵器	杯	奈良	1.9	16.6		41	
275	4	SD04 帜4	須恵器	杯	奈良	1.7	17.5		41	27

遺物番号	地区	造形・層位	種別	器種	時 期	法量 (cm)		捕 要	国	同版
						高さ	幅			
276	4	SD04 眼4	上部器	高杯	奈良	(13.1)	(7.3)		41	27
277	4	SD17 最上層	須恵器	縹	奈良	(16.5)	(21.4)	厚さ3.7cm。生焼け。	41	27
278	4	SD17 最上層	須恵器	縹	奈良	(14.5)	(14.0)	厚さ2.3cm。生焼け。	41	27
279	4	SD17	須恵器	縹	奈良	30.2	(29.8)	厚さ2.7cm。生焼け。	41	27
280	4	SD17	須恵器	不明	奈良	(8.1)	(6.9)	厚さ1.7cm。	41	27
281	4	SD17	須恵器	不明	奈良	(14.0)	(11.3)	厚さ2.2cm。	41	27
282	4	SD17	須恵器	壺	奈良	(11.8)	15.8		41	
283	4	SD17	須恵器	壺	奈良	(5.4)	(6.7)		41	28
284	4	SD17	須恵器	壺	奈良	8.6	3.2		41	28
285	4	柱穴198	須恵器	杯身	古墳後期	3.4	14.3	底部外面にヘラ記号。		
286	4	包含層	須恵器	すり鉢	奈良	10.5	14.3		41	28
287	4	SK48	石器	砥石	鎌倉後期	(7.9)	3.8	凝灰岩製。	49	20
288	4	SK48	石器	砥石	鎌倉後期	(3.3)	2.9	泥岩製。	49	20
289	4	SK48	土師器	小皿	鎌倉後期	1.1	7.9		49	28
290	4	柱穴104	須恵器	杯蓋	奈良	3.1	15.0		49	28
291	4	SK529	土師器	小皿	鎌倉後期	1.5	7.2		49	28
292	4	SK529	瓦器	碗	鎌倉後期	3.1	11.0		49	28
293	4	SK529	瓦器	碗	鎌倉後期	2.8	9.8		49	
294	4	SK529	須恵器	ねり鉢	鎌倉後期	(7.4)	27.8	束縛製。	49	
295	4	SK529	石器	砥石	鎌倉後期	(10.7)	4.7	凝灰岩製。	49	20
296	4	SK572	土師器	小皿	鎌倉後期	1.4	6.8		49	28
297	4	SK575	丸器	碗	鎌倉後期	2.5	10.6		49	28
298	4	SK598	丸器	碗	鎌倉後期	2.7	11.0		49	28
299	4	SK598	瓦器	碗	鎌倉後期	2.9	10.6		49	28
300	4	SK598	瓦器	碗	鎌倉後期	2.4	10.6		49	28
301	4	SK598	瓦器	碗	鎌倉後期	(1.7)	(10.1)		49	
302	4	SK598	土師器	小皿	鎌倉後期	1.1	7.4		49	28
303	4	柱穴622	瓦器	碗	鎌倉後期	(2.9)	11.6		49	
304	4	柱穴622	土師器	小皿	鎌倉後期	1.6	7.4		49	28
305	4	SD644	土師器	へそ皿	南北朝～室町	1.6	9.2		49	28
306	4	SD644	瓦質土器	すり鉢	南北朝～室町	14.6	33.0		49	28
307	4	SD645	土師器	皿	鎌倉後期	1.9	9.9		49	28
308	4	柱穴654	土師器	羽釜	鎌倉後期	(12.1)	31.3		49	28
309	4	SD671	瓦質土器	羽釜	鎌倉後期	(16.4)	35.4		49	28
310	4	SD671	土師器	羽釜	鎌倉後期	(7.6)	32.4		49	
311	4	柱穴756	須恵器	蓋	奈良	(3.2)	14.2		49	
312	4	SD671	瓦質土器	羽釜	鎌倉後期	(10.4)	24.6		50	28
313	4	SD671	瓦質土器	羽釜	鎌倉後期	(19.3)	30.7		50	28
314	4	SD671	土師器	羽釜	鎌倉後期	(10.0)	29.4		50	
315	4	SD671	瓦質土器	羽釜	鎌倉後期	(10.4)	32.4		50	
316	4	SD671	瓦質土器	羽釜	鎌倉後期	(13.9)	32.4		50	
317	5	SD001	弥生土器	壺	弥生中期	(4.5)	(18.3)		51	29
318	5	SD001	弥生土器	壺	弥生中期	(3.1)	(5.4)		51	29
319	5	SD001	須恵器	杯身	古墳後期	3.9	15.8	ヘラ記号。		
320	5	SD001	須恵器	杯身	古墳後期	2.8	15.3		51	
321	5	SD001	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	15.3		51	
322	5	SD001	須恵器	壺	奈良	(11.2)	21.6		51	29
323	5	SD001	須恵器	壺	古墳後期	(4.2)	20.0		51	
324	5	SD001	須恵器	焼き台	古墳後期	4.1	7.4		51	
325	5	SD001	須恵器	壺	古墳後期	6.4	10.6		51	
326	5	SD001	周器	盤	安土桃山	(4.6)	(5.3)	華南二彩。	51	29
327	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	13.2		51	
328	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	13.6	外面に刷毛目痕。	51	29
329	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.6	14.4	外面に刷毛目痕。	51	
330	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.5	15.0		51	

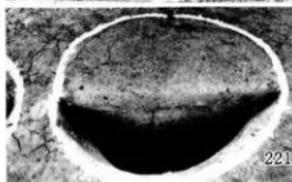
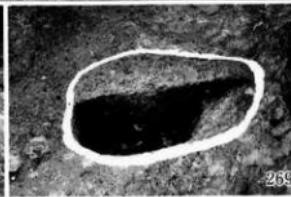
遺物番号	地区	遺構・層位	種別	器種	時 期	法量 (cm)		摘要	図	図版
						高さ	幅			
331	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.0	14.7		51	
332	5	包含層	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.2	15.7	ヘラ記号。	51	
333	5	包含層	須恵器	蓋蓋	古墳後期	3.4	10.1		51	
334	5	包含層	須恵器	杯	奈良	(3.5)	(3.4)	漢字?をヘラ書き。	51	29
335	5	包含層	須恵器	高杯	古墳後期	8.5	11.8		51	29
336	5	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.1	14.2	ヘラ記号。	51	
337	5	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.0	13.0	内面に朱斑。	51	
338	5	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	3.6	12.6		51	29
339	5	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	13.4		51	29
340	5	包含層	須恵器	杯身	古墳後期	4.3	16.0		51	
341	5	包含層	須恵器	壺瓶	古墳後期	(7.7)	7.4	外面にヘラ記号。	51	29
342	5	包含層	須恵器	焼き台	古墳後期	4.7	10.2	円孔。	51	
343	5	包含層	須恵器	杯蓋	奈良	2.3	21.6		51	
344	5	包含層	須恵器	蓋	奈良	(4.8)	29.3		51	29
345	5	SK 0 4	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.1	15.0	叩き目痕。	51	
346	5	SK 0 4	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.9	15.6		51	30
347	5	SK 0 4	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	14.5	ヘラ記号。	51	
348	5	SK 0 4	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	13.0	ヘラ記号。	51	
349	5	SK 0 4	須恵器	杯身	古墳後期	4.6	13.6	内面に叩き目痕。	51	
350	5	SK 0 4	須恵器	杯身	古墳後期	4.8	13.5		51	30
351	5	SK 0 4	須恵器	高杯蓋	古墳後期	9.1	22.4		52	30
352	5	SK 7 6	須恵器	杯蓋	飛鳥	5.7	18.6		52	30
353	5	SK 9 4	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	15.3		52	
354	5	柱穴 2 4 3	須恵器	はそう	古墳後期	(8.5)	9.9	底部にヘラ記号。	52	30
355	5	柱穴 2 4 4	須恵器	壺	古墳後期	6.3	10.8		52	30
356	5	SD 3 4 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.6	14.3		52	
357	5	SD 3 4 0	須恵器	杯身	古墳後期	4.5	15.0		52	
358	5	SD 3 4 0	須恵器	焼き台	古墳後期	4.0	14.0		52	31
359	5	SD 3 4 0	須恵器	台付壺	古墳後期	25.8	16.1		52	31
360	5	SD 3 4 1	須恵器	焼き台	古墳後期	3.9	10.3	体部に穿孔。	52	31
361	5	SD 3 4 1	須恵器	はそう	古墳後期	(12.1)	17.0		52	31
362	5	SD 3 4 1	須恵器	壺蓋	古墳後期	3.2	7.7		52	31
363	5	SD 3 4 1	須恵器	高杯蓋	古墳後期	4.7	14.6	割込み目。	52	
364	5	SD 3 4 1	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.6	13.0		52	
365	5	SD 3 4 1	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.3	14.1	ヘラ記号。	52	
366	5	SD 3 4 1	須恵器	杯蓋	古墳後期	3.8	14.1		52	
367	5	SD 3 4 1	須恵器	はそう	古墳後期	(14.2)	9.8		52	31
368	5	SD 3 4 1	須恵器	はそう	古墳後期	(12.8)	9.2		52	31
369	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	3.8	15.2	ヘラ記号。	52	31
370	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	4.2	14.3		52	31
371	5	SD 3 4 1	須恵器	壺	古墳後期	7.7	12.0		52	31
372	5	SD 3 4 1	須恵器	高杯	古墳後期	8.3	12.4		52	31
373	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	3.6	14.0		52	
374	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	4.4	14.5		52	
375	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	3.5	14.8		52	
376	5	SD 3 4 1	須恵器	杯身	古墳後期	4.9	15.5		52	
377	5	SK 3 4 6	須恵器	杯蓋	古墳後期	5.1	16.0	内面に叩き目痕。	53	31
378	5	SK 3 6 6	須恵器	壺蓋	古墳後期	3.8	8.1		53	31
379	5	SK 3 6 6	須恵器	杯蓋	古墳後期	4.4	16.0	ヘラ記号。	53	
380	5	SK 3 6 6	須恵器	壺	古墳後期	(8.7)	(18.7)		53	
381	5	SK 175	瓦器	壺	鋸齒後期	3.5	11.5		53	31
382	5	SK 175	瓦器	壺	鋸齒後期	3.4	12.4		53	

# 図 版

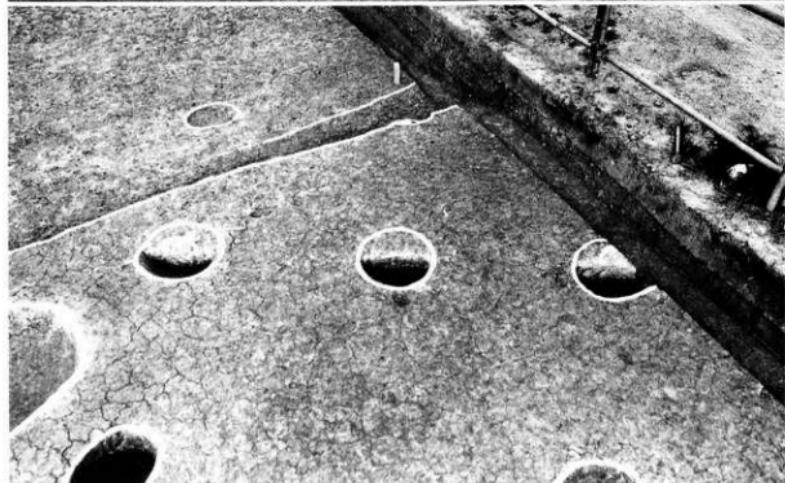
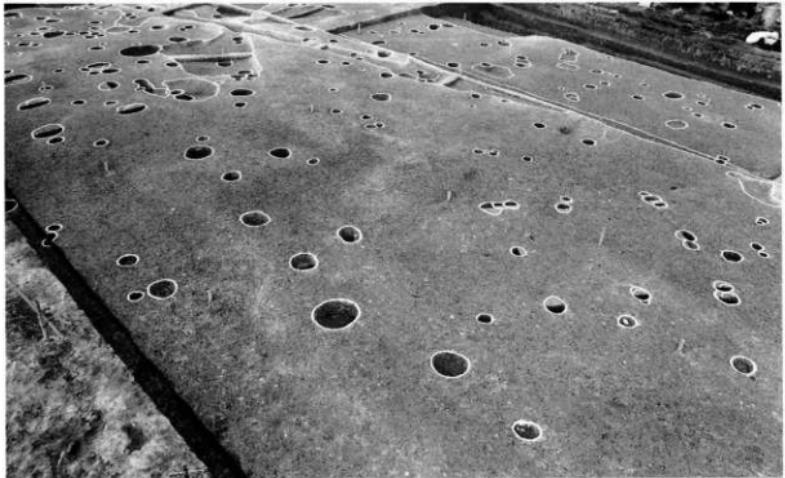


調査地北東方上空より大阪湾を望む

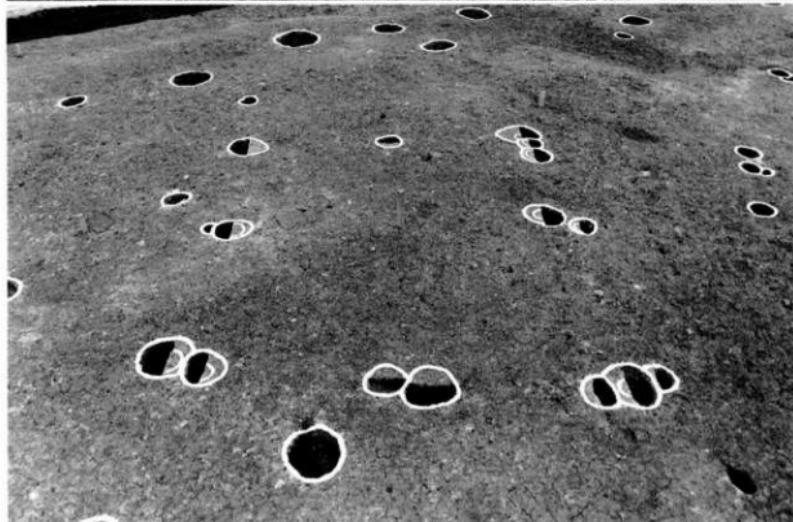
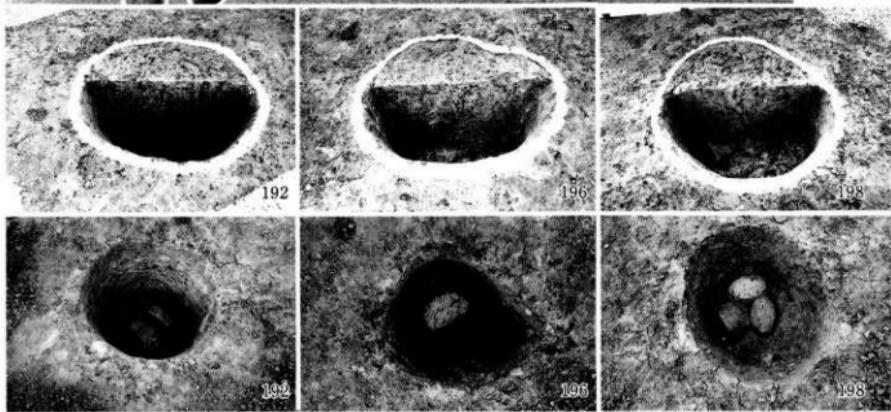
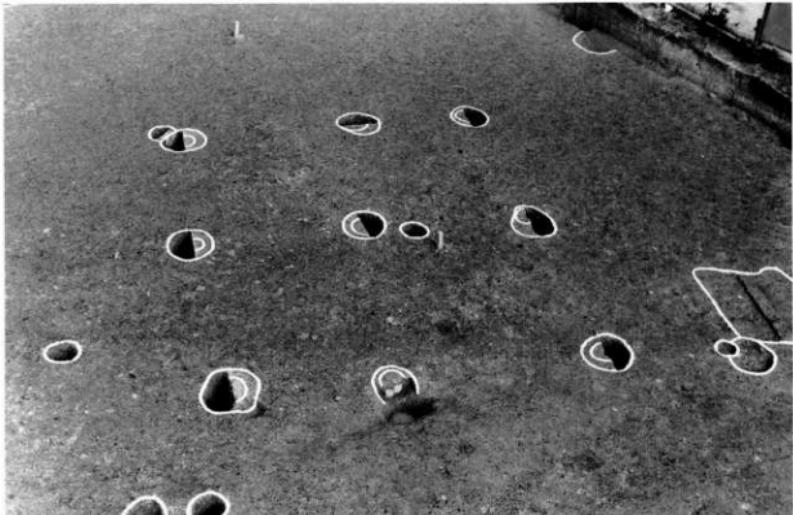




S B 05 柱穴断面

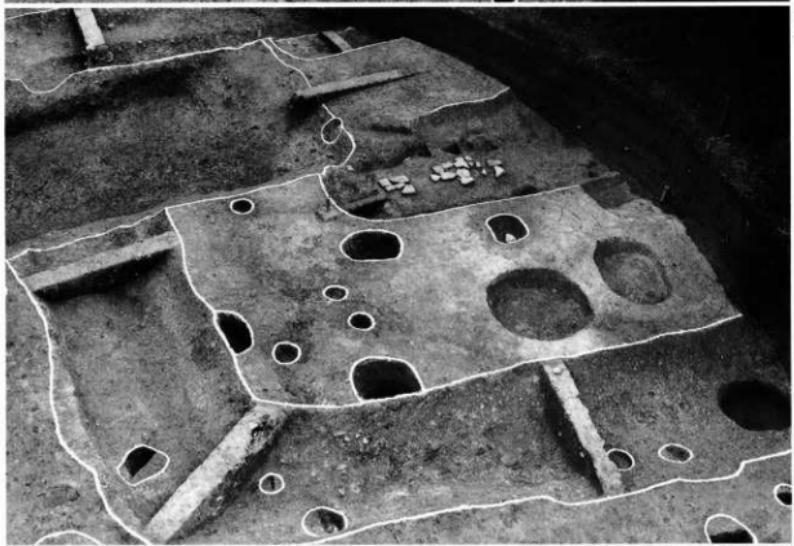
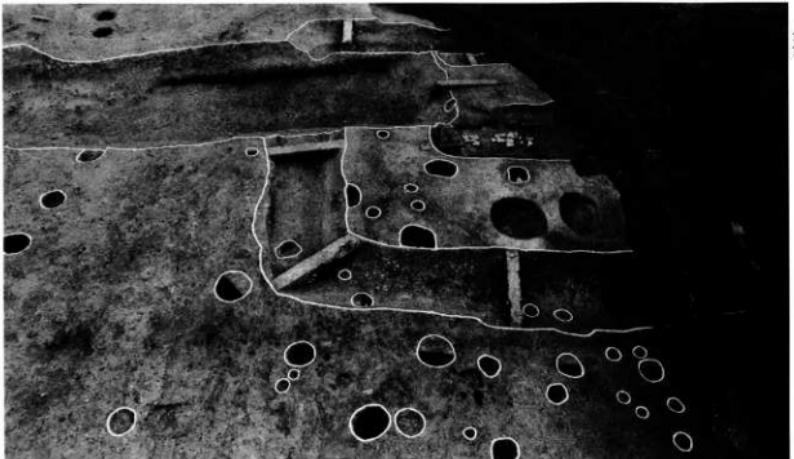


SB02及び柱状断面、根石出土状況



図版五 4区古墳

同上

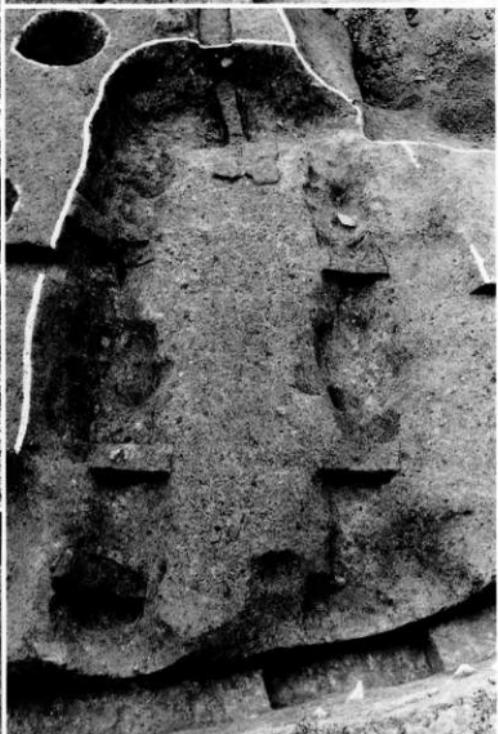
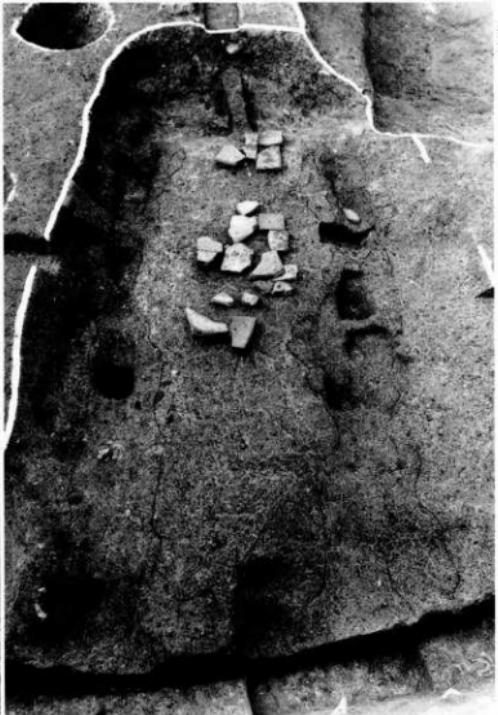
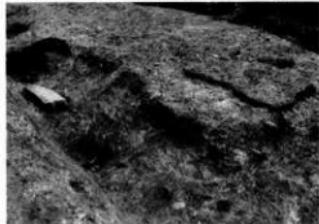
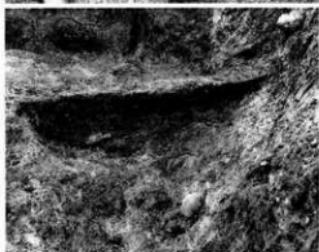
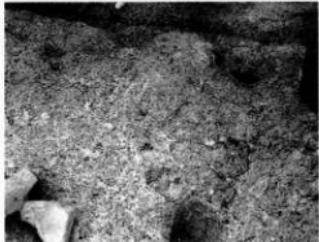


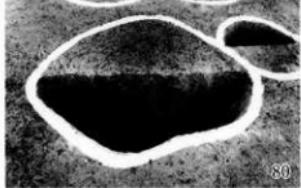
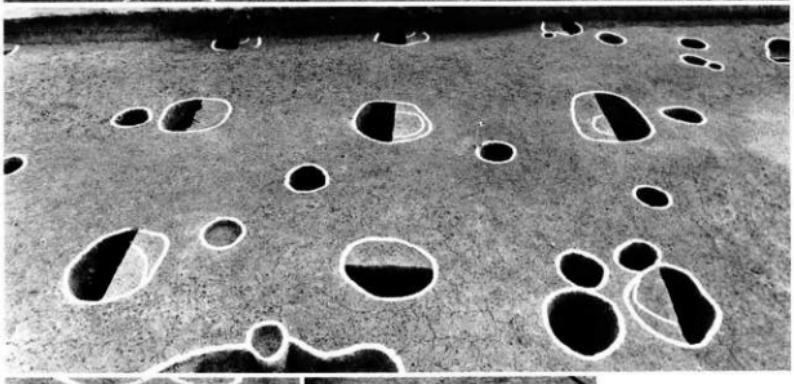
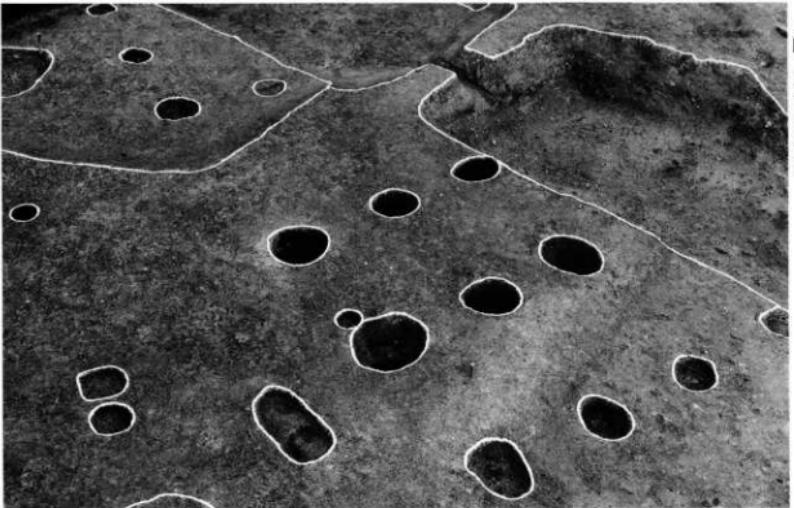
周溝と鹿苑



4区古墳主体部

陸溝字相狀況



5区  
S B 05

80



86



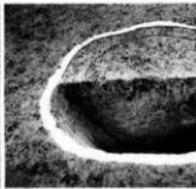
5区 S B 05柱穴断面



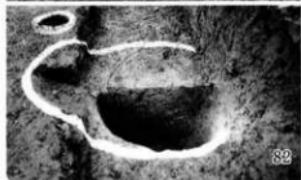
81



84



87



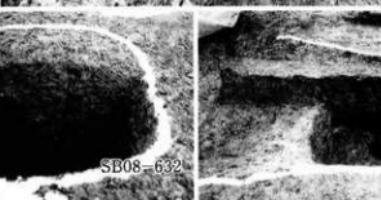
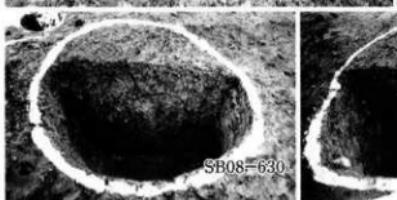
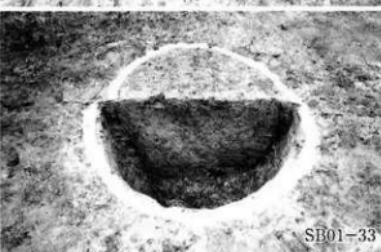
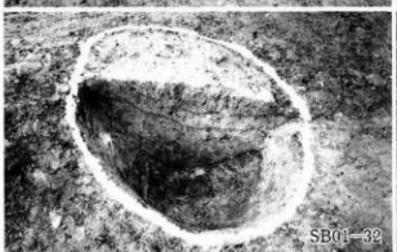
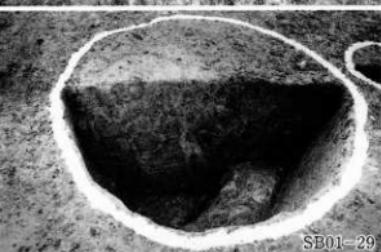
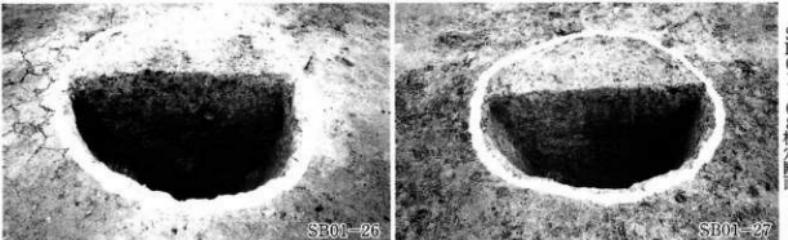
82

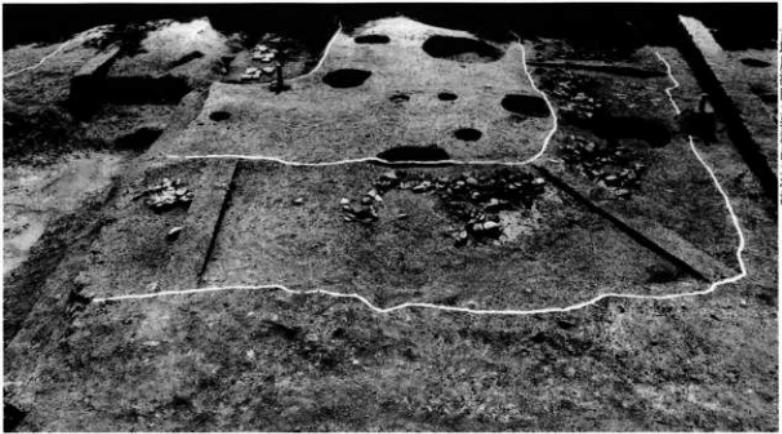


85



88







SB07



同上



SB06

図版一  
4区



SB09



SD6444土層断面



SK5598

図版二一 4区遺物出土状況



SK529



SD671



全景



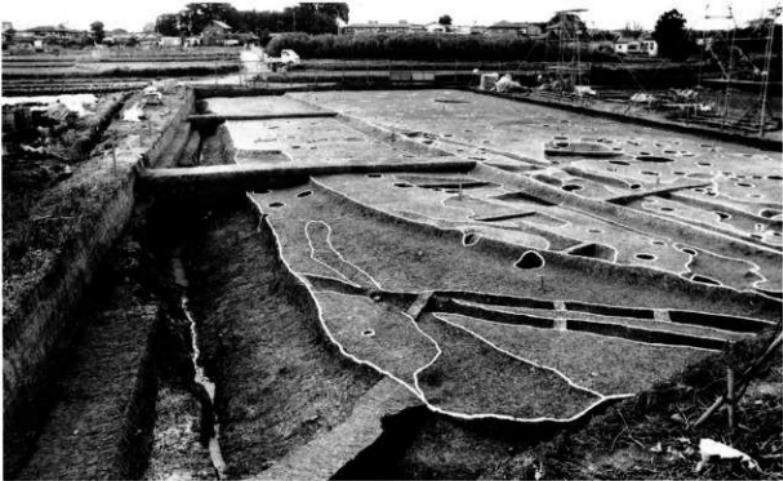
図版一三  
4区SD17

土層断面



同上







1



2



2



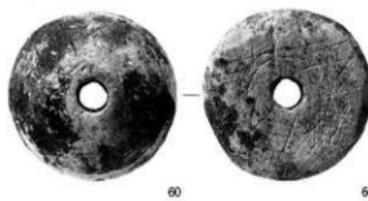
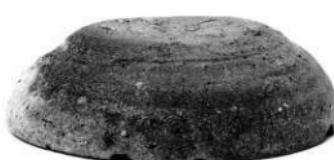
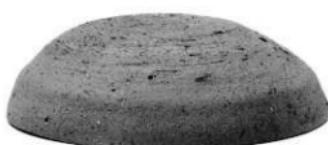
6



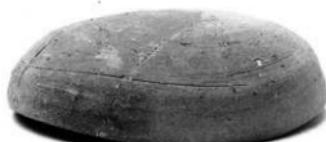
17



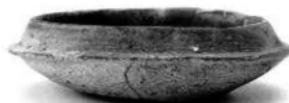
26



圖版一七 3區出土遺物



61



62



66



68



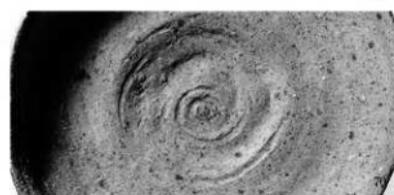
67



70



73



74



71



75



72

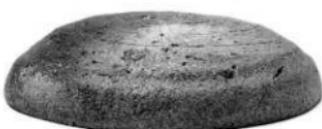


77

圖版一八  
3區出土遺物



78



80



81



82



83



85



86



87



89



93



95



99



101



102



104



107



109



110



116



123



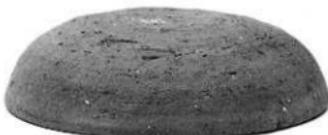
118



122



119



124



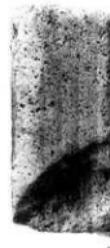
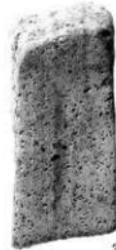
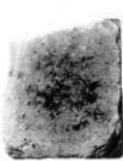
120



125

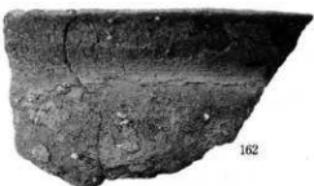


130





145



162



147



161



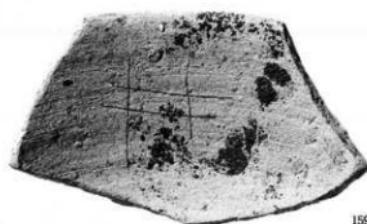
151



163



155



159

160

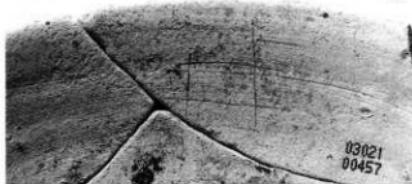


163

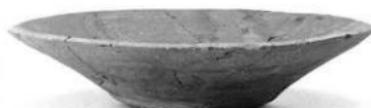


164

169



173



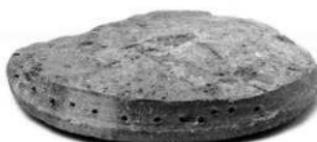
175



176



171



178



179



178



186



188



189



187



192



193



194



199



200



198



195



202



207



205



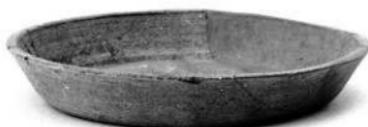
208



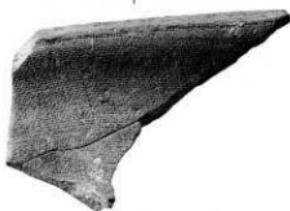
209



226



210



226



213



228



220



229



230



225



231



232

232



233



236



237



239



248



249



249



251



252



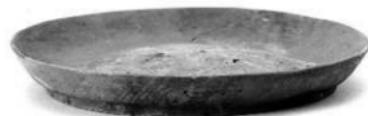
253



254



256



266



268



275



270



277



278



276



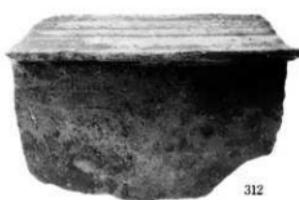
279



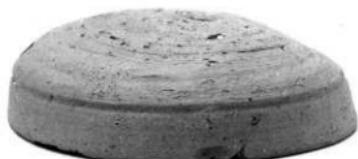
280



281







346



350



351



352



354



355



368



360



359



361



362



367



368



369



371



370



372



377

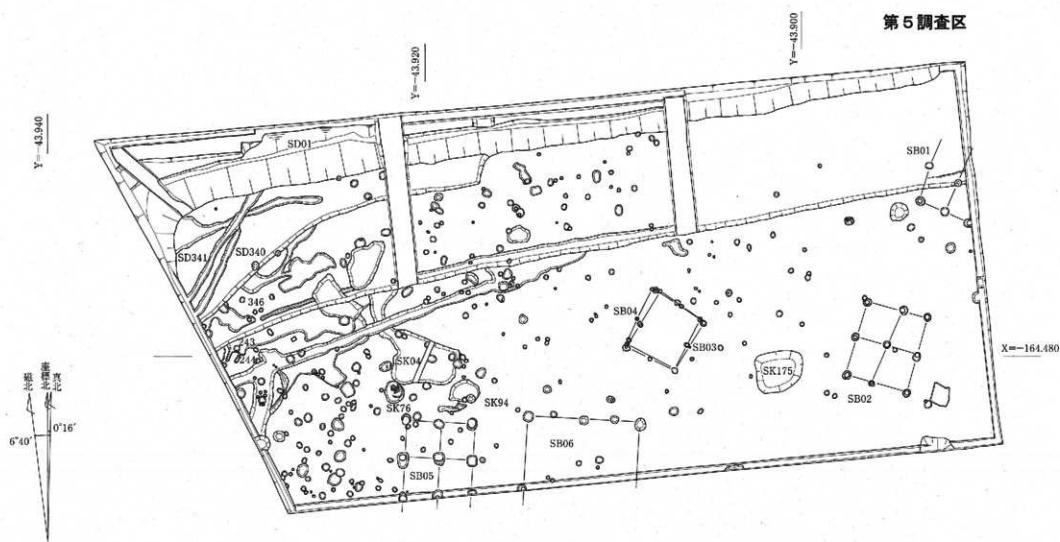


378

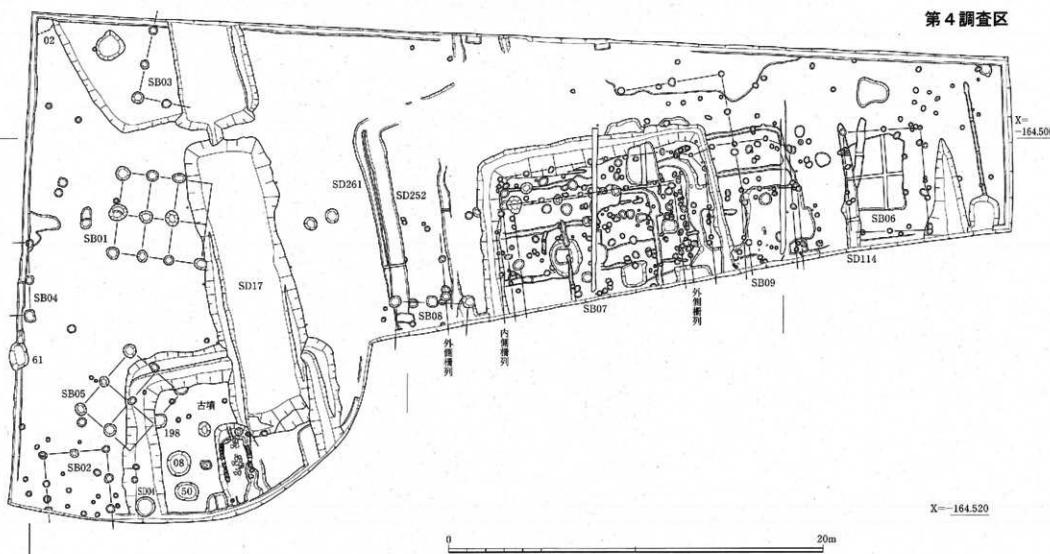


381

第5調査区



第4調査区



付図 4区・5区造構全体図 (1/200)

# 報告書抄録

ふりがな	とうきせんづか・とうきいせきはっくつちょうさがいよう							
書名	陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要							
副書名	府営集落基盤整備事業（陶器北地区）に伴う							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高島徹・西口陽一・山田隆一							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡					
陶器千塚・ 陶器遺跡	大阪府堺市 陶器北	27201	130 183	34° 31' 04"	135° 31' 15"	2004年7月10日 ~ 2004年12月26日	1,652	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
陶器千塚・ 陶器遺跡	古墳・集落	古墳時代後期	掘立柱建物 古墳	須恵器		古墳主体部横穴式 木芯室 磚敷		
		奈良時代	掘立柱建物	須恵器・土師器・ 文字線刻須恵器		線刻文字「泉」		
		鎌倉時代	屋敷地	瓦器・土師器		周濠を伴う屋敷地跡		

## 陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要 -府営集落基盤整備事業「陶器北地区」に伴う-

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2005年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL 06-6976-8761

